

振り亂して家の中へ入つて来た。グアシャは木箱のお化けが来たと思つて懐へ上つて客間へ逃げ込む。タチアナ・ポリソヅナも喫驚して立ち上らうとしたが、足がすくんで動かない。

「タチアナ・ポリソヅナさま、」とこの來客は願ふ様な聲で初めた。「無様で失禮では御坐いますが私は貴女のお友達のアレキシ―ニコラエ、ツイチの姉で御座います。お噂はもう始終弟から承はつて居りますので是非何うかお昵懇になつて頂きたいと思つて上つたので御座います。」

「それはまあ好うこそ。」タチアナは呆氣に取られて口籠つた。

姉といふのは帽子を取つて髪をフサ／＼させ乍ら、タチアナ・ポリソヅナの側に座つてその手を取つた。……「あゝこの方だ！」と感情の満ちた聲を沈ませ、この方こそ、あの優しい結構な心の清らかな立派な方に相違ない。確かにこの方だ。ほんにまあ、隔てのない親切な方だこと！嬉しいわ私嬉しいわ。ねえお互に仲好くしませうねえ。あゝやつと氣が落ち付きました。……私はいつもこんな好い方に相違ないと想像して居ましたんですよ。」タチアナ・ポリソヅナの顔からも放さず囁くやうに又付け足して、「あら、貴女怒つて被在るんぢやありませんの？」

え、貴女！。

「何う致しまして。眞個に喜んで居ますわ。……あの貴女お茶を召し上りませんか。」

すると客は得意になつて莞爾した。

「Wie wahr, wie unrecht!」(ほんに打ち解けた何んて取りつくりひのない方なのだらうと一人語のやうに彼の女は答へて。「何卒、貴女を抱かして下さいな。」)

老嬢は三時間と云ふもの、打ち續けに喋り通して、切りに自分のえらい事をこの新らしい友達に知らせようと努めた。この突然なお客の歸るのを待ち兼ねて、困り果てた主婦は風呂に入つて、レモン水を呑むと直ぐ臥床に入つた。

併し次の日、老嬢は又やつて来て、四時間ばかりも話し込んだ擧句、これからは毎日タチアナ・ポリソヅナに逢ひに来ると約束して行つた。察するにこの女の語を借りて云へば自分は天分の豊かなこの婦人に教育を加へて完全な者にしてやりたいと云ふ氣であつたらしいが、タチアナに取つてはそれが全く疫病神に見込まれた様なものであつた。併し幸ひなどに、第一には二週間許りする中に、タチアナの心が全然解つたのと、第二には此女が此近邊に遊びに来た若い學生と戀中になつて直ぐに自

分から烈しい手紙の取り遣りを盛んに初めて、その男を以て尊き神聖なものとなしよく言ふ極り文句であるが、自分の一身は犠牲にしても厭はぬといふ事やら只願くは姉と呼んで下さいといふ事などを其手紙に書き更に進んで自然の偉大なる事を喋々し果ては、ゲーテやシルレル、ベツテイナの文學獨乙の哲學論まで引つ張り出して、どう〜可哀さうにも若い男を夢中になるほど迷はずやうな事になつたので、チアナは災難を免れたのである。併し若い男はやがてその真相を觀破つた。即ち男はある美しい朝、ふと夢から醒めて、これ迄彼の女が姉と云つてくれとか、貴女の一番の親友だとか云つて居た言葉に對して、堪らない程憎みを覺えた。それがために怒つて八ッ當りに給仕を酷い目にあはせ、それから云ふもの長いこと、神聖な純潔な愛など、云ふ事は一言聞いても腹が立つてたまらない様になつた。

こんな事があつてから以來、チアナ・ポリソヅナは一層近所の婦人達と親しくするのを避ける様になつた。

併し悲しいことに、この世の何ものか長へに變らぬものがあらうか？ 今迄私の話した親切な小母様としての生涯の事は已に過去の事である。この婦人の一家に宿つた平和は、永久に破られて仕舞つたのだ。といふのは一年以上も前から、その甥の畫

家が、ペテルブルグから来て、一所に住んで居たのだが、それは次の様な譯で、さうなつたのである。

八年前のこと、チアナ・ポリソヅナの許に一人の孤兒が住んで居た。この婦人の兄の遺形見で、アンドリユーシヤと云ふ十三になつた男の子であつた。アンドリユーシヤは目の大きくバツチリして雷ひのある、口元の可愛らしい鼻筋の通つた廣い綺麗な額をした子で、聲までが低く優しく、客には能く氣を配つて機嫌を外らす様なことはなく、何となく親なし子の氣を兼ねた様な優しさを以て叔母さん〜とチアナに密附いて居た。若し誰か訪ねていも行かうものなら逸早く客間に椅子を列べる。彼れは他の子供の様に悪戯もせず、騒がしくもせず、本を持つて室の隅へ行つて、キッチンと行儀よく座つて椅子に慥れ掛ることをさへしなかつた。お客さんが來ると、アンドリユーシヤは直ぐ立ち上つて莞爾笑みを作つて、ポツと顔を紅くする。客が歸ると又元の所に座つて隠袋から刷毛と鏡とを取り出してその髪を撫でる。

彼れは小さい時から畫心があつて、いつも紙片を見付けると直ぐに女中頭のアガフヤに頼んで剪刀を借り、その紙を注意して四角に切つて、その周圍に縁を取つて仕事に掛る。瞳孔の大きな目を書いたり、希臘形の鼻を書いたり、又煙突の付いた家を

書いてその頬突からは抜栓子のやうな形をして煙の吹き出て居る處を書いた。又その前面に腰掛かと思はれるやうな犬と、二疋の鳩のとまつた木などを書いて、それに慫う落款をした。「某年某日、マリヤブリキ村のアンドレイビエロフゾロフ書」と。

彼はタチアナ・ポリソフナの誕生日に近くなると、二週間も前から一生懸命に仕事をした。先づ第一にお祝ひの辭を云ふのは此の子で、それから石竹色のリボンで結んだ紙の巻物を叔母さんに贈る。タチアナ・ポリソフナは甥に接吻をして、その結び目を解く。解くと中からは人の目を引き付ける様な一幅の繪が表はれる。セビアを以て大膽に寫し取つた丸形の殿堂で圓柱のある中央には祭壇を設け、祭壇には燃えて居る心臓と花束を飾つた。その上の方に波形の花押を以てはつきりとした文字が記されてある。「私の最も深い愛の記號として、わが恩人なる叔母さん、タチアナ・ポリソフナ・ボグダノウ様に呈す。忠順なる親しき甥より」と。これを見ると、タチアナ・ポリソフナは更に接吻をして、一留の銀貨を與へる。併し何うも心から甥を愛する氣にはなれなかつた、アンドリユーシアの媚びるやうな様子が全く氣に入らなかつたのだ。

さうかうする中に、アンドリユーシアはずん／＼成人くなつた。タチアナ・ポリソフ

フナはその將來が氣掛りになり出した。併し丁度この時思ひも寄らぬ事で一先づ安心するやうな事が起つた。

これも八年前のことだが、或る日胸に勳章を輝かした大學評議員のピョートル・ミハリツチ、ベネツオレンスキー氏と云ふ人が訪ねて來た。ベネツオレンスキー氏と云ふのは嘗つてこの近くの田舎町に官吏をして居たが、その頃は足繁くタチアナ・ポリソフナの所へ遊びに來たものだ。其後ベテルブルグへ轉住つて中央政府に入り可なり重要な地位を占めることになつた。それで幾度も公用で旅をするが今度この地方へ出張の途昔の友達を想ひ出して、かの懐かしい「自然の平和の懷ろ」に、二日ばかり公務の疲勞を休めようものと突然この婦人の處に訪ねて來たのだ。タチアナ・ポリソフナは昔に變らず赤心を以て彼れを迎へた。そしてベネツオレンスキー氏も……併しこの話を進める前に私は新たに出了たこの人物に付て讀者諸君に御紹介をしたと思ふ。

ベネツオレンスキー氏は中柄な柔和な面立をした強健らしい人で脚は短かく手は小さく丸々と太つて居る。弛々とした頗る流行を追つたフロックコートに高い廣い襟飾を付け雪のやうな白襯衣を着て紺の胴衣の胸に金鎖をからませ食指には寶石

入りの指環を箝め頭には白い鬘を被つた。話をするにも諄々として人を説くやうな静かな物云ひ振りて歩くにも音を立てない。口元には愛すべき微笑を湛へ目には愛すべき光があつた。襟飾の中に願を埋めた愛らしげな様子まで實際彼れは何處までも愛すべき男であつた。神様は又眞に優しい心を彼れに與へた。彼れは容易く物に感動して涙を流したり我れを忘れて喜んだりする。殊に藝術のことゝなること、後先の考へもなく火の様に熱中するのが常であつた。實際の所を云へば後先の考へもないのでそれと言ふが、ベネヅォレンスキ氏に藝術のとなごが分らう筈はないのだから。然らば何うしてこの様な情熱が彼れに起つたかと云ふとこれには誰れも頭を傾ける處なので要するに我々の考へ及ばざる神祕の力なのだ。一體が何處までも實際的な寧ろ散文的な男であつた。……が我々は露西亞に於てこの種の人物を随分と見受けるのである。

此等の人々が藝術に耽り藝術家に熱中するの結果は言ふべからざる弊を起させるものだ。こんな人々を一所に仕事をしたり話をしたりするのは寧ろ苦しい思ばかりで一向面白いことはない。彼等は確かに蜜を塗つた丸太だ例へばラファエルを云ふにしても、コレツジョを云ふにしても、單にラファエル、コレツジョと云ふやう

なことはしない。

「神の如きサンチオ！絶倫なるデイ、アレグレイ！」と母音に力を入れて唸る。見せ掛け丈けの立派な自惚の強い教養のない凡人を彼等は天才として擡ぎ上げるのだ。

「伊太利の碧りなる空！」

「南國の香橙樹！」

「ブレンタ河畔の芳ばしき風！」

こんな言葉は絶えず彼等の唇に上る。

「あゝ、ザアシャ、ザアシャ！」

「お、サシャ、サシャ！」とか彼等は相顧みて感情の満ちた聲で云ふ。「行かんかな南國へ……吾等の精神は希臘人である——古代の希臘人である。」

諸君はよく展覽會などで露西亞の畫家の作品の前に立つて居る斯う云ふ人々を見るであらう。(此等の紳士は大抵深い愛國の愛士であることを忘れてはならぬ) 先づ彼等は二歩ばかり後方に退つて頭を仰向けて眺める。それから又デリ／＼と畫に近寄つて行く。この時目には油を浮べたやうな霑ひを罩めて……「これあ

るかなア、！。」とやうやく感情の溢れた聲で云ひ出す。「精神が籠つてる精神が！
あゝ實に生きて居る生きて居る。生きたる精神が、一幅の中に磅礴して居る。……
能くまあ、こんな想を構へたものだ。真に大家の風ありだ！」

それから、まづ彼等の家の客間に飾つてある繪畫を見たまへ。そして夕方彼等の
所へ訪ねて来て、茶を飲み乍ら話を聞いて居る藝術家先生を見たまへ。その室が則
ち一つの背景をなして居る。前景には右の方に箒がある此方には磨き立てた床板
にうつすらと塵が見え窓近き卓の上に眞鍮の湯沸がある。そして此家の御主人は
頭巾を被つて寛い着物を着て、その片頬に日光を受けて坐つて居る。それから彼等
の廻りに集まつて来た髪の長い子供等の我れこそは美神の子よと云はぬばかりの
誇りかな微笑みを見たまへ。又ピアノを取り圍んでキヤア／＼云つて居る蒼白い
顔の若い婦人を見たまへ、これが即ち露西亞人の常で、これに依つて露西亞人が一技
術に集中せず、一人で何にもかにも手を付けようとする傾きのあるのが分らう。
これ等の紳士たちが更に進んでその有力なる愛顧を露西亞の文學殊に劇文學に向
け來つたのは、毫も怪しむに足らない。……「ヤコブ・オクナザルス」(劇の名は彼
等の爲めに書かれたやうなものだ。世に認められない大天才が全世界に逆つて奮

剛努力したと云ふ様な、もう何百遍か描き古された事にも、なほ彼等は深く動かされ
るのだ……。

ベネヅァレンスキー氏の來た翌る日、タチアナ・ポリツナは茶話を仕ながら、お前
の畫をお客さんにお目に掛けたら好からうと、その甥に云つた。

「なに畫を書くんですか。」とベネヅァレンスキー氏はやゝ驚いて、物珍らしさうに
アンドリュエーシヤの方を振り向いた。

「え、書きます。それは好きなんで御座いますよ。先生も何もなし全く一人でや
りますんですけど。」

「さうですか。それは是非見せて頂きますせう。」とベネヅァレンスキー氏は叫んだ。
アンドリュエーシヤは羞かみ加減に微笑を含んで、寫生帖を持つて來た。

ベネヅァレンスキー氏は鑑定家然たる態度で、寫生帖を返して見ながら遂に、
「巧い、どうも巧い。坊ッちゃん旨いですねえ。」と云つてアンドリュエーシヤの頭を

撫でた。アンドリュエーシヤはその手を取つて接吻した。
「驚きました全く。實に巧みなものだ！……貴女は眞個にお仕合せですよ、タチ

アナ・ポリツナさん。」

「けぞ、ピートル・ミハリツチさん何うしたら宜いでせうねえ？此地では先生を頼んでやる事も出来ません。町から来て貰はうとすれば大變な費用で御座いますし、又御近所のアルタモノヴスさんの御家なんかでは一人畫の先生をお雇ひで大層上手な方だつて聞きましたけれど彼家の奥さんが他の者に教へる事はならないつて被仰つたさうです。」

「は、あ………」とベネヅレンスキー氏は疑つと考へ込んで時々横目にアンドリユーシヤを見たが、

「何れその事は後ほど熟と御相談に與りませう。」と急に手を揉み乍ら云つた。

その日彼れは一寸内々のお話があるからと云つて、タチアナ・ポリソヅナに頼んで、一間の中に相對つた。三十分ばかりして二人はアンドリユーシヤを呼んだ——アンドリユーシヤが入つて来た時ベネヅレンスキー氏は少し赤くなつた顔に喜ばしげな色を浮べて、窓側に立つて居た。タチアナ・ポリソヅナは目を拭き乍ら隅の方に座つて居た。

「さあ、アンドリユーシヤ！」とやがてタチアナ・ポリソヅナは云つた。「ピートル・ミハリツチ様に御禮を被仰い、ピートル・ミハリツチさんはお前を世話して、ペテルブル

グへ連れて行つて下さるつて。」

アンドリユーシヤは其儘氣絶しさうであつた。

「さあ、正直に云つて頂戴！坊つちやんは畫工になる氣はないか、え、藝術と云ふ立派な仕事に身を打ち込んで掛る積りはないかね。」とベネヅレンスキーは重々しい調子で勞はりすかす様に云つた。

「畫工になりたう御座んす」とアンドリユーシヤは聲を震はして答へた。

「さう仰ると私も嬉しい、それアもう。」とベネヅレンスキー氏は續けて、「大事な叔母さんに別れるのは随分辛いでせうけれどねえ、難有いと思はなければなりませんぞ、憊うなつたのも全く叔母さんのお蔭ですから。」

「僕叔母さんが大好きです。」とアンドリユーシヤは目を瞬いて遮つた。

「然うともく、それはもう能く分つてる。貴方の事だからさうなけりやアならぬ筈だ。けれどね、一方から考へて見ると、これからの將來は何うだらう。……いよいよ成功したとなつたら愉快ぢやないか……。」

「接吻をしてお呉れ、アンドリユーシヤ」と優しい叔母さんは口籠つた。

アンドリユーシヤは叔母様の頸にしがみ付いた。

「さあ、お前のお世話して下さい。方にお禮を被仰い。」

アンドリュース氏はベネヴァレンスキー氏の腹に抱き付いた。そして爪立ちをして伸び上り乍ら彼れの手を取つて痕の付くほど接吻をした。ベネヴァレンスキー氏は幾何かそれを嫌ふやうな風であつたが、なす儘に受けた……彼れは子供に手を接吻されるのを好まなかつたが、この場合小供を安心させるためにそれを許さなければならぬと思ひ又結局さうするのが當然の事だと思つたのである。

二日の後、ベネヴァレンスキー氏はその新しい Profe (生徒) を連れてこの家を辭した。

アンドリュース氏が行つてから最初三年の間は度々手紙を寄越し時には書いた書などを封じ込めて來た。時には又ベネヴァレンスキー氏も簡単な添へ手紙をして大變満足に思つてる様子に見えた。所が何時もなく段々手紙の數も減つて遂には全く跡を斷つた。九一年といふもの、一言の消息もなかつた。タチアナ・ポリツナは何となく安心から思ひ初めた時突然次のやうな手紙が届いた。

親愛なる叔母上様——生が恩人なるピートル・ミハリツチ様は三日前死去致されい。烈しき卒中症は永久に我が一人の保護者を奪ひたるにい。今生は正

に二十歳に達し。過去七年間の研鑽によつてその技著しく進み、今は我が腕に十分の自信も生じいへば何うにか生活の法は講じ得べくと存じ失望は致さずい。されど若し御都合相かなひは、出來次第二百五十留ばかりお送り下さる様願上い。遙に御手に接吻致し感謝の意を表しい。……云々

タチアナ・ポリツナは、二百五十留を甥に送つた。二ヶ月過つて彼れは更に多くの送金を願つて來た。タチアナは有り丈けの金を集めて送つてやつた。すると、それから六週間とも過たぬ中に、テルテレシネフ王女から肖像畫を命せられたので、その繪の具を買はなければならぬと云つて、三度目の無心を云つて來たタチアナ・ポリツナはこれを拒絶つた。

「そんなら健康もすぐれないから田舎へ歸つて静養したいと思ひます」と書いて來たが眞個に、その年の五月、アンドリュース氏はマリヤブリキに復歸つて來た。タチアナ・ポリツナは一寸見た時見違へる程であつた。かの手紙から推して衰へ果てた病身者を見る事と思つて居たのに、自分の前に現はれたのは血色の好い大きな顔に、油じみた縮毛を垂れた頑健した肩幅の廣い若者であつた。青白い庭弱い小さなアンドリュース氏は、今筋骨逞ましいアンドレイ・ヴァンツチビエロフ

ゾロフとなつたのだ。そして變つたのは外面許りではなかつた。昔のやうな細心な落付や几帳面な様子は影にも見えず、見るから嫌やな粗忽つかしい傲慢な様子や、序次ない風ばかりが見えた。道を行くにくらり、く、踏躑ひながら歩くとか安樂椅子に凭れ掛るときか食卓に肘を突くやら伸び上つて欠伸をするやら下男共や叔母さんにもまで無作法な振舞をした。

「私は藝術家だ。自由なるコサツク！私等は實にそれだ！」と云ふのが癖で。時とするど幾日も畫刷毛を取らなかつた。併し一度彼れの所謂靈感が來れば丸で酒でも飲んだ様に不作法な不都合まることをワイ／＼並べ立て頬はいやに赤くなり目はどんよりと潤んで、例の自慢話を初める。その技術のえらい事や、成功したことや、發達したことや、現に進歩しつゝある事やそれからそれと話し立てる……其癖實際のところは肖像畫一つ満足に畫けないのだ。彼れは全くの無學者で何ぞと云つて讀んだ物はない。抑も藝術家は何故に讀むの必要ありや、自然と自由と詩とは只これ吾人の要素のみとは何時も彼れの云ふ所で徒らに髮の毛を振り立て、朝から晩まで喋り口り續け、際限もなく煙草を吹かすことの外何等爲さうとも仕ないのだ。露西亞人の大抱負あるは甚だ宜い併しこれも人によりけりで、天才もない下

流のボレザエフスに至つては逆も鼻持のなつたものではない。

アンドレーイヅアノヅイツチは叔母の世話になつて日を送つて居た。食客云々の諺さへあるに彼れは叔母の世話で生命を繋いで居ても心苦しさうにも見えなかつた。來る客も／＼彼れを見ると蛇蝎の様に嫌つた。彼れはビヤノの前に座り込んで、この頃ビヤノもタチアナポリソツナの家に据ゑ付けられた。「早き橋」と云ふ様な節を一本指で奏で初める。矢鱈に鍵盤を打ち叩いて幾時間も立て續けにヴァラモフの「一本松」とか、「醫者よ來なく」など云ふ歌を苦しうに吼える様に怒鳴つて目が消えて見えなくなる程太鼓のやうに頬をふくらす……さうかと思ふと急に又「静かなれ狂ほひ荒ぶこの熱情！」と弾き初める……タチアナポリソツナは實際身を慄はして眉を蹙めた。

「何うも不思議ですなえ」とタチアナポリソツナはある日私に云つた。「この頃の歌は何うしてあんなに自暴ばちな調子なんでせう私等の若い時とは丸で違ひますそれは私等の頃だつて悲しい様な歌はありましたが、それでも聞いてると何だか氣が晴々する様でした……まあ、こんなのがありましたね——」

お出、お出よ、牧場の中へ。

草に倒れて待つてる私に。

お出、お出よ、牧場の中へ、

戀し焦れて泣いてる私に……………。

何故に來ぬぞや、牧場の中へ、

早く逢ひたい、我が君様よ、

タチアナ・ボリソングナは妙に微笑んだ。

「あな、苦し！あな、苦し！」と

甥が次の間で唸るやうな聲を擧げた。

「まあ、アンドリュウシヤ。静かになさいなね！」

「君に別れて我が心、我が柔胸を破れぬる！」と倦くことを知らぬ音楽手は、なほ歌

ひつづけた。

「タチアナ・ボリソングナは頭を振つて、

「まあ、大變な藝術家だ！」……………

その後一年過つた。ピエロツゾフは依然として叔母の脛を噛つて、なほ絶えず
ペテルブルグへ行かうと思ふなど、云つて居る。彼れは田舎へ來てから益々脊も

高くまたさらに肥えて來た。叔母は又——こんな事とは誰れが思ひ掛けたらう？
——仕たい放題に彼れを甘やかした。そして近所の若い娘達は彼れと戀中になつ
た……………。

深山あつた古い友達に誰れ一人タチアナ・ボリソングナを訪ねる者もなくなつた。

死

「十六」

私の隣りに獵の好きな若い地主が住んで居る。よく晴れた六月のある朝私は一處に松鶴を撃ちに行かうと思つて彼れを誘ひに行つた。

「はあ行きませうとも。」と早速同意して、「ブーシャの柴山へ行かうちやありませんか。さうだと私は序でにチャブリジノーの方も見て來られるから。それ知つてませう宅の檜林をね。あそこを今伐つてるんです。」

「ちやア是非そこへ行きませう。」
と云ふ事にして隣人は馬に鞍を置かせ猪の頭の印ある眞鍮鈕子を付けて緑色の上衣を着こみ二子糸で縫ひ取りをした獵袋と銀の水呑をぶらさげ肩には新形の佛蘭西銃をかついで、いかにも満足さうに幾度か鏡の前で様子ぶつて見た後、やがて従姉から贈られた飼犬のホープを呼んだ。その従姉と云ふのは至つて氣のいゝ人だが、もう頭も禿げて居る老嬢である。

吾れは出掛けた。

隣人は村の警吏をしてアルヒツプと云ふ重箱面をした颯の怖ろしく大きい猫背の頑丈な百姓と、この頃バルチック地方から雇はれて來た見廻り役の、コック家のゴットリーブ君といふ獨乙人で、今年やつと十九になる、うすい麻色の髪をした近眼な上に撫で肩な頸の長い若者とを伴に連れられた。

私の隣人は近頃始めてその土地を手にしたのである。それは一人の叔母さんであつて宮中顧問官の未亡人カルドンカタエフ夫人と云ふ烈く太つて來て歩けないので、年が年中床の中にうん／＼唸つて居るより外用のなかつた婦人からその遺産としてそつくり隣人の手に渡されたものであつた。

吾れは柴山に着いた。

「お前たちはこの空地で待つて居てくれ。」とアーダリオンミハリツチ(私の隣人は連れの二人を見返つた。

若い獨乙人は領首いて馬を下り、隠袋から本を取り出して——何かヨハンナ・シヨッペン・ハウエルの小説らしい——ごろりと藪蔭に坐り込む。アルビツプは小一時間の間筋一つ動かさずちつと座つて日に焼かれて居た。

吾れく二人は所嫌はず藪の中を叩き廻つたが、小鳥の影さへ見えない。アーダリオン・ミハリツチはもう森の方へ行かうと云ひ出した。私も何んだか今日は獲物がありさうにも思はれないので、彼れの後をついてぶらぶらと元の空地へ歸つて来た。それを見ると、獨乙人は讀みさしの所に記しをして立ち上つて本を隠袋に藏ひ六ヶしさうにしてやつとの事馬に乗つた。馬といふのは一寸觸つても嘶いて蹴るといふ癖のある尾を短く刈つたものである。アルヒツプはと見れば、うんうん身を揺振つて一生懸命手綱を引き、脚で馬の腹を突いたので、流石のよぼぼ馬をどうく歩き出さした。吾れくは其地を發つたのである。

私はアーダリオン・ミハリツチが所有の森を子供の時分から能く知つて居る宅の家庭教師に連れられて、毎度チャブリシノ一邊を逍遙いたものだ。先生は佛蘭西人で、デシレフルーリイ氏と云ふ至つて親切な人であつた。(が先生は每晚レルウクス水を呉れては私を眠らしたので、遂うく私は生涯身體を悪くした)

森には數百の樫と秦皮の老木が生ひ立つて、その天を摩す壯大な幹は、山秦皮や胡桃の藪の透き通るばかり金色を帯びた緑りの中にくつきりと立派に黒く見られた。さらに上の方は末廣がりの瘤々した枝が、高々と中天に聳えて宛ら天幕を張り擴げ

た如く澄んだ青空に美しい一線を劃して居た。鷹鷹小鷹これ等の鳥は、小搖ぎもしない森の頂きを羽を鳴らして飛ぶ。羽色の美しい啄木鳥は、太い樹の皮をコツリコツリと叩く。と深い茂みの奥から不意に鈴のやうな鶯の聲が色々の調子を出すよいきりの鳴くのに、ついて聞いて聞える。低い茂みには、うそやけりや多くの小鳥の囀りが聞かれ、又うそが小路に添うて、矢のやうに飛ぶのも見られた。時には兎が立ち止まつては用心深く耳傾けながら、こつそりと森の外れを走ることあれば、木鼠が木から木と飛び歩きながら、ふいと足を止めて、その尾を頭に乗せるのも見られた。所々には、小鳥の羽のやうに可愛らしく深く刻み込まれた齒朶の葉蔭に、小高い蟻塚が見出され、その草原の間には、董や山百合が匂つて、其所此所に茶色黄色、赤色、赤紅色、いろくの菌が生えて居た。廣い藪間の取り残された様な小さな草地などには、眞紅な莓があつた。……けれど、それよりも何よりも、あの森の蔭！もう息のつまるやうな暑い日盛りの中、でも森の中は夜のやうであつた。その静けさ、森の匂ひ、緑りの色……私は實にチャブリシノに於て、楽しい時を送つたのである。それで私の心を有體に言へば、そんなに能く知りぬいて居る此の森に、今入ると何となく悲しい心持になるのである。

思へば千八百四十年の彼の雪のない冬の怖るべき破壊力は、わが古い友——樫と
 桑皮の森をも容赦しなかつた。大きな森は凋み果て、緑りの色も止めず所々にひ
 らひらする病葉が、悲しげに悶え乍ら残つて居る。その代りには若い葉が出たけれ
 ども昔の面影だにない。

（千八百四十年に烈しい霜が降つて、十二月の末まで少しも雪を見なかつた。そ
 の爲めに凡ての畑のものは凍る大きな樫森さへ無慈悲な冬の方で枯れ果てる、
 逆もその取り返しは六か敷く地方の産物なごもしたたか産額を減じた。法王
 の禁制地聖像の行列のある處で狼りに人の入るを許さない地なごも前日の神
 々しい森の姿は跡もなく今僅かに樺や白楊がひとり時を得顔に茂つて居るが、
 實際これでは森を植付けやうといふ考などは一向起らない。——著者の注意

その中には僅かに下の方ばかりに緑葉を止めて恰も自暴になつて罵つてるやう
 に生氣のない枯枝を高く突き出して居るのもあれば又昔の豊かな面影のないまで
 もなほ茂りを見せて緑葉の間から太いボクボクした枯枝を伸ばして居るものもある。
 又重なり合つて骸骨のやうにごろ／＼打ち倒れて居るものもある。そして——あゝ
 斯くあらうとは誰れが夢にも思つたらう——あの懐かしい緑り葉の蔭——僅か木

蔭らしいものさへ今はチャブリジノーには見られなくなつた。

「あゝ何と云ふみじめな痛ましい姿だらう。枯木をつく／＼と眺め乍ら私は
 思つた。……ふとホルトソフの句が想ひ起された。

ふとこもる物の雄たけび、

大木のおごりの力、

築えにし王者の姿、

いかにかなりし——。

かの豊かなる緑り葉の

緑りの蔭はいづこぞや。

.....

「アーダリオン・ミハリツチさん。何うしてこれを直ぐ次の年に伐らなかつたんで
 せう。斯うなつちやア元の十が一の値にもなりやアしませんなあ。」と私は口を切
 つた。

彼れは只肩を竦めて、

「そんな事は叔母に聞て下さらなければ解からない。實際材木屋ごもがやつて來

て金を揃えて是非賣れとつて勸めたのですがね」
 「まあ、まあ」とフランデル・コックは一足毎に叫び乍ら、「まあ、ほんに惜しい事したものだ、惜しい事だ、つた。」

「何が惜しい事なんだネ」
 と隣人は微笑ながら言つた。

「いえネ、それは、ほんに惜しい事であつたと言ふのがす。」

地上にごろ／＼した櫛の木を見た時、特に彼れは深い哀愁の念に打たれたのであつた——いかに粉屋でもあつたらば、白にするために莫大の金を拂つて買ひ取つたに違ひないのである。併し警吏のアルヒツプは、一向落ち付き拂つて、別段悲しがる様子もなく却つて倒れた木の上を跳ね越え／＼満足だと云つた風に鞭を上げてピシ／＼それを叩いて居た。

木を伐倒して居る場所近く来た時、急に「ミリ／＼」と木の倒れる音がしたかと思ふと、忽ちけたたましい叫び聲がして、早口に罵るのが聞えた。と思ふ間もなく一人の若い百姓が、真青になり、髪を亂して、藪蔭から此方へ走つて來た。

「何だ？ おい。何處へ行く？」

アーダリオン・ミハリツチは聲をかけた。

百姓はどつかはと立ち止まつて

「あ、アーダリオン・ミハリツチ様。大變でがす。」

「何うしたんだ？」

「マクシムが、貴方、壓つつぶされやした。」

「何うしたんだ、そりや……マクシムつて、あの親方ぢやないか。」

「へい、あの親方で。私等ア秦皮の木を伐つてやしてな、親方は立つて見てたでがす。」

「……暫らくはさうして居やしたが——何でも、水が飲みたくなつたんでがせう——

あの清水の方さ、二足三足踏み出しやすくな、突然秦皮の木がミリ／＼云ひ出して、

真直に親方の方さ倒れたでがす。逃げる、逃げる！ 逃げる！ 夢中になつて怒鳴り

やしたが……横の方さ避ければ宜かつたに、真直に前の方さ走つたもんだで……

全く狼狽てちやつたのでがすな。秦皮の木の梢枝が頭からおつ覆つたでが

すよ。何うして飛べつともねえ、急に倒れつちまつたらう……どうも心材が腐つ

てたでがせうな。」

「それで、マクシムはつぶされたんか。」

「はあ。」
「死んだか。」

「いんえ、まだ息はありますですが——まあ死んだも同然ですが。腕と足は九で
壓つぶされて居やすからな。私はあ、お医者様ア呼びに、セリヴァーステイッチまで
飛んでつて来やす。」

アーダリオン・ミハリツチは警吏にも一走りセリヴァーステイッチ村まで行くや
うにと云ひ付けて自分は、大急ぎで木樵場の方へ走つた……私は後に續いて行つ
た。

あはれにも、マクシムは地上に長くなつた儘で、その廻りを百姓共が取り巻いて居
た。吾れくは馬を下りた。

彼れはもう虫の息で唸つて居た。時に目を大きく見開いて吃驚したやうにキョ
ロくするかと思ふと唇を噛んでサツと眞青になる……顔の下半面は極端つ
て髪は額にべたりと密着き胸には不規則な動悸が打つて居た。彼れはもう助から
ぬのだ。瑞々した菩提樹の淡い影が額の上をゆるやかに滑つた。
吾れくが屈んで覗き込んだ時彼れは、アーダリオン・ミハリツチを見こめた。

「何卒貴方様。」殆んど聞き取れぬ程の聲で彼れは云ひ出した。「僧侶さんを……
迎へにやつて……神様の罰……罰でさあ……腕も足もみんな挫がれちまつ
た。今日は……日照だに……あ……あ……若い者等に仕仕事をさせた
罰でさあ。」

息がきかれて聲が出なくなつたが又
「それから私の金……このオネシムが知つて居るが……借りてる丈げを差
し引いて……ね……残りはお金に……やつて下さい。」

「今醫者を迎へにやつたからぬ、マクシム。お前はまた死にやアしないよ。」と隣人
は云つた。

マクシムは目を開けやうとして無理に重い眼瞼をあげて、
「いえ私は助かりません。そら……もうこゝに死神が來ます。あれ、あれ……」

許して呉んな。若し私を何とか思つて居るならね……」
「神様は許して下さるよ。マクシム、アンドレイツチ！」と百姓等は太い聲で、同音
に云つた。そして帽子を脱つて、

「親方。何うか私たちを許して下さいよ。」

苦痛が、一時に込み上げて彼れは急に絶望したやうに、がつくり頭を振る。と堪ら
 又のけぞり倒れた。

「こりやア、斯うして、此所で死なしちやならん。」とアーダリオン・ミハリツチは叫ん
 だ。

「おい、若者たち馬車から蕙を持って来て呉れ。そして病院へ搬び込んで呉れない
 か。」

男が二人直ぐ馬車の方へ走つた。

「私は一昨日……馬を買ひました。」と半死のマクシムは呟り乍ら、「シチヨフス
 キー村の……エフィムから……手付をやつてある……あの馬は私のだ。あ
 れも……娼アに……やつて下さい。」

百姓等は蕙の上に彼れをかき載せた。……彼れは傷をうけた鳥のやうに、ブル
 くと全身を震はして、遂に硬直つた……。

「もういかねえ！」と百姓共は吐いた。

吾れは黙して馬に乗つて其所を發つた。

マクシムの死は私に深い……考へを與へた。露西亞の百姓の死ぬ時の有様は實

に驚くべきものである。彼れが最後の心持を考へて見れば、放恣な愚かな人間とは、
 何うしても思はれぬ。恰も嚴肅な儀式を行つて居ると云ふ風に、靜かに落ち付いた
 色をして彼れは死んだのである。

五六年前のこと、これは別の人が、矢つ張り私の近所の家に使はれて居た百姓が
 あつた。その男がある日唐黍を積んだ乾燥小屋の中で、烈い火傷をした。(若しあの
 時、旅商人が通り掛らなかつたら彼れは其儘黒焦げになつたかも知れない。旅商人
 は傍らの水桶に飛び込んで、濡れた身體で燃えてる離れ家の戸を衝き破つて半死の
 彼れを救ひ出したのだ。)

私は彼れを見舞ひに、その小屋を訪ねた。小屋の中は薄暗く煙つて、蒸せ返るやう
 であつた。

「病人は何處に居るね？」と私は訊ねた。

「あそこにはい。爐の側に。」泣いて居た妻が、飽のない聲で答へた。

近寄つて見ると、百姓は羊の皮かをぶつて、苦しきうな息をして居た。

「何うだね、鹽梅は？」

寝て居た百姓は爐に倚つて身を動かした。もうすつかり焼け爛れて、一見生きた人とは思はれない。それでも猶起き返らうとする。

「まあ、その儘で、その儘で……」。して鹽梅はごうかね。」

「何うも、よくありやせん。」彼れは答へた。

「苦しいか。」

黙つて居る。

「何か欲しいものはないか。」

なほ黙つて居る。

「茶か、何が與らうか。」

「何んにも欲しかありません。」

私は側を離れて掛椅子に腰を下ろした。そして十五分間もじつとして居た。やがて三十分間も黙つて座つて居た。――實に小屋の内は墓場のやうに沈黙である。

隅の方には基督の畫像が懸けてあつた。その下の机卓のかけに、十二ばかりの女の子が蟠踞つてパンの片を噛んで居た。母は何度も怖い目をして娘を睨んだ。表部屋には出たり入つたりする人の忙しげな高話が開えた。兄嫁は甘藍を切つて居

た。

「これ、アクシニヤ！」と遂に病人は云つた。

「何ね？」

「クヴスを一杯！」

アクシニヤはクヴスを與へた。又沈黙に戻る。

私は低い聲で、その妻に聞いた。「もう僧侶さんのお祈りは済んだのか。」

「はい。」

そんなら、もう何もかも済んだのだ。死を待つより外にはないのだ。私は堪られなくなつて辭した……。

又想ひ出すのは、グランヌノゴリー村の病院に外科醫のカピトンを訪ねた日の事である。カピトンと云ふのは私の友人で熱心な遊獵家だ。

この病院は元はさる貴族の邸の番小屋であつた。それをその貴族の奥方が病院に立て直したので言ひかへると入口の上に青い板を張らせ、「グランヌノゴリー病院」と白く書かせたのだ。そして患者の名を記入する赤い名簿を親からカピトン

に渡した。この名簿の第一頁には奥方ハウンチフル（情深いと云ふ意）夫人の御最負の食客何某の書いた次の一節がある。

Dans ces beaux lieux, où regne l'allégresse

Ce temple fut ouvert par la Beauté;

De vos Seigneurs admirez la tendresse

Bons habitants de Krasnogorie;

(美はしき快樂の郷に)

美しき人にしてこの殿堂ぞ開かれし。

汝が主のやさし心を讃せよや、

クラスノゴリのよき人等。)

所がその後にある紳士が斯う書いた。

'Et moi aussi j'aime la nature

'Jean Kobylatnikoff.'

(われも亦この自然を愛す。)

ジャン、コピリアトニコフ。)

醫師は自分の金で寝台を六つばかり買ひ集め、神の子なる人々を救ふべき殊勝な

心掛けを以て仕事を始めた。自分の外に役員が二人。一人は氣狂ひ染みた彫刻師のバグエルと云ふものと、一人は料理番の役を勤めるメリキトリサと云ふ片腕の百姓女とで、二人は藥を調合し、藥草を乾かしたり水に浸したりもすれば、病人が夢中になつて荒れ出す時には、これを鎮める役もした。

この氣狂ひみだ彫刻師の方は、佛頂面をして居て、滅多に物も云はない。夜になると定つて「愛すべきグイーナスよ。」と云ふ歌を詠ひ出し、誰れ彼れの見辨ひもなく逢ふ人毎に、最早死んでしまつたマラニヤといふ娘と夫婦にして呉れと云つて困らせる。マラニヤと云ふ娘は長い前に死んでゐるのだ。片腕の百姓女は、いつも彼れを頭ごなしに遣つ付けて、七面鳥の番をしに追ひやるのが常である。

さて、或る日のこと私はカピトンの許に居た。

二人でこの間の獵の話をして居ると、突然中庭に小馬車が乗り込んで来た。粉屋でなければ持つて居ない様な特別頑丈な馬に引かして中には、ずんぐりしたごま鹽瓮の百姓が、新しい大外套を着て座つて居た。

「やあ、ヴァシリードミトリツチさん。さ、お入んなさい。」カピトンは窓から叫んで、「リオボンシンの粉屋だ。」と私に囁いた。

百姓は唸り乍ら攀ぢるやうにして馬車から出て来て外科醫の室の中に入つて来たが、そこへ懸けた聖書を打ち眺めて一々額を垂れて、十字を切つた。

「して、ヴァシリさん。何か變つたことでもあるですか。……おや何處か悪いんぢやありませんか。何うも様子が良くないね。」

「え、貴方。何だか工合が悪いんです。」

「何處が悪いのです？」

「なに、まア、こんな譯なんです。そのもう餘程前ですがね町で石臼を買つて家へ持つて來ましてね、そいつを車から下さうとしたんです。すると無理力を出したせいか何ですか腰のあたりが丸でせむし見たやうになつて肉でも寸断り取られたやうな氣がするんです。それから云ふものから元氣がないんですよ。今日は又例よりも悪いやうな氣がしますから。」

「ふーん。」と云つて、カビトンは喫き煙草を一服やり乍ら、「そりやア何ですよ、屹度へるにお病ですよ。併し何時頃からですか？」

「さうです、もう十日になります。」

「十日？」と醫師は長い微かな息をして首をひねつたが、「まあ見て上げませう。」

しばらくして、「あ、さうもヴァシリさん。」と醫師は口を切つた。「お氣の毒です甚だお氣の毒ですがね、さうも良くないですよ餘程重患ですな。まア私の家へ滞つてお出でなさい。何うも受合ふとは言へませんがね私に出来る丈けの事はやつて見ます。」

「そんなに悪いんですか。」と百姓は吃驚して吃り乍ら云ふ。

「え、何うも悪う御座んすね。これが何です、もう一二日早かつたらナニ文句はありやしない、直ぐに癒つちまつたんですがね今は痲衝を起してゐるから施術の効力の顯れない内に脱疽になると思ひます」

「けんご、そんな筈はありません。」

「いえ全くですよ。」

「けんごさうして其處になつたらう？ (醫師は肩を竦めた。) こんなつまらねえ事で生命とられるんでせうかねえ？」

「さうとも限りませんがね……まあ此家へ滞留つて居なきやアいけませんよ。」百姓はじつと考へ込んで床を見詰めて居たがやがてチラと吾れ〳〵の方を見て頭を掻き〳〵帽子を掴んだ。

「何處へ行きます？ヴァシリさん。」

「何處つて家へ歸るより外に仕方もないでせう。そんなに悪いなら後のことを定めて置かなきゃなりませんからな。」

「併し貴方そりやア宜くありませんよ、益々悪くなりますよ、實際。私は何うして此家まで御出でなされたか不思議に思つて居る位なんです、是非お滞留んなさい。」

「いや、貴方、カピトンさん。死ぬなら家で死にたいと思ひますから、ねえ此所で死ななくたつて家があるんだもの。それで死んだら天命でさあ。」

「まだ死ぬと定まつた譯でもないぢやないか、え、ヴァシリさん。……そりやアもう危険いことは非常に危険いですがね、全く。……併しそれだから此家に居て療治しなけりやアいけないと云ふのぢやありませんか。」

百姓は頭を振つた。

「いや、カピトンさん私は歸ります。……が處方は書いて下さるでせうね。」

「薬だけぢや、逆もいけませんよ。」

「兎に角私はここに居るのは嫌やです。」

「そんなら仕方がない……後で薬が利かないからつて私の所爲ではありません。」

よ。」

醫師は名簿から一頁切り取つて處方を書いて且つかれに出来る丈の注意を話してやつた。百姓は處方書きを受け取り、カピトンに半留を渡し、室を出て小馬車に乗り込んだ。

「ぢやア左様なら。カピトン、チモフ、エイツチさん。何卒、悪く思つて下さらないやうにな。それから子供等を何分お頼み申しますよ、若しや萬一の事が……。」

「あ、ヴァシリさん。お滞留んなされば宜いになあ。」

百姓は只頭を振つたまゝ、手綱を一しぼりしぼつて中庭を出た。道は泥々して烈く凸凹であつた。粉屋は氣を配り、ゆるくと巧みに馬を追つて逢ふ人毎に黙禮し乍ら過ぎて行つた。

其後三日で彼れは死んだと云ふ。

一體魯西亞人は死に際して驚くべき處がある。ゆくりなく私の胸には、今色々死んだ人々の面影が浮んだ。

先づ偲ばれるのは私の古い友である。學位を受けなくて大學を退いたが、アヴェニ

ルソクローモフと云つてそれは良い高尚な男であつた。
 今もあり／＼と目に見える——病み疲れた肺病らしい顔、うすい色の髪、優しい口元、喜ばしきうな眸、ひよろ長い脚。あゝあの細い愛らしげな聲までが聞えるやうな気がする。

君は、ガルクルピアニコフと云ふ大魯西亞の地主の家に住んでその子のフターアとシオシアに魯西亞文典地理歴史などを教へて居た。主人のガが拙い駄洒落を叩くのも給仕共のなれ／＼しい無作法も可愛くもない腕白子供の仕末に丁への悪戯も我慢して忍び七面倒臭い無理を云ふ主婦の我儘にも苦情を言はず黙つて苦笑ひをし乍ら従つて居た。併しその憤ひとして晩食がすんで夜が來つた時君は始めて平和な身になるのであつた。その時は凡ての務めから離れて全く自由な身となり。烟草を飲み乍ら悲しさに窓側に座るかさうでないとおれやこれやと雑誌を取り出して手擦れのした汚れた頁を盛んにはぐる。此雑誌はいつも知合の測量師が——君と同じく哀れな宿無しであつたが——町から持つて來てくれるのだ。その中の一篇の詩一篇の小説は何處に君を喜ばしたらう。その目には忽ち涙が迸つた、また忽ち如何にも楽しさうに笑つた。君は他人に對し汚れなき愛をそゝぎ世

の善良なる人氣高い人に、いかに廣い同情をよせたらうか。あゝ君の胸は濁りなき若々しさに満ちて居たのだ。

正直云ふと君はさう才智の秀れて鋭い男ではなかつた。天品の記憶力も勤勉の力もなかつた。大學に居た頃には一向有望な學生とも見とめられず講義の時間には居睡りをしたり試験の時には眞面目臭つて沈黙を定めたりしたものだ。併し友の成功や友の勝利をきいて喜びの目を輝かし心の躍るほど息をはずませたのは誰れであつたか。……わがアグニルであつた！……又堅く友の出世を信じて自信の心を以てこれを賞讃し憤然として友のために防戦したのは誰れであつたか。嫉妬に付ても虚榮に付ても凡て無頓着に而も自分の利益を顧みない犠牲的精神を持つて居たのは誰れであつたか。靴の紐を解かせるにも足らぬ下賤者にまで熱心に進むべき道を譲つたのは誰れであつたか。……それは實に君であつた。わが尊むべきアグニルであつた。

家庭教師となつて田舎に發つ日、吾れ／＼と名残を惜んでしほ／＼と萎れ返つた君の姿が今も目に見える。其胸には何となく蟲が知らせたのであつたかも知れぬ……實際田舎に行つてからの君の運命はそれは悲しいものであつた。彼所に

は誰れ一人心から話を聴き取すべき人も慕はしい人も愛しい人もなかつた。近所の人々——土百姓の息子も禮儀ある紳士も、少しも變りはなかつたが——は尋常の家庭教師として君を遇した。ある者は無作法なことをしたり蔑むやうな風をしたり、ある者は又何處の馬の骨がと云ふ様な顔をした。

一體君は人の心を引き付けると云ふがらの男ではなかつた。寧ろ氣耻かしさうに顔を赧くして熱して來ては吃るやうな男であつた。……その上田舎の空氣は甚だその健康に適しなかつた。あはれにも君は刻々蠟燭の燃え細るやうに弱つて行つた。

君の室は庭に面した所にあつた。山櫻や、林檎の木や、菩提樹が机の上、インキ壺、書籍の上の嫌ひなく、風のまに／＼美しい花片を投げた。壁には青い絹製の時計包みが懸けてあつた。之は知り合ひの獨逸人で、麻色の髪をした小さな青い目の極く親切で感情深い女教師から別れの紀念として贈られたものだ。時には昔の友達がモスカウから訪ねて來て新刊の詩を見せ又は自作の詩まで持ち出して、いたく君を喜ばした。けれど、げれど堪へ難い奴隷あつかひをされ乍ら出るに知らぬ家庭教師の境遇と果てしもない秋又冬の淋しさにかへ加へて君の病氣はだん／＼悪くなつた。

……あはれなるアヴェニル!!

彼れが死ぬ少し前に私が訪ねて行つた時彼れはもう歩くのも六ヶしい程であつた。地主のガル、グルピヤニコフは彼れを追ひ出しもしないが、月給は無論呉れなかつた。そしてジョジャの爲めに外の家庭教師を雇つた。……この頃、フーフアは兵學校に入つて居た。

アヴェニルは窓際によつて、古ぼけた安樂椅子に懸れて居た。それは美しく晴れた日であつた。秋の空が落葉した菩提樹の濃い蔭色の梢に高く光るやうな青みを見せ、其所此所に取り残された一葉二葉は、金色に光つて、かさこそと囁きを交はして居た。眞白に霜をかぶつた地上は、旭に打たれて見る見る露の玉とどけ、その紅みの光線は霜枯れた草の上を斜めに這ひ進んだ。空中には微かな氣持よい反響が漂つて居るやうで、庭の彼方に仕事をして居る人々の聲が、はつきりと澄んで聞えた。

アヴェニルは、ボクハラ出來の寛衣を着て緑色の襟巻をまいて居たが、その色が衰え切つた彼れの顔を、死人のやうに見せた。彼れは私が來たのを烈く喜んで手を出し乍ら直ぐ話を始めた。併し話の中にももう何處か咳き入るので、私はまあ／＼靜かにして、制して彼れの側に座つた。……アヴェニルの膝には念を入れて書いた

「コルトソフの詩の寫本があつた。彼れは打ち笑み乍ら軽くそれを叩いて、
『彼れは、たしかに詩人だ。』とむせび出る咳を抑へて云つた。そして聞き取れぬ
程の細い聲で朗讀を始めた。

荒鷺の双の翼は、

黒鐵の鎖もやはか繋ぎ得じ。

直にゆく天の通ひ路、

なご人の手の塞ぐを得べき。

私は彼れを止めた。醫者は話をさへ禁じてあるのだ。

私は尤も彼れを喜ばすべき道を知つて居る。と云ふのは、一體アヅニルの如き
人は逆も世間でよく云ふ様に時代の進歩に「追従」して行ける男ではないのだ。

併し彼は常に先覺の識者が什麼説を發見したかごんな考へを得たかを知らうと
願つて居た。時には舊友の門を叩いて質問を試み傾聴しては驚嘆する。そして
一言半句の末までその云ふ所を信じ、そつくりそれを繰り返すことさへあつた。殊
に何よりも興味を持つて居たのは獨逸の哲學であつた。で、ヘーゲルの話を初める
と一寸断つて置くが、これはすつと以前の話である。アヅニルは満足げに何度と

領首いて眉をあげて莞爾して小さい聲でいふ。『さう！さう！その通り／＼』……
：この憐れな宿もない瀕死の漂泊人のいちらしい好奇心を思つて私は涙を忍び得
ぬ程動かされた。一言添へて云ふが、アヅニルは世の肺病患者と違つて自分の危
篤ことをよく知つて居た……併し、それでさへ悲しみもせず嘆息も吐かず愚痴が
ましい事は、おくびにも出さなかつた。

だん／＼元氣付いて彼れはモスカツに居た頃のことを話した。昔の友達のこと
を話した。又ブーシキンの話劇の話魯西亞文學の話などをした。彼れは又昔の質
素な晩餐會のことを憶ひ起した。吾れ／＼同人の間に盛んな議論が戦はされた事
を憶ひ起した。そして痛惜に堪へぬと云ふ調子で已に故人になつた二三の舊友の
名を云つた。

「君、ダーシャを忘れやしまいな。」と彼れは話を進めた。「あゝ純金とてもない清い
心の女であつた。實に曇りのない心！什麼に僕を愛してくれたらう。……併し、今
は何うなつたかなあ。屹度思ひ惱んで瘦せこけて居るだらう可愛さうに！」

私はこの病人に眞實を語るに忍びなかつた。あゝダーシャは瘦せるどころか、今
はブツと肥え太つてコンダチコフ仲間の商人共の世話になつて日を送り。臍脂お

白粉に身をやつして平氣で悪體を吐くやうな莫連女になつて居るのだ。

「併し何うだらう此所から彼れを連れ出すことは出来ないかしら。こんな田舎でなかつたらまだ療治の望みは幾何もあるのだがなあ。」と彼れの衰へた顔を眺めて、私は思つた。で遠廻しに云つて見たが、アヴェニルは打ち消して、

「いや君有り難いが何處で死ぬも同じことだからね。僕ア冬までは生きないよ。ねえ君……役に立たぬ事をして面倒するよりか僕はこの家に住み馴れたんだから。——そりやア、この邊の奴等は……。」

「不人情だ？え。」と私は口を入れた。

「いや不人情でもないのだが、一體木強漢ごもばかりなんだからね。けどまあそんな事は云はなくても宜いさ。只一人ね、隣りのカサトキン氏に娘があるんだ。中々物も出来て親切で可愛らしい女さ……それで高ぶつても居ないしね……。」彼れは又咳き入つた。しばらく息を次いだ後、

「僕アもう何にも願ふ所はない。煙草さへ思ふ存分喫ましてくれたら……。」と彼れは又話し出す。「併し君僕ア断然煙草を喫むよ。ナニ死んだつて構ふものか。」とちらと目をパチ付かせ乍ら「難有いよ、僕はもう十分生きたんだ、生きて随分立派

な人にも逢つたからね。」

「さう云へばさうだが併し君親類位にやア手紙をやるだらうね。」と私は又口をはさむ。

「何だつて、そんな所へ？親類なんて何の力にもなりやしない。僕が死んだら報せを受け取る丈けの話さ。併しまあそんな話は止さうね……君外國で見て来たことでも話さないか。」

それから私は色々な經歷を話した。彼れは熱心に耳傾けて聞いた。

この夕方私は暇を告げた。その後十日して私はクルピヤニコフ氏から次の一書を受けた。

亂文お許し被下度候。陳ぶれば拙宅に居られし貴殿の御友人、アヴェニルシロクモフ様には、一昨々日の午後二時死去致され候。葬送の儀は本日當地の寺に、拙者の出費を以て相濟まし申候。別封書籍と書類とは貴殿に送りくれるやう、故人生前の依頼に御座候ひしま、お送り申上候。なほ故人の所持金二十二留半は、一切の所有物と共に親類の方にお渡し申候。アヴェニル様は臨終の際までも全く正氣にて、而も至つて平氣にて拙者の家族

一同が愈々最後のお別れを申したる時にすら些の残り惜しき風もなく御死去致され候。

なほ、恐妻クレヲバトラアレクサンドロヅナよりも宜しくと申候。申すまでもなく愚妻は御友人の御死去の事を深く悲しみ居り申候。末筆乍ら拙者は無事消光罷在り候間御休心下され度候。勿々拜具。

辱知 ジーケルプヤニコフ

まだ多くの人々の死際が今私の胸に浮んで居るが、皆語ることは出来ぬ。もう一つ丈け話すでしょう。

私は嘗つて、老婦人の臨終の枕邊に居たことがある。僧侶はこの婦人に對して最後の經文を讀んで居た。すると急に様子が變になつたので、僧侶は驚いて忙しく十字架を取り出し、接吻をなさいと云つて婦人に與へた。

婦人は不興氣な色をして横を向き

「貴方そんなにお急ぎなさなくても、大丈夫で御座います。そんなにお急ぎなさ

らなかつて。」と殆んど聞き取れぬやうな聲で云つた。……

それから彼の女は十字架に接吻をした。そして枕の下に手を遣つた儘に息が絶えた。枕の下には一留の銀貨があつたが、恐らく僧侶さんにお布施を上げる積りであつたのだらう。

實に露西亞人の最後は、一種驚異くべきものである。

「十七」

歌 男

コルトフカの小村は昔ては近所の人達から「しはん坊」と譚名された程頗る辛辣な手腕のある或る女地主(その本名は全く忘れられて居る)の所有地であつたが、近頃ではペテルブルグから来た獨乙人の所有になつて居る。

村は草木もない坊主山が長い傾斜をなした所にあるが、その真中を頂きから麓まで断ち割つたやうに怖ろしい谿谷が走つて而も久しい間雨に打たれ雪崩に削られて両側がだら／＼下りになり大きな口を廣げた洞のやうになつて居る、その割れ目が村の通の中心まで来て居るので、この不幸な小村は真中から全く二側に分たれて仕舞ふ。川ならば橋を掛けることも出来るがこの大きな谷は何うすることも出来ない。四五本のひよろ／＼柳がおづ／＼砂の崖に這ひ下つて黄色く銅色に乾いた谷の底には粘土質の大きな岩石がごろ／＼重なり合つて見られる。こんな面白くもない場所ではあるがこの地方の人々で、コルトフカに行く道を知らぬ者はない。

人々はよく此村に出掛け又常に行くのを樂しみにして居る。

この谿谷の頂上——それは狭い裂け目からしてだん／＼に廣がり下る大きな谿谷のその頂きの一角——から數歩の處に箱の様な小さな家が立つて居る。丸で村からは立ち離れて孤立した茅葺きの家で、屋根には一本の煙突が見え谿谷に向つた小窓は鋭い一つ目が見張つて居るやうで冬の夜などには、そこから輝く灯がほの白い氷つた霧を通して遙かに見られる。このチラ／＼する光は又村に歸る百姓どもの道しるべになる星となるのだ。

この小さな家は居酒屋なので入口の上には青い板を張り付けて、「歡迎亭」と書いてある。一體に割安だと云ふ評判で恐らく普通の値より酒を安く賣るといふのでもないがこの近所の同種類の店よりはすつと繁昌して居るが、これは亭主のニコライイヴァニツチの人柄によるのであらう。

ニコライイヴァニツチは——彼れも嘗つては頭髪をちららせて春のすらりとした紅顔の若者であつたが今はすつしりと太つた顔のまる／＼した半白の老爺となつた。氣の廻りさうな又如何にも人の善ささうな細い目をしててか／＼した額にはもういつばい皺が見えて居る。——コルトフカに住つてから二十年以上にもな

ると云ふ。彼れはよく居酒屋の亭主などに見掛けるやうに、いたつて鋭い利口な男で別段冗談を言ふでもない、強いて愛嬌を振り蒔かうでもないが、なほ何處かに客を引き付けて逃さない所があつた。世辭一つ言はず、油断なく目を配つて見て居るがその中に如何にも落ち付きがあつて、温味が籠つて居るため、客はこの人の店に休むのを以て、少なからず愉快として居るのだ。彼れは中々常識に富んで居て、地主の生活も水呑百姓や小商人の境遇もよく飲み込んで居た。六ヶ敷い事件が起つた時など、その口助も出来るのだが、大抵の場合には注意深く自分の利害ばかり打算して居るかの如く、超然として居る、たかゞ——それも常得意の客丈けに——一寸遠廻しに偶然に言つたとしても、言ふやうな工合に取るべき道を教へてやる位なものだ。彼れは又露西亞人に取つて興味のあること、重要なことば何でも知つて居た。馬のこと、其他の家畜のこと、材木、煉瓦、瀬戸物の見分けから羊の毛織物、熟皮の善し悪し、果ては歌や舞踏までも知らないものはない位であつた。

客のない時には、いつも戸口の平土間に、太つた膝を不緻縹に曲げて通り掛りの人に親しげな挨拶を交し乍ら袋のやうになつて座つて居る。昔からよく酒買ひに來た小地主共の中には、今はすでに故人となつたのが、澤山にある位、彼れは長年の間色

々のことを見た。近郷八十哩四方にあつた事なら何んでも知つて居るが、決してその噂などは仕ない。慧眼な警察官でさへ氣が附かないことすら知つて居るが、その知つて居る事をおくびにも出さない。彼れは誰れにも事を計らず何事も一人一人で處理し、盃の縁を撫で廻し乍ら獨りで笑つて居る。近所の人は誰れ一人彼れに敬意を持たぬ者はない、この地方の地主で一番身分のあるスツチエルベランコ長官さへ店の前を馬車で通る度に丁寧な挨拶をして行く。

彼れは又よく人を感化する力を持つて居た。かの名高い馬盗人が、友達の厩から盗み出した馬も返させたり、又隣り村の百姓共が新任の見廻り役に付て不平を云ひ出した時にも圓く治めてやつた。其他この様な色々のことをした。併し此等のことを以て彼れが正義を愛し、近隣の人のために盡さんと欲するが故であると思つたら、それは違ふ——彼れは只己れの恩樂を妨げる様な物に對して出来る丈、これを防がうとするに過ぎない。

ニコライイヴァニツチには二三人の子供もある。妻と云ふのは、矢つ張り近年は夫のやうに可なり太り出した商賈人風の女で、尖つた鼻と險のある目とは、萬事に抜け目がないことを示して居る。イヴァニツチは何事でも妻に相談してやる、弗箱の

健まで預けてある。この女は酔奴が嫌いなので、流石に酔奴どももこの女となること憚る風が見える。一體酔奴なんていつも騒擾しくて六ヶ敷いことばかり云つて、此方にとつては幾何の利益にもなりはしない。それよりか酒を呑んでも言葉少なに、むしろ鹿爪らしい顔でもしてると云つた風の方が、この女の趣味になつて居るのだ。その子供等は總領初め四人とも死んで仕舞つて、今居るのはまだ少さいのばかり皆よく両親に似て見るさへ氣持よい様な活々とした賢さうな顔をして居る。

七月の堪へられぬ程暑い日であつた。私は二疋の犬を連れて、怠い足を引きづる様にし乍ら、コルトフカの谷添ひに、この『歡迎亭』の方へ上つて行つた。

烈日は燃えるやうに輝いて、乾いた大地を容赦もなく照り付け、塵芥交りの重い空氣が息もつまるばかりに壓した。黒光りのする色々の鴉が力なく嘴を開いて、がっかりしたと云ふ風に、通り掛りの人の憐みを乞ふ様に眺めて居た。たゞ雀の群れ丈けは一向しほれた氣色も見えず、常にも増して勢よく羽をそろへてはチュ〜／＼轉り乍ら生垣の中で騒いで居るかと思ふと、砂ほこりの道の中から一度に飛び立つて、緑の麻畑の上に一團の雲とばかり舞ひ上るのであつた。

私は咽喉が渴いて堪らなくなつた。この邊りには水らしいものもない。一體コ

ルトフカには曠野の中に立てられた村の常として泉一つ井戸一つさへなく、百姓共は、只僅かに濁り水を池から汲んで飲んでゐるのだ。……こんな見ても嫌やな濁り水は、『水』と云はれたものでない。それはとにかく私は麥酒でも、クワスでもかまはぬ、ニコライイヅァニツチの家へ行つて一杯飲らすには、とてもやり切れなくなつた。

正直のところ、コルトフカの地は、年が年中何時の時期だつて、人の心を誘ふやうな美しい景色を呈することがない。が、爲色の壓しつぶした様な村の屋並ふかい水の無い谷。瘦せ切つた長い脚の家禽が何んの目的もなくうろ／＼して居る乾燥切つた塵だらけの共有地。今は名ばかり、穴同然の窓に僅かに残つた灰白い白楊の骨組のみを存し、一面いら草迷など香氣ある草々に覆はれて、見るかげもない空ら家になつた古い屋敷跡。それから半ばは乾いた土半ばは濡れた土に縁取られ。崩れ切つた堤を以て取りまかれ中は一ぱい家鴨の羽に覆はれ、焦べた様に黒みが、つて居る油の面。さては其彼方の美しく踏み馴らされた灰色の廣地のほとりに息も苦しさうに喘ぎ乍ら恰も烈しい暑さの過ぎるのを待つて居るが様にぐつたりと首を垂れて力なく一つ所に固つてやうやく我慢して居る羊の群——此等の上に人の目を射

つぶす様な七月の烈しい日が、一面に焼くばかりの熱を投げて居る、そんな景色を見ると、それはもう胸を壓へ付けられる様な思ひがする。

私は疲れ果てた足を引きすつて、イヴァニツチの家をさして歩いた。村の子供等は、何の譯もなしにじつと夢から醒めたやうな顔をして不思議さうに自分を見て居る。犬は怒つて心臓が破れたかと思ふばかり、唖れ切つた烈い聲で吠え付いて、あはセカ〜と息も塞るやうになつて居る。

丁度この時、居酒屋の戸口から、ひよつくり脊の高い百姓が現はれた。帽子も被らず毛織の上着を着て、青い手布を腰の邊にまいた風體から見れば何やら家僕らしい。剛い胡麻色の髪の毛がやつれた皺だらけの顔の上に、蓬々と生ひ下つて居る。烈く急ぎ込んだ風で、手を振り乍ら誰れかを呼んで居るが、その手振りも思ふやうに利かぬ所を見ると、もう大分酔ひが廻つたに相違ない。

「おい、来いよ！」毛織のやうな眉毛をビク〜させて、彼れは吃りながら呼ぶ。「おい、ぼち〜、目！来いよう。まあ、何んちうだ何をぐす〜這つてるだまあ！え、兄弟。確りして呉んねいよ。皆んな家の中に待つてるだに。ぐづ〜してるつてがあるかい……む、おい。」

「お、俺れ、今行くわ。行くよと云つたらな！」濁み聲が聞えて、小家の後ろから背の短い太つた男が、跣足を引き〜出て来た。

彼れは小清楚とした布地の上着をきて腕を出し、高い尖頭帽を被つて居たが、それが眉の上まで食ひ下つて丸く肥えた顔を妙な滑稽た風に見せた。小さな黄色い目を終始動かして、その薄唇には絶えず作り笑ひを浮べ、尖つた高い鼻は舵機のような形をして、無愛想に前の方を覗いて居る。

「今行くよ。」と彼れは居酒屋の方に、跋り〜と歩き乍ら、「何の用で呼ぶだい……誰れが俺れ待つてるだア？」

「何の用で呼ぶだい！」と毛織の上着を着た先きの男は、鸚鵡返しに繰りかへして、「おい、ぼち、ぼち、目、頓馬は云はねえこつた。酒店さ來いつたのに、何の用かつて？そんな分んねえお前でもあんめい。皆さんがお前を待つてるだわ。土耳古ッべいのヤシカと野大將とジズドリーの屋臺店の旦那とよ。ヤシカが屋臺店の旦那と賭をやつただわ。麥酒一杯の賭よ。——誰れが一番上手に歌ふか、俺等が判じてやるだアな……よし、か。」

「ヤシカが歌賭ふ？」ぼち〜、目と呼ばれた男は非常な興がつて、「けんと汝だま

いらかすんちやあんめいな。え、無駄口！」
 「だまくらかすものか。」と威丈高になつて無駄口は答へた。「この頓狂め！賭をし
 たからにやア歌ふとも歌はなくつてよ。大馬鹿奴！このぼちく、目！」
 「さあ入れ。阿呆！」とぼちく、目はしつべい返して罵る。
 「入つてもやるが、まあ一つ、キツスをして頂戴よう。此方の人！」と大手を擴げて
 無駄口は吃つた。

「置きアがれ、大馬鹿！」輕蔑した調子でぼちく、目はドンと肱鐵砲をくれた。
 かくして二人は屈んで低い戸口をくぐつた。

二人の話を聞いて、私の好奇心は烈く動かされた。土耳其つべいのヤシカが近郷
 切つての歌ひ手であることは、何度か噂に聞いたところだ。それが今日計らず他所
 の歌男と聲くらべをやる。これを聞かなくてはと思つて私は急いで店の中に入つ
 た。

讀者諸君の中に田舎の居酒屋を見た人は恐らく少なからう。併し吾れく遊獵
 家は何處の居酒屋にでも入る。何れも極く簡單な構造のもので、大抵先づうす暗い
 表部屋と煙筒の付いた奥の間との二つ切り、奥の間には客が入らない様に壁で仕切

つてある。この隔ての壁には廣い口を切つて、その下に幅廣い檜の木の食卓が置い
 てある。食卓と云つて宜いか、帳場と云つて宜いか、兎に角こゝに注文の酒が出され
 るのだ。壁の口にすぐ向つての棚には、栓を抜かぬ瓶の大きいのが小さいのがズラ
 リと列んで居る。部屋の前面の方には、腰掛に交つて二三の空樽と、四角な食卓が据
 ゑてあつて、これは客の席だ。どう云ふものか、田舎の居酒屋はうす暗いもので、多く
 の家にはよく羽目板の上にピカピカする安物の銅版刷りなどを張つてあるが、そん
 なのも目につかない位である。

「歡迎亭」に私の入つた時には、已に可なり大勢の人が集まつて居た。

例の帳場の後ろの隔ての壁の切り窓に一ぱいになつて、縞の襯衣を着たニコライ・
 イヴァニツチが立つて居た。福々しい顔に勢のない笑ひを浮べて肥えた白い手で
 今入つて来たぼちく、目と無駄口とに酒をついでやつて居た。その後ろの窓近い
 隅の方には、目の烈い妻の顔が見えた。

室の真中には、土耳其つべいのヤシカが立つて居た。二十三になる瘦せたすらつ
 とした若者で、青い帆木綿の裾長な上衣を着て居た。一寸氣の利いた職人風で、其顔
 色から見ると、餘り健康な方ではないらしい。落ち込んだ頬、大きなキョトクした

灰色の目、ビク／＼動く小さな小ばなを列べて真直に通つた鼻坂なりの白い額の上
 に綺麗に撫で上げた色のよくない蔦色の髪丸形ではあるが可愛らしく表情の豊か
 な口元此等の全體の顔立ちが彼れの極めて情熱的な感情家であることを示して居
 る。

彼れはもう胸を轟かして居るやうに見えた。熱病にでも罹つたかと思ふほど、バ
 チ／＼目まばたきをして呼吸は忙しく手先は震へて居た。彼れは實際一種の熱病
 に罹つて居たのだ——聽集の面前に立つて演説でも歌でもやつたことのある人は
 よく知つて居るだらうが神經が急に興奮した時に起る一種の熱病である。

彼れの直ぐ近くには四十ばかりの男が立つて居た。肩幅の廣い頸の張つた狭い
 額に細い鞆靴人のやうな目低い平たい鼻それに四角ばつた頰を突き出して頭には
 刷毛のやうなゴリ／＼した真黒な毛を光らして居る。その顔色の悪いこと——丸
 で鉛の色を交へたやうな黒い色をして——取りわけ青白い唇の色と来ては、それに
 静かな夢みる様な所がなかつたなら、怖らく野蠻人と思はれたかも知れぬ。彼れは
 筋肉一つ動かしもせず、びきに繋がれた牡牛のやうに、のろ／＼と四邊を見廻して
 居た。すべ／＼する光る真鍮鈕の付いた中古の外套を着て黒くなつた絹手布を太

い頸に巻いて居る。これが野大將と呼ばれた男である。

野大將と丁度向き合つて聖畫の下の腰掛には、ヤシカと競争をやらうと云ふ男、ジ
 ブドリ一の屋臺店の旦那が腰を掛けて居た。小さい頑丈な身體の年の頃は三十位
 で、ちいれつ毛のさきの丸い仰向いた鼻に活々とした蔦色の目をして、薄髯を生やした
 あばた面の男である。両手を腰の下に敷いて足をぶらりと垂れて、流行の縁飾りの
 ある長靴の先きで、ゴトリ／＼地を叩き乍ら、チロ／＼四邊を見廻して居た。身には
 毛羅沙の襟の付いた灰色の淡い上衣を着て居たが、それが胸にしつかりと鈕をかけ
 た下衣の赤襯衣と面白い對照をなして居る。

向ふ側の隅戸口の右の方には、一人の百姓が肩に大きな穴のあいた窮屈らしいボ
 ロ／＼の仕事着をきて、食卓に倚つて座つて居た。

日光は二つの小窓の塵だらけの硝子を透して室の中に細い黄色な縞を畫いた。
 けれどなほ、それ丈の光りが骨折つてうす暗い室を明るく仕やうとしたが効果がな
 かつた。凡ての物が處々に光を受けて居るやうで廳ろであつた。しかし室の中は
 涼しかつた息もつまりさうな暑さは、こゝの敷居を跨ぐとから背負つた荷を投げ出
 した様に軽くなつた。

私が此店に入つて来たので、初めには客共も一寸落ち付かぬ風に見えたが、ニコライイヴァニツチが親しげに私と話すのを見て直ぐ安心して間もなく私の居ることなどは忘れて仕舞つた。私は麥酒を命じてポロ／＼着物の百姓に近く、隅の方に腰を下ろした。

「さあ、いつまで愚圖々々して居るだア？」と例の無駄口は、グツと一杯の酒を一口も飲み干して又妙な手振りをし乍ら呼び出した。この男は手振りをしななければ、一口もきけないと見える。「始めるなら、さあ、始めろ。おい、ヤシア！」

「始めた／＼！」とニコライイヴァニツチも賛成の意を表した。

「そんなら始めやう。私はいつでも宜い。」自信あるやうな笑みを浮べて冷やかに屋臺店の旦那が云つた。

「私も宜う御座んす。」ヤシ公の聲は震へて居た。

「さあ、始めたり、二人共！」とぼち／＼目が泣くやうな聲を出した。

皆んなが斯う云つて待つて居るのに、二人とも歌はうとしない屋臺店の旦那は腰掛から立ち上りもしない。——何かまだ待つものがある様に見えた。

「やれ！」と野大將は鋭く重々しく云つた。ヤシカはビクリとした。屋臺店の旦那

那は帯を引き締めて咳拂ひをした。

「けれど、誰から初りませうな。」

野大將を見て、一寸作り聲をして、屋臺店の旦那は訊ねた。野大將はこの時室の真中に進まじげな脚を踏み開き、その溜々した腕を肘の隠れるほど下袴の隠袋に差し込んで、なほ身動きもせず突つ立つて居た。

「そりやアお前、お前よ！屋臺や！」と無駄口が吃り乍ら、「お前に極つてるわアな、兄弟。」

野大將は額越しにデロリと彼れを見やつた。無駄口は小さな舌打をしながら狼狽て天井に目を外し、一寸肩をすぼめて、それ切り黙て仕まつた。

「籤を引くんだ！」と野大將は屹となつて、「それからその卓の上に杯を置け。」

ニコライイヴァニツチは屈んで喘々云ひ乍ら床から麥酒の杯を取り上げて、食卓の上に置いた。

野大將はヤシ公の方に一瞥をくれて、

「さあ！」

ヤシ公は隠袋の中を探つて、二錢銅貨を取り出し、齒で以てそれに印しを付けた。

屋臺店の旦那は長い上衣の裏から新しい熟革の財布を取り出し、念入りに紐を解いて、小銭をザラ／＼振り出して、一枚の新しい二銭銅貨を取った。無駄口が頭の尖端の破れて垂んで居る汚い帽子を出すと、ヤシ公が先づその中に銅貨を投げる。屋臺店の旦那も續いて投げ入れた。

「貴様、その中から一つ取れ！」と野大將はぼち／＼目を見返つた。

ぼち／＼目は満足さうに莞爾して、兩手に帽を掴んで振り初めた。

一座はその瞬間、ひつそりと静まり返つた。チャラ／＼と相打つ銅貨の音のみが、微かに聞えた。私は氣を止めて、ずつと四邊を見廻した。どの顔も／＼待ち遠しさの色が一ぱいで、野大將さへ何うか落ち付かない様子に見え、例のポロ／＼着物の百姓はさうなる事かと首を鶴のやうに伸ばして居た。

遂にぼち／＼目が帽子の中を探つて、掴み出したのは、屋臺店の旦那の銅貨であつた。人々は云ひ合せた様に、ホツと息を吐いた。ヤシ公はサツと顔を赤らめた。屋臺店の旦那は頭を掻いた。

「ほら、俺れがお前だて云つたに違えあんめい。」と無駄口が叫ぶのを、

「これ、わい／＼云ふな。」と野大將はしりり目にかけて、更に屋臺店の旦那に、

「やれ！」と頷いて見せた。

「何を歌らう？」と屋臺店の旦那は心配さうになつて訊ねる。

「何でもお前のいゝもの。一番好きなのをやれ。」とぼち／＼目が口を出した。

「さう／＼お前のいゝものをやんなさい。そんな事は全くお前の勝手なんだから。好きなものをやるさ、何でも、上手に歌ひさへすりやア宜いんだ。此方はそれを聞いた上で、公平な判断をする丈だ。」と云つてニコライイグアニツチは静かに胸の上腕を組んだ。

「公平な判断、遠えねえ。」と空盃の縁を舐めすり乍ら無駄口が又口をはさんだ。

「一寸咽喉慣しをさせてくれ。」と屋臺店の旦那は、上衣の襟を直しにかゝる。

「さあ、さあ餘計なことは要らん——初めろ！」と野大將は彼れを遮つて、グツと見下ろした。

屋臺店の旦那はしばらく考へて居たが、遂に頭を振つて進み出た。ヤシ公の目は側目も振らず、彼れを見詰めて居た。

今いよ／＼腕競べの幕は開けるのである。けれ共、その前に少しく此等の人々に付て話して置くのも無益な事でもなからうと思ふ。彼等の中の或る者に付ては、そ

の生活状態なども私が此店で逢つた時既に分つて居たのだが其他は後から聞き集めたものもある。

先づ無駄口から始めよう。この男の實の名はエズグラフィアノグイツチと云ふのだが近所の人達さへその名を知らない。何處までも無駄口々々々で通つて居る。實際又自分でもこの綽名を使つて居る位よく箱つた名なのでこんな取り處のないやくざ者にはこれより適當な名は付けられまい。家奴であつたが女房も持たず、年中のらくらして居るので長い前主人に解雇されて仕舞つた。今では何の仕事もなく、一錢の儲け口もなく、只毎日人の錢で飲み食つて居る。誰れも何の爲めに此麼奴に振舞つてやるのか自分乍ら分らないのだが、それでも茶や酒を呑してくれる人がこの邊りには澤山居た。この男が居る爲めに一座に興を添へることなどは全くなく却つて譯も分らぬ事をベチャ／＼喋り散らし嫌やに馴れ／＼しくしてのべつ變な身振りをしたり、終始取つて付けた様な笑ひをするのには誰れも彼れも困り抜いて居る。お負けに歌が一つ歌へるではなし踊りが一つ出来るではなし氣の利いた事も云へねば生れて以來辻褄の合つたことさへ云つた例しがない。只譯もなく喋り口くつてそれが皆んな根なし言と來て居る。——それこそ全くの無駄口やだ。

その癖またこの地方三十哩ばかりの間なら什麼酒の席にでもその瘦せた姿をしてやつて來ない事はない。こんな仕末に今ではもう飛んだ悪魔に見込まれたと思ひ諦らめて皆が彼れの來るに任せる様になつた。彼れは一つの厄介物として扱はれて居るのだ。けれども流石のこの恐かな出者張り者も、只野大將にかゝつては、とんと頭が上らない。

ぼち／＼目はまたまるでこれと違つて居る。別段人よりも餘計に目瞬をやる。云ふのでもないが、この綽名は又よく彼れに當つて居た。誰れも知つて居ることだが、一體に露西亞の百姓共は、うまい綽名を付けるに妙を得て居る。私はこの男の過去の經歷を詳しく知りたいと努めたが、多くは暗黒の中に隠されて居る。これは私ばかりでない、恐らく他の人々にもさうだらう。云はゞ經歷なるものは學者の所謂「忘れ易き暗黒」の中に葬られたのだ。只私はこれ丈けの事實を知つて居る。嘗つて彼れは子のない老婦人の馬丁に使はれて居たが、その扱つて居た三匹の馬を持つて逃げた。かくて丸一年の間姿を見せなかつたが、方々さ迷ひ歩いて居る中に宿無人の苦しさ辛さに堪らなくなつたと見えて、どう／＼跛足になつて戻つて來て前の女主人の足下にその身を投げた。それから數年の間、この不心得のお詫にと云つ

て骨身を惜まず働いた。それで段々主婦の機嫌もなほり遂に全くその信用を得て、見廻り役にされた。その後女主人が死んだ時——什麼いふ風にしたのか分らないが——自由な身になつて出て来た。それから小賣商の仲間入りを許されて近所の人々から少しばかりの空地を借り、どう——身代を仕上げて今では豊かな安樂な暮らしをして居る。

彼れは酸いも甘いも嘗め盡した男で、世の中のことは何でも知つて居た。それで仕事をやるにはいつも好悪の考へなり利害の觀念が先きに立つた。長らく諸方をぶら付いてる中によく人の氣質を飲み込んで仕舞つて何うすれば自分の利益になるか位は知り抜いて居るのだ。狐のやうに用心深い男で、その癖冒險もやる。又年老つた女達の様に世間話をするのが好きだが併し人には勝手に打ち明け話をさせても自分一人は決して口を開かないと云ふ風であつた。一體こんな狡猾い男は空惚けて馬鹿の風をするものだが彼れはそんな事をしなかつた。馬鹿の振りをして人を取り入れる事などは彼れに取つて却つて六ヶ敷いことであつたのだ。

私はこの男の様に鋭く光つた目を見たことがない。それは如何にも狡猾らしい小さな目で、オーレルの人々が云ふ通り丸で「覗き込んで」居るやうだ。二つの目

は決して只ばんやり見て居るやうなことはなく、いつもドロ／＼と上下から腹のうちまで見通す様に見て居る。このぼち／＼目は時とすると何でも些細な事に、じつと何週間も考へ込むことがある。さうして舉句今度は急に思ひ切つた大膽なやり方を決行する。こんな道り口は得て失敗を招き易いと人には思はれるのだが……併しそれが皆んな思ふ通りに行く。不思議に凡ての事がうまく進む。全く運のいい男と云ふべきで自分でも何となく運が向いて居るやうに思ひ、又深く夢知らせなどを信じて居る。由來彼れは中々の御幣かつぎなのだ。彼れは又他人と關係ふことを烈く嫌つて居るので人には好かれぬが、一簾の尊敬は受けて居る。家族と云つては、たつた一人の小さな秘蔵つ子丈けである。こんな父に育てられた息子は世の中に出て成功するものかも知れない。

「小供のぼち／＼目は矢つ張りあの親父の通りになるんだ。」と夏の夜など壁側に集まつて色々な世間話をする時などに、年老つた人達は私にかう云つて居る。人々は皆よくその意味を覺つて居た。もうこの他彼れに付て云ふことはない。

土耳其ッペいのヤシカと屋臺屋の旦那ぼうに付ては多く語る要がないと思ふ。ヤシ公は戦さの時捕虜になつて来た土耳其女の腹から出たので、土耳其ッペいと云は

れて居る。この男はさる商人の經營つて居た製紙場の柄杓取りに雇はれて居たが實に天然の美聲を持つて居た。屋臺店の旦那の經歷に付ては私は何も知らぬと云ふより外はない。彼れは小賣商をやつて居乍ら何にでも手を出さうとして居る抜け目のない町人として私の目に止まて居る丈だ。

併し野大將に付ては詳しく云はねばならぬ。

初めてこの男を見た時私はいかにも荒つぽい、おちけない力のある男だと思つた。その顔かたちこそ不綴標で所謂噛んで吐き出した様であつたがそこに猶勝ちほこつた力が表はれて居た。そして——實に不思議なことに——その熊の様な様子には何處となく深く自らの力を固く信頼して居るために一種の品位があつた。初めにはこのハークユリス(力の神なり)は何をやつてる男か判断も付かなかつた。家僕とも見えず小賣人とも見えすと云つて、扶持離れをした貧乏番頭とは猶更見えず又落魄れて蠟人や犬類の番人になつた小地主とも見えない。實際彼れは一種特別な人間であつた。一體何處からこの土地にやつて來たのか何のために此處へやつて來たのか知る者は一人もなかつた。噂によればその祖先は自由權を持つた瘦地主で、何處でか政府の官吏を務めた事があるとかいふが何も確かな據り所はない。

實際誰に聞いても知つて居る人はない。——無論當人に聞くわけには行かない。彼れはえらい沈黙の氣六かし者で何をして食つて居るのか確と知つて居る者はないと云ふくらゐ商賣もしなければ人交際もしないけれども不思議に金を持つて居る澤山でもないがいつも持つて居る。さればと云つてその行動から見れば、とても世間を離れると云ふ柄ではない——世間を離れるなんてそんな字は彼れに當つべき言葉ではないのだ。ではあるが彼れは世間の人などを一向目にも入れて居ない様に、我れ關せず焉で暮して居る。

この野大將(これは世間で付けた綽名で、本名はベレヴリエソフと云ふ)は自分の力がこの地方全體に及んで居る事を愉快として居る。別段他人に命令を下すやうな權利も持つて居ないし、又偶然逢つた人々に向つて己れの命に従へと要求した譯でもないが人々はかれの言ふ事なら即座に従ふ。今では彼れ口を開けば——衆唯々として従ふと云ふ程になつた。然り強さは常に抗すべからざる力である。

彼れは一滴の酒も吞まず女に手を出すこともなく、只もう一團に歌をきくのが好きである。どうもこの男に付ては不思議な事が多い。その身の中には何か大きな力があつて、一度この力が首を擡げて破れ出た日には、その身は云ふまでもなく、それ

に接する四邊にある凡てのものをも粉砕せざれば已まないとはいふ事を自覺して居るらしい。そしてこの人の此れ迄の經歷の間にその力が嘗て破裂した事があつたが今は久しく嘗めた世路の經驗により即ち危く身の破滅に至るのを免れたといふ經驗に依つて又してもその破れんとするのを辛く抑へて居るに相違ないのだと思ふ併しこの想像が當らぬとすればそれは私の大間違ひと云ふより外にない。殊に彼れに付て私の驚いたのは生れ乍ら受けた殘忍な性質があると共に又同じく天賦の寛宏な心を持つて居ることであつた。——この様な二つの性質を兼有つた男は私は見たことがない。

さて屋臺店の旦那は進み出た。半ば目を閉ぢて聲作るひをして歌ひ初めた。少し頃れ氣味の聲ではあるが中々に美しい氣持のいゝ丁度雲雀の聲をきくやうであつた。ころ／＼と轉び出る節廻しは絶えるかと思へば巧みに續き高く又低く聲は微かに震へた。高い調子の所に來る毎に特に氣を付けて高々と聲を張り伸しふつと切つたかと思ふと又忽ち初めの調子に返つて大膽にうたひ進んだ。随分思ひ切つた怖ぢけない調子の中に多少の可笑し味が交つて居た。これ等は鑑賞家の大に喜ぶところで又音樂を専門とする獨乙人の眞面目になつて攻撃する點である。

彼は實に露西亞の tenore di grazia, tenor léger. (優れた中音聲樂家といふべきであつた。彼れは活々とした舞踏の拍子を歌つた。先きから先きへと變つて突然調子外れな嘆聲を加へては又繰り返して歌ふと云ふ風のそれは入り組んだもので歌の中から僅かに私の聞き止めたのは次のやうな句であつた。

可愛い姉さの爲ならば、

お庭の隅の土塊も、

掘つて平らして進せましょ。

可愛い姉さの爲ならば、

そこに小さな紅花の、

種をば蒔いて進せましょ。

皆耳を傾けてこの歌に聞き入つた。彼れは音樂を聞き分ける人の前で語つて居るかのやうに有らん限りの力を籠めて歌つた。實際彼等はこの地方での音樂を聞き分ける人達でもあり又オーレル街道のセルゲイズコエ村は相當に諧音の合唱には秀れて居るとして露西亞中に知られた處である。

屋臺店の旦那の歌は初めしばらくの間は合唱の助けがなかつたので別段聞く

人の耳を聳てしめる程の所もなかつたが、遂に最後の一段に至つて、それは華々しい云ふに云はれぬ妙調を歌ひ出した。この時には流石の野大將さへかすかな微笑みを見せたが無駄口に至つては吾れを忘れて叫び出した。人々は皆立ち上つた。無駄口とばかり、目はこそ、耳打ちをしては、「確りやれ……いよ大將！その調子で……歌れ、チェスト！そこだ、もう一つやれ！畜生！……よッ！旨えぞ、と叫びつける。帳場の奥に居たニコライイザニツチは、ひどく感心したやうな様子で、何度もく、頷首いて居た。無駄口は仕舞ひにはもう脚を浮かして肩をねちり乍ら爪先で拍子を取り初めた。この間ヤシカの目はきら／＼と黒光りに輝いて、始終木の葉のやうに震へ乍ら落ち付かぬ笑みを漏して居た。併し野大將丈けは顔の色も動かさず、ちつと前のやうに突つ立つて居た。けれど、屋臺店の旦那ぼうを見やつた目には、なほ唇に蔑む様な色を止めて居たに拘はらず、何處もなく柔かな光が見られた。

人々の感に入つた顔色を見て、屋臺店の旦那ぼうはいよ／＼勢を得丸で轉ばすやうな美しい節廻しを續けて、一倍力を入れて歌ひ出した。震へ聲を出して舌を丸めて調子を取り、咽喉も裂げよと張り上げたが見る／＼顔は真青にぐつたりとなつて熱

い汗が全身に流れた。一節苦しげな死ぬやうな調子を最後として歌を止めたがもう堪らず、かきと腰を下ろした。人々は一齊に烈しい賞讃の叫びを放つた。無駄口は長い骨張つた腕を仰べて彼れの頸根にしがみ付いた。ニコライイザニツチの澤々した顔には紅みが上つて若返つたやうに見えた。ヤシカは狂氣のやうに、「素的！素的！」と叫んだ。——私の隣席に居たポロ／＼着物の百姓さへ覺えず拳をあげて卓を叩いて、「あ、よく歌つたなあ。滅法もねね、よくやつた！」と云つて、もう勝負は濟んだと云はぬばかり横を向いて唾をした。

「やア兄弟旨かつたぞ！」と無駄口は疲れ切つた屋臺店の旦那ぼうにしがみ付いた手を緩めないで、「ほんとに旨かつたぞ。もう誰れが何と云つたつて！お前が勝ちだ。兄弟お前が勝ちだぞ！お目出度う——賭物はもうお前のもんだ！ヤシカなんかい何うして／＼……分つてるさ。何うしてお前に……吃度俺が受合つた。」と又しても強く屋臺店の旦那ぼうを抱きしめた。

「こゝら離してやれ／＼。お前にかゝつては、はやかなはねな。」とぼち／＼目は氣の毒さうに、「腰をかけたさしてやれよ、疲れてるだに。おい……馬鹿兄弟つたらほんとに馬鹿だなあ！何だつて、そんなに濡れつ葉見ていにひつ付くだよ……。」

「そんだったら、まあ腰を掛ける、それから俺ら、お前のお祝ひに一杯飲むせ。」と云ひ乍ら無駄口は帳場の前に歩み寄つて、「お前の分に付けとくぞ、なあ兄弟！」屋臺店の旦ぼうを願みて、かう付け加へた。

屋臺店の旦ぼうは領首き乍ら腰掛に腰を下ろし、帽子の中から布切れを引き出して、顔を拭いて居る。その間に無駄口はにこ／＼者で、がツと一息に盃を平げ、咽喉を鳴らして、甚しい呑みぬけには能くある事であるか、心配さうな沈んだ顔をした。

「ほんとに旨いなあ、お前さんは。實に旨いよ。」とニコライ、イグアナニツチは愛想よく云つて、

「さあ、ヤシア、今度はお前さんの番だ。宜いかな、怖々するなよ。誰れが上手だかは、俺等の方で見てやる、なあ、よく見てやらア。併し、どうも屋臺店は旨いことを歌つた。ほんとに旨い！」

「ほんとに、うまいわね。」とイグアナニツチの妻は笑みを湛へて、ヤシ公の方を見た。

「旨えとも、はあ。」私の隣席の男は小聲に繰り返した。

「やあ、木偶漢のおやぢ！」と無駄口は肩の裂けた着物の百姓を見付けて、ツカ／＼近寄りながら、その顔を指して馬鹿にしたやうな調子で、

「はつは、此方へ来い。木偶漢のおやぢ！藪村から来たボロ／＼爺！お前此所さ何しに来た？」とよろ／＼足も定まらず大笑ひしてほざいた。

可哀さうに百姓はまご／＼して立ち上り急いで出て行かうとしたその時急に野大將の鐵のやうな聲がひびいた。

「何馬鹿云つてるんだ？」とギリ／＼齒がみをして言つた。

「何何もしてねえ。」と無駄口は口籠り乍ら、「何も俺ら……只その……。」

「もう宜い止せ！」と頭から叱り付けて、「ヤシ公！さあやれ！」

ヤシ公は咳拂ひをして、「ぢやア、やりませんが……何をやりませうな……皆さん。……わ、私にやア、何をやつて宜いか、どうも……。」

「ナニ何でも宜い。怖々するな。大事の場合だ……怖ける奴があるか……さあ、お前の一番得意なのをやれ。」

野大將は待ち兼ねた様に見下ろした。

ヤシ公はしばらくの間黙つて居たが、四邊をチラと見廻して片手に顔を隠した。

人々の目は一齊に彼れの上に集まつた。殊に屋臺店の旦ぼうは、例の自信のあるやうな色自分の成功に得々たる様な顔をして居たが、その中になほ一點何處となく

微かな不安の色が見えた。両手を股の下に敷いて、前の様に足を動かさず、ちつと後ろの壁に凭れて居る。

遂にヤシ公は顔から手を取ったがその色は死人のやうに青ざめて居て眼は垂れた。睫毛の下に、かすかに光った。

太い嘆息をして彼れは遂に歌ひ出した。……初めその聲は至つて微かで、一向調子が乗らず胸から出て来る聲のやうではなく、恰も何處か遠いところから漂つて来る聲がふとした事で此所にまぎれ込んだ様に思はれた。この打ち震ふ聲の反響する様な節廻しが不思議に吾れ／＼の心を引いた。皆顔を見合はした。ニコライ、イザアニツチの妻は覺えず身を乗り出した。

初めの一節は次の一節に變つた。前よりももつと思ひ切つて、永々引き伸ばしたけれども、なほ聲は震へて居た。急に只わけもなく絃を叩かれた立琴のやうに規則もなく震へて、最後にフツと消えたかと思つたら、更に第三の節に移つた。だんだんに興に乗つて聲幅も廣がりその調子は一種云ふに云はれぬ悲壯な音を傳へた。

大野の中の細道は
只一筋にてはなかりけり

と歌つた聲は實に美しく、涙を催ふすほど吾れ／＼の耳に響いた。實際この年まで私はこのやうな聲を聞いたことがない。何處やらに皺唄れ氣味の聲でや、しつかり仕ない處もあり殊に初めの中こそ幾何か弱い調子も見えたがその聲の中には情熱に富んだ若々しい美しさの深い閃めきが籠つて居た。そして魂をそゝる様な而も態どならぬ飾りなき憂鬱の色もこもつて居た。眞實なる火の如き心露西亞人の精神はこの聲の中に横はつて息をして、人々の胸に全露西亞の人々の胸に眞直に泌み込むやうに思はれた。

歌はいよ／＼調子を高めて室中に流れ渡つた。ヤシ公は一心こめて、よごみもなく歌ひ進んだ。今は少しも臆する所なく自ら神來の境に入つたのである。聲はもう震へなかつた。いや、まだあるかないか分らぬ位の震へを止めて居たが、それは自然の情熱の震へであつて、その聲は聞き惚れる人々の胸を矢のやうに貫くのであつた。彼れはもう全く落ちついて氣分も確りし、聲の太さも常態に返つたのだ。

私の胸にはふとある事が浮んだ。嘗つて私は落日を望んで砂濱に立つて居たことがある。潮は引沙で、浪は遠くから重々しく脅かす様に陰をなして寄せて居た。その時、一羽の大きな白い鷗が降り立つて絹の如きその胸に夕日の紅を浴びて身

動きもせず、只折々大きな翼を一ぱいに張つては、馴れ親んだ荒海と今沈み行く凄然たる太陽とを視するものゝやうに見わた。私はヤシ公の歌をきゝ乍ら何ともなくその鷗を思ひ出した。

ヤシカは目の前の敵手も忘れ、吾れ／＼の凡てをさへ忘れて歌つた。恰も荒海の浪の上に抜き手を切る勇者の如く、吾れ／＼の黙した涙ある同情をたよりにして居るやうに見えた。歌の聲のその一音々々に、身肉に沁み入るなつかしさ、限りなき廣さと大さが含まれて居るやうで、恰も舊知の廣野が目の前に擴げられ、遠く／＼果てしもなく擴がつて行くやうに思はれた。私は胸に漲る熱涙が、双眼に押し寄せて来るのを覺わたと、急に微かな咽泣くやうなけはひがした。ハツと思つて……四邊を見廻すと——店の主人の妻が胸をひしと窓に押し當てゝ啜り泣きをして居た。ヤシ公はチャリと彼の女を見やつて、そして更に美しく、更に微妙な調子をうたつた。ニコライイヅアニツチはちつと首を垂れ、ぼち／＼目は顔を外向けた。無駄口は全く聞き惚れて、突立つたまゝ、馬鹿のやうに口を開いて居た。賤しき百姓は隅の方で私かに啜り泣き乍ら頭を振つては何事か悲しげに呟いて居た。野大將の鐵のやうな顔には、その高い額の下から、ぼろ／＼と熱い涙が流れ落ちた。屋臺店の旦那

うは握りしめた拳を額に當て、身動きもしなかつた。……この儘に進んだら人々の感情は何處まで進むか果ても知らぬのであつたが、この時ヤシ公は突然あらん限りの高調子——その聲が裂け破れたかと思ふほどに飛び放れた鋭い一節を歌つて、ヒタと聲を止めた。

誰れ一人言葉を發する者がいない、身動きさへするものがない。もつと歌ふのだから、皆がそれを待つて居る様に見えた。けれどヤシ公は却つて皆の黙つて居るのを不思議さうに訊ねる様な顔付で人々の上を眺めた。そして勝利は自分のものであることを覺つた。

「ヤシア。」彼の肩に手を置いて野大將は云つた。この上に云ふことは出来なかつたのである。

吾れ／＼は只化石したやうに立つた。

屋臺店の旦那は靜かに立ち上つて、ヤシ公の所に進み、

「お前……お前が……お前が勝つたんだ。」やつこのこと聲を絞つて云つて、ツイと室の外に出た。

この素早い思ひ切つた行動は、恰も呪禁を解た様に、一座の沈黙を破つたので、急に

ドツと喜びの聲が起つた。無駄口は跳ね上つて、吃り乍ら風車のやうに腕を振廻す。ほち／＼目は跛足を引きつづつて、ヤシ公にキツスを初める。ニコライイヴァニツチは立つて自分からも更に麥酒一杯の賭物を追加することを勿體らしく報告した。野大將は親切らしい無邪氣な笑ひを見せたが、彼れの顔にこの様な笑ひを見ようとは誰れしも思ひかけぬ所であつた。賤しい百姓は袖口を以て、目から頬から鼻から、鼻まで拭ひ廻して、「あゝ旨い全く！どうしたらあんなに出来ンのかなあ。けどうまい！」と繰り返して居た。イヴァニツチの妻は、目の險を赤く泣きはらして、急いで座を立つた。

ヤシ公はこの勝ちを子供のやうに喜んで顔色も前とは打つて變り、その目には殊に美しく喜びの色が輝いた。皆は彼れを帳場の前に引つ張つて行つた。引つ張られ乍らヤシ公は泣いて居た百姓を手招きして、この店の小さな子に、屋臺店の旦那を尋ねにやらした。けれど、その姿は見えなかつた。

かくて酒宴は初まつた。
「今一つ歌ふだらうなお前晩まで歌つて聞かせるだらうな。」と無駄口は両手を空にふり動かして云つた。

私は何度かヤシ公を見返つて、この店を出た。もう止まる要もない——永く居ては却つて受けた印象を損するであらうと怖れたのである。
戸外はなほ堪へ難いほど暑かつた。熱は重く、空からぶら下つて地の上を覆ひ被せて居るやうで、紺青の空にはきら／＼する小さな光が細かなうす黒い塵を通して、電光のやうに飛ぶかと思はれた。四邊は實に静かである。この疲れ果てた自然の奥深い沈黙の中に、何か頼りない、憐う人を押し付けるやうな氣が籠つて居た。

私は乾草棚の影に行つて、まだ刈つてから間もない様であるが、もう大方は乾枯びて居る草の上に寝ころんだ。一寝入りしようと思つても、何うも眠れない、久しい間ヤシ公の引き立てる様な聲が耳の底に鳴つて居た。……けれど、暑いのと疲れたのとで、いつか正體もなく寝入つて仕舞つた。目をさました時には、四邊はもう暗かつた。そこらに散らされた枯草は、強い匂ひを放つて、かすかな濕りを帯びて居た。草棚の半ば開かれて居る屋根の細い梅の間から、青白い星がありともなく瞬いて見える。私は歩き出した。
夕映の色は、もう疾うに消え果て、仕舞つて僅かに名残の線が地平線にかす

かな光りを見せて居た。けれど爽やかな夜氣の中にも、なほ終日焙り通された空氣の餘温が残つて、胸は切りに冷たい風の一吹きを望んだ。が、そよとの風もない空には雲も見えぬ隅から隅まで晴れ渡つて透き通る様なうす暗い夕空の中に見えるか見えない位やはらかな星の光が、數も知れず輝いて居る。

村の方には灯影がちら／＼動いた。すぐ近くの華やかに燈の付いた居酒屋からは、がや／＼騒ぎ立てる聲が調和もなく、縫れ合つて起つた。その中にはヤシ公の聲も聞えるやうで、時々どつとばかり破れるやうな笑ひ聲が交つた。

私は小さな窓側に歩み寄つて硝子に顔を押し付けて中を覗いた。一座の光景は實に盛んで勢はよくあつたが心持の好くない有様であつた。皆が飲んで居た――ヤシ公を始めとして。

ヤシ公は胸を露き出し腰掛に坐つて怠儀さうに譯もなくチャラ／＼六絃琴を鳴らし乍ら濁み聲をあげて踊り調子の里歌をうたつて居た。汗に濡れた髪の毛は無氣味なほど青白い額の上に、房のやうに下つて居た。室の真中には無駄口が上衣も投げ捨て、丸で螺旋を廻すやうに跳ね廻り乍ら例の灰色の着物をきた百姓の前を、踊つて居た。百姓がその側から覺束ない調子で足拍子を取つては、もしやくしや髯

の底から齒をむき出して矢鱈に笑ひ乍ら、「そらやれッ！」とでも云つたやうに切り手に手を振り動かす。その顔と云つたら、これより滑稽なものは恐らく又とあるまい。どんなに眉をビク付かせても其の重い眼瞼は上りさうにもなく、良くも見えない。臍臍とした人の胸を悪くするやうな眼の上に覆ひかぶさつて居る。かれは全く酔ひつぶれて他愛もなく若し表てを通る人が彼の顔でも見たならば決ツと「いや、御機嫌だね」といふに違ひないであらう。

ほち／＼、目は隅の方に鰻魚のやうに赤くなつて、鼻の孔をふくらして懸命に笑つて居た。只ニコライイヴァニツチ丈けはいかにも居酒屋の主人らしく相變らず穏やかな顔をして居た。室の中には多くの新しい顔も集まつて居たが野大將はとうしたのか見えなかつた。

私は急いでそこを引き上げて、コルトフカの方へと丘を下り初めた。この丘の裾には大きな野が擴がつて居る。夜の霧の仄白い浪の底に沈んで野は一層廣漠として暗い空と交はつて居るのかと思はれた。

私は大跨に谷添ひの道を歩いた。その時何處からともなく、廣野の遙かの彼方から、はつきりとした子供の聲が聞えた。

「アントロブカ！アントロブカ——ア！……。」と終の字を長く引いて自暴
 になつて叫ぶやうな涙聲がきこれた。

子供はしばらく聲を静めて、また叫び出した。その聲は静かな軽い睡つたやうな
 空気の中にはつきりと鈴を振るやうに響いた。凡そ三十度もアントロブカとそ
 の名を呼んだ。その時急に、廣野の遠い果てから、恰も他の世界から来たもの
 やうに聞き取れぬ程の答へが漂つて来るやうに聞えた。

「何だい？」

子供の聲は喜ばしうに一際高く直ぐ叫び返した。

「早くお出よ、お——い！」

「何で……？」と先方は永く間を置いて答へた。

「何でつて早く来ないと父んに叱られるよ。」と初めの聲は急いで云ひ返した。

先方の聲はもう答へなかつた。子供は又アントロブカと呼び始めた。その聲は、
 低くくだんく間遠になつて消えようとしては、なほ微かに私の耳底に漂つた。

この時日は全く暮れ果て、私は村境のコルトブカから三哩ばかりある森の角を廻
 つて居た。……

「アントロブカ——ア！」といふ聲は

夜のかげに深く包まれた空中になほ聞えて居た。

「十八」

ピオトルペトロヴィツチカラタエフ

五年前の秋のこと、モスカウからチユラへ行く途中で馬のない爲め、丸一日を立て場に暮したことがある。私は鳥射ちの歸り道であつたが、つひうっかりして三匹とも自分の馬を先きに歸して仕舞つたので。

立て場の取締をしてる男は意地の悪さうな大分年のいつた男で、長い髪のを額から鼻の上まで振り下げ、睡さうな小さな目をして、色々私に困る事を言つたり馬の世話を頼んだのに碌々返事もせず分らないことをブツ／＼云ひ乍ら丸で自分の職業がいやであることでも云ふやうに荒々しく自暴に戸を締めて出て行つたが、その出しなに、上り段の處で御者ごにも怒鳴り付けた。御者共は重い木の頸木を腕に下げて泡だらけの所を氣樂さうにぶら／＼して居るのもあれば、腰掛に腰かけて、欠伸を仕乍ら、ボリ／＼掻いてるのもあつたが、取締の怒鳴つたのなどは何處を風がど云つた風に、平氣なものだ。

私はもう三度も茶を入れて貰つたし、何度も／＼眠らうとしたが、さつぱり眠られない。そのあたりの壁や窓に張つてある掲示は、すっかり讀んで仕舞つた。實にもう倦き／＼して何うにも想うにも仕末が行かす果ては落膽して力抜けがして、只馬車の仰向いた轅を見詰めて居た。この時突然鈴の音が聞えて、喘ぎ／＼三頭立の馬車が上り口の處に着いた。新來の客は馬車から飛び下り様

「馬をな！ 大急ぎで！」と叫び乍ら室の中に入つて來た。そして、こんな場合には誰れでも斯うしたものだが見廻りの役人が今一匹も馬が居ないと答へるのに、不思議だなど云ふ様な顔をして聞き入つて居た。

その間私はあまりの退屈まぎれに食るやうな好奇心を以てこの新來の仲間の頭から足の先きまで仔細に見きはめた。何でも三十に近いらしい顔には深く痕を残したあばたが黄色に乾付いて見ると嫌やな銅色を残して居る。長い青黒い髪のは頸根の後ろに縮れて垂れかゝり、前の方には華美な形に巻かれて居る。小さな膨れぼつたい目は何の愛情もなく上唇の上には、芽ぐみかけた薄い髭が見える。丁度馬市場などで熱く見る放埒な田舎紳士と云ふ風體で、大分脂じみた紐ごめのコーカサス上衣色の褪めた淡紫の襟飾銅の鈕の付いた胴衣に大きな煙筒とでも云ひさう

な灰色のズボンを穿いて、その下からは磨かない靴の先きが覗いて居た。酒と煙草の香をこつちやに匂はして半ば袖の中に隠れた太い赤い手には銀の指環やチユラ出来の指環を見せて居た。

こんな風の男は露西亞には随分少くない百を以て數えるほど澤山にある。正直云ふと、こんな奴と知己になつても何の面白いこともないのだ。と新來の客を觀た時私はさう思つた。併れど、その顔の中に物事に頓着しない氣立のいゝ且つ情熱に富んだところのあるのを見逃すことは出来なかつた。

「この旦那も、はア一時間から待つて被在るんです。」と見廻りの男は私を指した。一時間どころの沙汰か！此奴め、まだ私に調戲つて居やがる。

「けれどあの方は私ほど急な御用ぢやないんだらう。」と新來の客は云ふ。

「それア何うですか、知りませんが。」と見廻りはむつとした顔をした。

「ちやア何うしても出来ないんだね？一匹も出来ないのでかね。」

「出来ません。一匹もないですからな。」

「よし、そんなら沸湯を持つて來さして呉れ。暫らく待つとしよう。何うにも他に仕方がない。」

新しい客は腰掛に腰を下ろし、机卓の上に帽子を投げ出して髪を撫でて、

「貴方はもうお茶をお上りでしたか。」と私に訊ねた。

「はあ。」

「でも、お仲間入りに、少し如何です。」

私は頷首いた。膨れた赤い湯沸は四度卓の上に表はれた。私はラム酒の瓶を取り出した。そして、先きにこの新しい知人を、あまり豊かでない田舎紳士と見たのが間違ひでなかつた事を知つた。彼れの名はビートルベトロヴィツチカラタエフと云ふのだ。

我々は色々語り合つた。彼れは着いてから一時間半とも経たぬ中に心の底まで打ち明けてすつかり身の上話をして聞かせた。

「私は今、モスカウへ行く途なんですがな。もう田舎は懲り／＼しました。」と彼れは四杯目の盃をすゝりながら言つた。

「それは又何うしてね？」

「なに何うしてといふ事もないのですが實のところ、財産を滅茶々にして宅の百姓共まで破産させて仕舞つたです。毎年々々凶年が續きましてな作は出来な

云ふ色々不幸は起ると云ふ、そんなこんなでねえ………什麼に藻掻いても、もう。』
と力なく戸外の方を見やつて、『何うしても土地の仕末が付かなくなつたんです。』
『何うして、まあ、そんなに？』

『併しいや。』と私を遮ぎつて、『逆も私なんかにはやア旨く行く筈がありませんさねえ。』と片手で頭を掻き乍ら一心に煙草を吸ひ、

『私を御覧になつたら、屹度、つまり無教育者とお思ひでせうなあ………併しねえ、實際私は大した教育は受けて居ないので。それに暮し向きは能くなかつたです。』
しな。やア御免なさい、つまり事を云つて。私は何でもガラ／＼云つて仕舞ふ性質なもんですから。それで要するに………』

彼れは仕舞ひまで云はずに、手を振つて言葉を切つた。そこで私は貴方がそんな事思ふのは間違ひだ、私は貴方に逢つたのを非常に喜んでると云ふ様な事を熱心に云つて、それから私は十分な教育が必らずしも、財政を整理する上に無くてならぬものではないと思ふと話した。

『全くです、被仰る通りです。』と答へて、『併し、うまく整理をするには特別な才能が是非必要ですな。世の中には、何でも好きな事をやつて、それが皆旨く行く人もある』

んですが、けれど私にア………。一寸失禮ですが、貴方はペテルブルグからお出ですか、モスカウからですか。』

『ペテルブルグから来ました。』

彼れは鼻から長々と煙りの輪を吹いて、

『私は役人にならうと思つて、今モスカウへ行くところです。』

『何の役所へお入りですか。』

『分らんです。まあ行き當りバツタリと云ふ様な譯ですな。全くのところ、私は役人となるのが怖ろしいんです。何故かと云ふと、直ぐ責任問題ですから。私はこれまで田舎にばかり住んで居て、御承知の通り田舎にや馴れてますが………併し今は何うにも恚うにも法がないんです。………何て云つても貧乏にやア勝てませんよ。あゝ貧乏！嫌な奴ですな。』

『併し貴方はこれから都會でうまくやつて行かれませう』

『都會で………さうですな、都會へ行つて氣樂に暮せるか何うか解りませんが、兎に角やつて見る氣です。又案外氣樂なものかも知れませぬ。………尤も別に田舎より良い事があらうと思ひませんが』

「ぢやア、もう貴方の田舎の御宅に住んでる事は出来ないんですか。」
 彼れは吐息をして、「全く出来ないのです。云は、今はもう宅も私のものぢやないんです。」

「まあ何うして、そんな事に？」

「なに、人の善い奴ですが——隣りの奴——の所有になつたんです。……賣渡しの證文まで済みました。」

可愛さうに、ビートル、ベトロヴィツチは額を撫で、しばらく考へて居たが手を振つて、

「なに……つまりは何です。」と一寸黙つて、「誰れを恨むところもない自分の誤りなんだ。私が見えを飾ることが好だつたです。見えを飾る事がねえ馬鹿な！」

「貴方は田舎で盛んな暮しをなすつたのですか。」と私は訊ねた。

「え、貴方盛んにやりましたとも。」と真直に私の顔を見詰めて力を入れて答へた。

「十二疋の獵犬を持つてたです——獵犬を。それは貴方がただつて滅多に見られない程の者でした。」斯う云つた調子が何か様子ありげに、心持の悪るさうな風であつた。「什麼時だつて兎を見付けて、逃がすやうな事はなかつたです。狐のあとを追

はせると——丸で魔物のやうでした。實に素早い奴でねえ！それから私は灰色の獵犬を持つてました。此奴が又自慢ものでした。けれど今となつちやア昔の事です。いや、隠したつて仕方がないです。私は又始終鳥うちに行きました。カウソテス(伯爵夫人)と云ふ犬を飼つて置きました。それは素破らしいセッター種の非常に鼻の利く奴でした。……もう何でも嗅ぎ付けるんです。まあ澤地のやうな所へ行つて、さあ探せ！と云ひ付けませう。その時に彼奴が首を振つたものなら何十疋の犬を連れて来たところで何一つ疋探し出せるものぢやありません。その代り、さあ獲物が居たとすると、後を追つかける様は實に見物でした。それで家で家に歸ると中々よくものが解るのでした。かう左の手にパンを載せて、「猶太人が食つたんだぞ。」と云ふと奴は見向きもしません。けれど今度は右へ手に載せて、「若い貴婦人もこれを食べるのだ。」と云ふともう直ぐに平げて仕舞ひます。彼奴は小犬を生みました——これが又素的な奴でした。私はモスカウへ連れて來ようと思つたです。が友だちが鐵砲と一所に呉れ——つてね、「モスカウへ行つたら獵なんかしちやア居られまい」つて云ふんです。でもう犬も鐵砲も呉れて來ました。今は犬はその友のところに居ます」

「併しモスカウへ行つたつて獵は出来ませう。」

「いや獵なぞをして如何なるものですか、これまで自分一身を處する道さへ知らなかつたんです。此れからは仕方がありませんから何事も目を眠つて我まんする計りです。それはさうと、モスカウ邊の暮し向きは何物も何ひたいものですか。——物價は高いですか。」

「いや、さう高いことはありません。」

「さう高くない……は、あ。それから、モスカウにやア、ジブシーが居ますかね。」

「あの何でさ。縁日などに徘徊してるやうな。」

「え、それなら居ますとも、モスカウにや……。」

「さうですか、それア宜い事を聞いた。私はジブシーが好きだ。は、あ、馬鹿な！でも、好きですなあ……。」

斯う云つた時、ビートルベトロツ、ツチの目には吾れ識らず出た、一種愉快さうな輝きが見えたが、急に側をひいて何か考へに沈むやうに目を落した。そして空盃を私の前に出して、

「ラム酒を一杯下さいませんか。」と云ふ。

「併し茶はもうなくなりましたよ。」

「稱はんです茶なんかなくなつて……、あーあ！」と彼は兩手に頭をかゝへて、机卓の上に臂を持たした。私は言葉もなく彼れを見つめた。恐らく深い嘆息を發するであらうと豫期したみならず酒飲みはやゝともするとする事であるから、或は涙位流すであらうと思つて居たが、さて頭を上げたのを見ると、その顔には深い悲しみの色が顯はれて居た。私は今にその様子を忘れることが出来ない。

「何うかなすつたですか。」

「いえ何にも……、只ひよつと昔の事を想ひ出したんで。ナニ、一寸したことです。お話しませうか。けれど、又御迷惑になつちやア濟みませんからな……。」

「なに決してそんな事が！」

「さうですか。」と嘆息をして話を進める。——「まあ私のやうに……、色々な事が人間には起るものでしてな。御迷惑でないなら話しませう。全くのところ、よくは分らんですがな……。」

「是非聞かして頂きませう。」

「宜う御座んす。ナニ、つまりらぬ話ですが………兎も角ねえ。併し實はよく分らんですよ。」

「え、構ひません。さあ君聞かして下さい。」
 「承知しました。まあ云は、私の身の上にはこんな事があつたのですネ。私は田舎にばかり住んで居ました。………どうも甚だ突然なお話ですが私は一人の娘に迷つたです。あゝ全くあの娘は！………美しくて伶俐で、そして極く氣立のいゝ可愛らしい女でした。名をマトロナと云ひました。併しね、お嬢様式のぢやなかつたんですよ——ね、分つたでせう下女です、何でも無い下女でした。それも宅に雇つた女ぢやないんです、他人の家に雇はれて居たのです。——だから事が面倒になつたんです。」

さて、そんな譯で私は娘を愛しました。——つひ、ほんの一寸した機會からですがな………それで娘も亦私を愛したです。さうかうする中に、マトロナは、どうか雇はれてる女主人の所から自分の身を買ひ取つて呉れと云ひ出したんですな。實を云ふと私もそんな氣がないではなかつたです………が、その女主人と云ふのは、中々金のある剛突婆あで宅からは十二哩ばかりの所に住んでました。

それで、どうく或る日、よく晴れた日でした。私は三頭立の馬車を用意させました。——真中にはその中で一番いゝ馬、細細産の飛切で、ランバルドと云ふ馬を繋いで——自分には大事な一張羅を着飾つて、マトロナの主人の家へ出向きました。行つて見ると家は兩翼に廣がつて大きな庭を控えて居る。………マトロナは道の曲り角まで出て私を待つてました。私を見て何か云はうとしたが、云へなかつたらしく自分の手にキッスして、ツイと逃げて仕舞ひました。さて私は玄關へ行つて御主人はお出かど聞きました。………すると身長の高い下僕が出て来て、

「何方様で御座います」と云ふから、

「私は地主のカラタエフと云ふもの、少々用事があつてお目に掛りたいと云つて下さいと。答へました。」

下僕が中へ入つて行つたあと私は待ち乍ら考へた。

「ハテ、何うなるだらう？ 屹度あの剛突張りめが滅法な金をしぼらうとするに相違ない。金を持つてやがるくせにまあ、五百留と吹つ掛けるだらう。ナニ驚くものか。」
 所へ下僕が返つて来て、「何卒お入り下さい」と云ふ。

「私は後に付いて客間へ通りました。客間には矮少な黄ばんだ色の老女が目や

チクリさせ乍ら腕椅子に腰かけて居ましたが、

「何御用ですか？」

まあ話を始めるに、ねえ貴方は貴女にお目にかゝるのを無上の光榮に存じます、
とても云ふのが至當ですからさう云はうと思つてると……

「貴方間違つちや困りますよ。私は此家の主人ぢやありません私は親類のもので
す。………什麼御用で御座いますか？」

斯様言はれたのですから私も言ひました。

「直接御主人様に申し上げたい事が御座います。」

「マリヤイロイニシナは今日お目に掛れません。少し加減が悪くて居りますから

………して御用と被仰るのは什麼事ですか。」

これでは駄目！と私も首を捻つたですが仕方がないから、悉皆私の來た譯を打ち
明けました。

老女は仕舞まで聞き了つて、「マトロナ？マトロナと云ふのは？」

「マトロナ、フェドログナです。キユリックの娘です。」

「フェドル・キユリックの娘………はあげど貴方は何うして彼女と知合になりまし

たか。」

「一寸した事で。」

「それで彼女は貴方の心を知つて居るんですか。」

「え。」

老婦は暫らく無言で居たが遂にかう云ふです。

「彼女によく申し聞かせよう。ほんに仕方のない淫奔者だ！」

實際私はハツと思ひました。

「決して貴方そんな事が………。私は相當の事を致して彼女を頂きたいと思ふん
です。是非まあ御相談に乗つて頂いて。」

「すると鬼婆あ奴がほんとに人を侮辱した調子で、「まあ驚いた人だそんな計企を
するなんて。いつ誰れが金が要るつて云ひました？………見せしめの爲め彼女を
辛い目に逢はして呉れなくちやあ。見せしめの爲めだ！………あの馬鹿娘叩いて
も足りやしない！」と意地悪る婆あ奴がむせ返つてほざき廻る。「こゝで樂に暮し
てるものを何が不足でまあ？………ほんとに譯の分らん娘つたらない！まあ此れ
位な事を言つても神様は御許し下さるだらう」

實の處私はもう赫つとなつた。
「何だつて貴方は小さな娘をいぢめようと被仰るんです。彼女に何の咎があるんです」

老婦は十字を切つて、「あゝ神様が居て下さいます。貴方はこんな事で私の使つて居るものを……」

「併し彼女は貴方のものぢやありませんまい。えへ？」

「はいかにもそれはマリヤ・イリイニシナが萬事よく心得て居ますので貴方の關り合つた事ぢやありません。けど誰れに雇はれてる女だか、ようくマトロナに教へてやらうと思ひます。」

私は實際この糞婆あに飛び掛らうとしたです。併し、マトロナの事に思ひ至ると、上げた手が自づと下りました。その時恐ろしいと思つた心持は今到底口では御話が出来ません。それで私はどうく老婦に哀願し始めました。

「え、それはもう彼女の事は貴方の御勝手です。」と私は云つた。

「けど彼女が貴方の何の御役に立ちますか。」

「奥さん。私は只彼女が好きなんです。まあ私の身になつて見て下さい。……何

卒、貴女のお手にキッスをさして頂けませうか。」

で私は進んで糞婆あの手でキッスをしたです！

「そんならね」と婆あはぶつ／＼云ひ乍ら、「私からマリヤ・イリイニシナに話して置ませう。……取り定める権利はあの人にあるんですから。又二日経つて来て下さい。」

私は大なる不安を抱いて歸つて来ました。あんな事をして却つて事を打つ壊したのではなからうか。私の心を老女に打ち明けたのは悪かつたかも知れんと疑ひ出したが、かう思つた時にはもう遅かつたです。

二日過ぎて私は女主人に逢ひに行きました。今度は居間に通されました。花やら立派な家具やらが澤山あつたやうです。主婦は素破らしい安樂椅子に寄りかゝつて蒲團に頭を持たせて居ました。そして側らには例の親類の老女と一人の若い、緑色の上衣を着て、眉毛の白い口の癒撃つたやうな女が居ました。——多分付き添ひの者でせう。

老主婦は鼻にかゝつた聲で、「何卒お掛け下さい。」
私は腰を下ろした。老主婦は色々私に聞くです。年は幾歳になるかとか何處

に務めて居たかとか、これから後は如何いふ事をするとか、丁寧に、また殿かにきくの
でした。私はそれに一々答へました。

老主婦は卓上から手布を取つて、バタ／＼振つて扇ぎ乍ら……「貴方のお考へは
カテリナ・カルボヅナから聞きました。」と斯う云ふです。

「すつかり聞きました。が、私の家の家法として、雇人には暇をやらなないと云ふ定め
すと斯う云ふですな。」

「さういふことは、よく締りの付いた家には、あるべからざる事で、全く不都合なこ
で、善い方法とは申されません。で私はもう私の云ひ付け通りにさせました。」と斯
う云ふです。

「もう貴方にも、御厄介をかけずに済むでせう。」と斯う云ふのですな。

「いや、決して少しも厄介ではありません……が併し、一體マ・トロナ・エドロヅナは、
そんなに御用のある女ですか。」

「いゝえ、用はありません。」

「そんなら何故私に下さる事は出来ませんか。」

「でも氣が向かないものですからね。私の氣が向かないんです——只それだけの

譯です。それに、もう云ひ付けて仕舞ひましたから、彼女は曠野地方の村に送られた
筈です。」

この一言に私は仰天しました。

老主婦は佛蘭西語で、緑衣の若い婦人に二言三言云ふと、若い婦人は出て行しまし
た。

「私はね、随分殿しい主義の女で、健康も勝れて居ないせい、か、ごうも煩い事は嫌ひで
す」と老主婦は云うのです。「貴方はまだ若くてお出だし、私はお婆さんだから、勸
告する権利があると云つた様なものです。如何でせう、身をきめて善い嫁を貰ふ
やうになすつては、ね、結婚なさい。持參金のたんとある花嫁はさう餘計にはない
かも知れませんが、金がなくて、良けりあ身持の正しい申分のない女は随分あります
よ。」

私は只老主婦を見つめた切り先方が何を云つてるのか、解りやしません。僅かに
結婚の話をしてるのだなとは思ひましたが、私の耳には絶えず、「曠野地方の村」と
云ふ一語が鳴り響いて居ました。

「結婚をしろつて！……何の婆婆あ！」

こゝまで語つて彼れは急に話を止めてじつと私を見て、「貴方はまだ結婚なさらないんでせうね？」

「ええ。」
「さうでせう、さうと思つて居ました。で、私はもうそんな事を我慢して聞いて居られなかつたのです」それで「まあ何でも、貴女何を云つて被在るんです。何だつて結婚のことなんか被仰るんです。私は只、お宅の下女のマトロナを下さるか何うかと伺つて居るんです。」と私が云ひますと、老主婦は嘆息をして、うん／＼云ひ乍ら、

「あゝ、煩さい！あもう戸外へ出して呉れ。あゝ！」
親類の老婦が側らに飛んで来て直ぐに私をたしなめに掛る。その間も老主婦はグツ／＼云ひ續けて、

「私は、こんな目に逢ふ覚えはない……この家の主人ぢやないか。あゝ、あゝ！」
私は帽子を捉むともう狂人のやうに戸外へ飛び出しました。

こんな賤しい娘に夢中になるなんて飛んでもない奴と貴方はお思ひでせうな。」と云つて彼れは又話しつゝいけた。

「勿論私は私のした事が正しいと計りは思つて居ませんのです。……ですが、さう

なつたのだから仕方ありません！……で、まあ虚言のやうなお話ですが。私は夜も晝も休みなしに……悲しみ通したです。

（あゝ可愛さうに。私は娘の身を誤らした。）と思ひ／＼ねえ。時には彼女が仕事着をきて家鴨を飼つてる姿や女主人の云ひ付けで烈い取扱をうけて、脂を塗つた靴を穿いた百姓などに嫌やらしい事を云はれて困つて居る様などが、目に浮ぶのでした。私はほんとに冷汗をかきました。併しこの儘には何うしても堪へられず私は彼女が送られた村を探し當て、直ぐ馬に乗つて出掛けました。次の日の晩にはもうそこに着きました。

まさか斯くまでに私が出ようとは思はなかつたと見えて向ふでは私のことを何とも注意してなかつたです。で、私は近所の者でもあるやうな風で真直に其家の人の方へ進つて行きました。中庭に入つて四邊を見廻すと丁度よく上り段の所に、頬杖をついてマトロナが座つて居ました。彼の女は危く聲を出すところでしたが、私は指をあげて外の方の空き地を指しました。それから私は先づ草舎の中に入つて家の男と少しばかり冗談口を叩き乍ら嘘八百を列べ立て、折りを見て、マトロナの所へ出て行きました。あはれな娘は、しなやかに私の頸に懸れ掛つた。色も青ざめ

て瘦せて居ました。可愛さうに！

私は斯う云ひました。「よし／＼大丈夫！マトロナ大丈夫だよ泣くことはない。」その癖、自分は止め度もなく涙を流したです……。で終には自分でも氣取かしくなつて彼女に云ひました。

「マトロナ。泣いてばかり居ても仕方がない。今は斷然やつ付けて仕舞はなきやアならん。ねえ、お前俺れど一所に逃げるんだよ。もう他に道はない。」

マトロナはもう氣を失ふばかりになつて……。

「何うして貴方、そんなことが。それこそ身の破滅ですわ。私は殺されて仕舞ひます。」

「馬鹿な誰れがお前を見付けるものか。」

「あの人達が見付けます。屹度見付けますわ。ねえ、ピオトル・ベトログイツチさん——私は決して貴方の御親切を忘れやしませんわ。けどね、今はもう無いものと思つて下さい。斯うなるのも、因縁ですからねえ。」

「あ、マトロナ、マトロナ！俺れは、もつと確りした女だと思つて居たになあ！」いや、實際此の女は中々確りして居ました。……彼の女は心胸を持つてたです、貴

金のやうな心を！

「何うして、こゝにお前を残されるものか。ナニ、ごつちしたつて同じことだ、これより悪くなる心配はない。さあ、お云ひ——お前は此家の奴の拳固を喰はされたのかえ、？」

マトロナはポツと顔を赧くして唇を震はしました。

「けど私の爲めに、家内中路頭に迷ふやうな事になつては、大變ですわ。」

「何うして？お前の家の人達は、今——兵隊に送られようつて云ふのかい？」

「え、兄さんは兵隊にやられます。」

「お父さんは？」

「お、お父さんはやられやしません。仲間のうちで、只つた一人の仕立屋ですもの。」

「それ、御覽な。兄さんだつて、眞逆殺されやしまいし。」

私は娘を納得させるには、随分骨を折りましたよ。仕舞ひには私が負はなければならぬ責任に就て先きの先きの心配まで持ち出すすからね。遂には私も、

「まあ、そんな事ア何うでも宜いぢやないか。」と云つた位です。……併し、どう／＼私は此の女を連れ出しました。……その時ぢやない別の時です。夜、軽い馬車を持

つて行つて連れ出しました。」

「え、……さうして私の宅に隠まつて置きました。それは小さな家でして使つて居たものも二三人外居ませんでした。正直なお話ですがそれは皆んな私を尊敬して居ますから什麼ことがあつても私の秘密を破るやうな事は、仕ませんそれで、丸で私は王様のやうな幸福な身になりました。マトロナも直ぐ落ち付いて元氣が出ましたし私はもう此の女の事と云ふと夢中になつてました。……まあ、何と云ふ良い娘でしたらう。天成なのですな。歌も歌ひますし踊りもやりますし琴も弾きました。……私は隣りの人にも見せないやうにしました。喋り散らされるのが心配ですから！併し只一人親友がありました。バンテレー！ゴルノスタエフと云つて——貴方御存じぢやありませんか。それはもう彼女の事とすると可笑しい程でした。丸で貴婦人にでも向つた様に彼女の手にキッスをするんです。實際したです。でこのゴルノスタエフは私と異つて中々學問のある男でブーシキンなどはすつかり讀んでました。時々色々な話をして聞かせるのには、マトロナも私も耳を傾ける程でした。それから彼女に書く事を教へてくれました。まあ奇妙

な男でしたな。

それから彼女の仕度はねえ——それア、縣知事の奥様とつてもない私は毛皮で縁取つた緋の天鵝絨の着物を拵へてやりました。……實に實によく似合つたです。モスカウの女の裁縫師が新式に胸の處を締めて仕立てたのですからな。そして、まあ不思議な女でしたよ、マトロナは！時とするときちつと考へ込んで幾時間も地上を見つめた切り毛筋一つ動かさずに居るんです。私は其側に座つて其の顔を見ますけれど初めて逢つた様な都合で何だか、かう思ひ切つてちつと見ることが出来なidesうな……さうすると彼女は嫣然します。もう私の心は誰れかに抓搔られた様にふらくと浮き立つんです。こんな時があるかと思ふと時には俄かに笑ひ出して冗談を云つたり踊つたり溢れるやうな温い愛情をこめて、目のまはるほど烈しく私に抱き付くこともありまう。

朝から晩まで、さうしたら彼女を喜ばすことが出来るかと私はその事ばかり考へて居ました。虚言のやうな話ですが全くです。喜ぶ顔が見たいばかりに色々なものを拵へてやりました。彼女が喜んで、ポツと紅くなつた顔つたらねえ！着物でも拵へてやると直ぐもう大喜びで着て見るんです。新らしいのを着て、いそぐと

やつて来て、私にキッスをするんです。

その内如何してか彼女の父のキニリックが風の便りに聞知つて逢ひに来ました。年を老つた父は、まあ什麼に泣いたでせう。……こんな風で私等は五ヶ月の間暮しました。あの忌々しい事さへ起らなかつたら何時までも、彼女と一所に居られたでせうになあ！」

ビオトルベトロヴィッチは話を止めた。

「まあ何が起つたんです。」と私は深く同情して訊ねた。

彼は手を振つて、

「何もかも悪い時には悪くなるものです。私は又々彼女の身を誤らして仕舞つたです。あのマトロナは橋に乗つてかけまはることが非常に好きでした。自分で手綱を取つて乗りまはすのです。いつも上衣を羽織つて刺繍をしたトルゾック出来の手袋をはめて嬉しそうにキヤア〜云ひ乍ら乗り廻すのが常でした。で私等はいつも夜になると出掛けました。誰れにも逢はないやうにです。

さうかうする中、ある日美しく晴れた日でした。一面に霜が降りて、磨き出したやうな風もない日でした。……私等は乗り出しました。

マトロナに手綱を持たして居ましたが、ふと行く先きを見ると、ク、エヅカの方例の女主人の村に向つてるぢやありませんか。え、全くク、エヅカに向つてたです。

私は吃驚して、「これ〜、お前何處へ行くんだ？」

女は肩越しに私を見返つて、は〜と笑ひ乍ら、

「ねえ面白いちやありませんか」と云ふ。

「なに何うなとなれ〜、……」と私も考へました。

女主人の家の前を走らしてやるのも随分愉快なことだらうと。ねえ貴方——痛快ぢやありませんか。そこで一つ走らしました。真中の馬は丸で空中に浮んだやう、兩側の馬も宛ら旋風のやうな勢で、もう私等はク、エヅカの見える所まで来ました。

この時ふと見ると向ふから一臺の古い緑色の馬車がやつて来ます。後ろの踏臺の所に、一人の馬丁が乗つて、徐々ど走らして来るのは。……疑ひもなく女主人の馬車——女主人が今此方へ向つて来るんです！

私は失敗つたと思ひました。併し、マトロナは——手綱をしぼつて鞭を振り上げかの馬車に向つて矢のやうに飛ばしました。向ふの御者はねえ此方が突き當りさ

うに走つて来たのを見て、ねえ片側へ避けようとしたんですね、それでグイと馬を曲げた所があまり急だったと見えて馬車は真逆様に雪の中に倒れました。窓は壊れて女主人は、『あ、あッ、あッ、』と叫び出す。付き添ひの者は、『助けて〜』と悲鳴を揚げました。その間に此方は、全速力を出して飛ぶが如くに駆け抜けました。併し、『あ、悪いことが起るわい。ク、エヅカへなんか来さへしなけりや宜かつたに』と思ひました。

それから何うなつたと思ひます？云ふまでもなく女主人はマトロナを見止めたです私をも。——我婆あ奴がどう〜私を訴へました。

『宅から逃げた下女が、カラタエフ氏の家に居ります。』と云つて直ぐ幾金か握らしたです。

さあ忽ち巡査部長がやつて来ました。これは折よく私の知つてる男で、ステパン・セルギイッチ・クゾフキンと云ふ人のいゝ奴でした。併し彼奴に取つちやア、貧乏籤を引き當てたものです。さて彼れはやつて来まして、あれやこれやと話したあと、

『ピオトル・ベトロヴィッチ君は何うしてそんな事をするんだね？……責任は重大だよ。法律には斯様いふ事に就て明文があるんだからネ。』と云ふ。

『あ、それに付ちやア、勿論話があるんだ。が、まあ君遠方を来て腹が空いたらう何か一口やつては。』

彼れは頷首いたが、まだこんな事を云ふのです。『公平な法律によつて要求するんだから、仕方がないんだよ、ねえ君よく考へて見て呉れ給へ。』

『法律云ふまでもない、勿論さ。……併し、それはそれとして、君は小さな黒馬を持つてゐるつて云ふぢやないか。僕のランバルドスと取り替へるのは嫌やかい？……』

所で家にはマトロナ・エドログなんて娘は居ないよ。』

『馬鹿云つて、君！娘は君と一所に居るぢやないか。君此處は罪人を庇ふ事の出来る瑞西とは違ふからねえ……。そりやア僕の馬を、ランバルドスと取り替へるも宜いけれど、何なら今貰つて行つても宜いがね。』

兎に角その時丈けは何とか云つて彼れを追ひ歸しました。

併し老主婦はいよ〜躍起となつてこの事件には幾許か〜らうが、よし一萬留も惜まないよ云ふ意氣込みなんです。私が前にあの老主婦に逢つた時彼女はふと緑色の着物をきた付添ひの若い婦人を私に娶はさうと思ひ付いたのですな。それは後から分つた事ですが、その爲めにこんな意地悪をしたんです。こんなえらい老

婆様達が寄つてたかつて飛んだ心配をしてくれたものだ！………怠屈まぎれに思ひ付いた事でせうよ。

で事毎に私は不利に陥りました。金を惜まず、マトロナを隠匿しました。周囲の者共はあらん限り私を苦めて、いちめてくいちめ抜いたです。私は負債の山を負うて健康を害しました。……かくて、ある晩私は床の中に一人考へて居ました。「あの何の因果で、こんなに苦しい目を見るのかな。彼女のことは忘れられんし、この先き何うしたら宜いだらう。……何うしても忘れられん！忘れられんものは忘れられん！」

この時ふいとマトロナが入つて来ました。私は家から一哩半ばかり離れた百姓家に一時彼女を隠して置いたです。それが急に來たので吃驚したのです。

「何うした？ 彼所まで見付けられたか。」

「いゝえ、貴方。彼地で邪魔をする者なぞ一人だつてありはしません。けど何時までさうして居られませう。あゝ、ピートルベトログイツチさん。私の胸は裂かれるやうです。私ほんとに貴方には御氣の毒でならないのです。貴方私は貴方の御好意は決して忘れやしません。忘れやしませんけど、もう今夜はお別れに参りま

した。」と言ふです。

「何を云ふんだ、お前何を云ふ？ 馬鹿な！………お別れつて何うして別れる？」

「はい………私は身を捨てたつもりで参ります。」

「併し、俺れは、屋根裏に繋いでも、お前を渡しやしない。つまらん事を云ふ………」

お前は俺れが何うなつても宜い積りか、えゝ？ 俺れを殺すつもりかい。」

娘は黙つて床を見つめて居ました。

「おい。さあ、何とか云つて呉れ！」

「あゝ、貴方！ 私は、この上貴方に御迷惑をかける事は出来ません。」

何と云つて聞かした處で仕方がない。

「だが解りさうなものだ、がな、馬鹿が私の云ふ事が解からないのか、氣でも違つてるのか………」

ピートルベトログイツチは、此所まで語り來つて、烈しく啜り泣きをした。

「それから、まあ、何うでせう？」と拳で卓上を叩き乍ら、彼れは話を進めた。眉をかめて堪へても涙はなほ止め度もなく、そのあかくなつた頬を流れ落ちた。「娘は、さうく、自からを捨てたです。………家を出て、名乗り出て、身體を渡して仕舞つたです

「馬が出来ました。」と見廻りの男が、室の中に飛び込みざま勝鬨をあげるやうに叫んだ。

我々は同時に立ち上つた。

「マトロナは何うなりましたか？」

私は訊ねたが、カラタエフは、只手を振つた。

カラタエフに遇つてから丁度一年私はモスカウへ行くことになつた。

ある日、正食の前に何かの都合でオートニイ通りの珈琲店に入つた。……こゝは

モスカウでも生粹の珈琲店で、烟草のけむりの渦巻いた玉突部屋には、真紅になつた顔

頬髭だらけの顔又は時代遅れのハンガリヤ上衣を着たのや、新式のスラヴ風の衣服

を着たのなどが、チラ／＼見えた。

瘦せた小柄の老人共は、それ／＼質素な外套を着て露西亞新聞を讀んで居た。給

仕は緑色の絨氈を柔らかに踏み乍ら盆を以て元氣よく飛び廻つて居た。商人共は

ごたごたと寄り集まつて茶を呑んで居た。所へ突然蓬々と髪を亂した男が、足元も

覺束なくよろ／＼と玉突部屋から出て来て、兩手を隠袋に突つ込んだまゝ、首をかし

げて、當て途もなくそこらを見廻した。

「や、やー！ピートル・ペトロヴィッチさん！……しばらくですぬ。」

ピートル・ペトロヴィッチは、殆んど私の頭に倒れかゝる程ふら／＼と踏躑き乍ら

小さな一室に私を引いて、

「さあ、此方へ。此所で何卒ゆつくりして下さい。」と丁寧に私に安樂椅子をす

ゝめて、

「おい、給仕。ビールだーいや、三鞭酒がいー！何うも思ひがけませんでした。全く

思ひがけませんでしたよ。……貴方は久しく此地にお出でしたか、まだ暫らくお出

ですか。何にしても、こゝで斯うお目にかゝるのは、神様のお引合すですな。」

「さうです。貴方まだ忘れませんか……。」

「え、忘れませんとも、よく覚えてます。」と忙しく私を遮ぎつて、「もう、あれは昔の

ことである……。」

「して、此地で何をやつてますか、貴方。」

「御覽の通りです。此店が一番です。彼奴等はみんな愉快な奴です。私はこゝ、

に平和を見付けました。」かう云つて吐息をして天井を仰いだ。

「役所には入りましたか。」

「いや、まだ入りません。近い中に入るつもりでは居ます。がつまりませんねえ、役所なんか……それよりかこの邊の人間を相手に遊んでる方が宜いですよ。私は此地で、澤山面白い人間と知己になりました……。」

給仕が黒塗の盆に三鞭酒の瓶を乗せて来た。

「よし。これア中々良い子ですよ。……なあ、ヴァシヤ、お前良い子だなあ。さあ貴方、お一つ！」

給仕は一寸立ち止まつて頭を振り乍ら調子を合せて、につこりして出て行つた。

「さうですよ、此地には随分面白い人間が居ますよ。」と彼は話し續けた。「魂のあるねえ、感情に富んだ人間が居ます……一つ御紹介しませうか——そりあア愉快な奴等です。……彼等も貴方と知り合になるのを屹度喜ぶでせう。それはさうと……ポプロフは死にましたよ可愛さうなことをしました。」

「ポプロフつて？」

「セルゲイ・ポプロフです。えらい男でした。田舎から来て何も分らない私を色々

世話してくれた男です。それから、パンテレー・ゴルノスタエフも死にました。あゝ、皆んな死んだ皆んな！」

「貴方はモスカウにばかり居ましたか。國の方へは行きませんでしたか。」

「國へ？……國の屋敷は賣つて仕舞ひました。」

「賣つた？」

「え、公賣で……さうだ！貴方が買つて下されば宜かつたにああ。」

「ぢやア、何うして暮して居るんですか、貴方は？」

「飢ゑても、まさか死にやアしませんさ。金がなくなつた時には、神様が何うかして下さるです。私にやア友人があります。金なんて……金が何んだ？塵だ芥だ！

黄金は塵だ！」

彼は目を閉ぢて隠袋を探つて、二枚の銀貨と一枚の銅貨を掴み出し、それを掌にのせて私の前に突き出して、

「これが何です？塵ぢやないか、芥ぢやないか。（どカラリその貨幣が床の上に轉つたいや、それよりか、貴方はボレザエフ（詩人の名）を讀みましたか。」

「えへ。」

「モツチャロフ(名四亞にて有)がハムレットを演つたのを見ましたか。」
「いや見ませんでした。」

「見なかつた、あれを見なかつたですか?.....(カラタエフの顔は見るく青くなつて目は不安さうにきよろく動いた。彼れは横を向いたが、その唇には微かな震へが見えた。)あ、モツチャロフ、モツチャロフ!」死とは何ぞ——眠るに過ぎず!」

.....」
濁つた聲で彼れは云つた。

眠つたばかりで心の悩み、其他

肉に伴ふ様々の煩累を取去るとは、

げに願ふてもなき大往生。

あ、死とは——眠り!

「眠りては——眠りては。」と彼れは何度も何度も口の中に繰り返した。

「是非、その様子を聞きたいものですな。」と私は云つた。併し彼れは勢に乗つて猶續けた。

誰か浮世の嘲罵鞭撻王者の壓制

驕者の侮辱官吏の傲慢さては
温順なれば優者も劣者より受る
排斥などを忍びくつてあるべきか。
只一本の留針にて、
永劫の寂滅を得るならば。
なうく、姫神、

我が罪業の消滅をも祈り添へて給はれよ。

彼れは卓の上に頭を垂れて、吃りく断れくな事を語るのである。

「二月経つや経たずに!」と云つて更に新たなる元氣を加へた。

お、一月経つや経たず、

ニオベの姿もかくやとばかり、

涙流して父君が柩に侍したりし、

其時の履の土も乾かぬ間に、

あはれ母君には彼の母君には——

お、非理非情の獸類だも、

さばかり早く夫は忘れじを。
三鞭酒の盃を口元まで持つて来たが、酒は吞まずになほ續けた。

ヘクバ故に！

かくも泣き立つるとは。

そもくヘクバが彼れに何

彼れがヘクバに何の縁故？……………

さるに我れは痴愚魯鈍

人若し我れを儒夫と呼び、

我れを詐偽師と罵るとも、

我れは只黙してこれに従ふばかり、

我れは鳥類の鳩鶴と同様、

如何なる壓制侮辱をも、

辛し口惜しと憤るべき

性根と云ふものなきならむ。

(戸澤姑射氏譯「ハムレット」より)

カラタエフは盃を下に置いて頭を抑へた。私は彼の心が分つたやうな氣がした。暫らくして彼れは、

「いや、過ぎた事を云つたつて仕方がない。ねえ、さうぢやありませんか。(と笑つて)さあもう一盃！」

「貴方は長くモスカウに居る積りですか。」と私は訊ねた。

「モスカウの土になる積りです！」

「カラタエフ！」と次の室から誰やらの呼ぶ聲がした。「カラタエフ！何處に居るんだい？さあ来ないか、おい！」

「やあ、呼んでる。」と怠儀さうに椅子を立ち乍ら、「左様なら！御都合が出来ましたら、又来て下さい。私は此所に居ます……………」

併しその次の日、思ひも掛けぬ用が出来て私はモスカウを去らなければならぬ事になつた。その後、つひぞビートルペトロヴィツチ、カラタエフに逢はない。

十九

あひゝき

秋は九月の半ばのころ、私は樺林の中に座つて居た。この日は朝から綺麗な小雨が落ちてその合間々々には、温かい日がさして来ると云ふ風な、まことに定めぬ空合であつた。

空一ぱいに、ふはくした白雲が出て来たかと思ふと、見る間に、それがちぎれくになつて、その後ろからは、磨いたやうな青空が、やさしい目のやうに覗いた。

私は座つたまゝ、四邊を見廻して、静かに耳を澄まして居た。

木々の葉が、つひ頭の上で、サラサラと微かな鳴りを立てる。その音丈けでも、時候の如何は知れる。それは、春の喜びさ、いめくやうな響きとも違ふ。夏のやはくした囁き果てもない無駄話のやうなものとも違ふ。又晩秋の冷たい口籠つたやうな、軽い風が微かに梢を鳴らして居た。雨に濡れた矮小な木の森の奥は、照る度に曇

る度に、たえずその趣を變へて行く。バツと日がさすと、急に笑ひ出したやうに、キラキラ輝いて、疎に立つた樺の木、細い幹は、一時に柔かな白絹のやうに光り、地上に落ちた細かな木の葉は、急に紫が、つた金色に輝いて、いろくな縞を書いた。高く巻き上つた齒朶のやさしい莖は、もう秋の熟み切つた葡萄のやうな色をして、果てもなく、縫れた十字形が目もあやに交又して居る。と急に又四邊は微かな青色に變つて、眩しい程の色は、いつの間にか痕もなく、樺の木立は、丁度冬の日の冷たい光を受けぬ降つたばかりの雪のやうに、光澤もなく、只白く並んで居る。と音もせず、こつそりと

小雨が降り出して、森の中に、囁き初める。

樺の葉はそれと分る程、色は褪せたが、流石にまだ生々とした緑色を残して、只そここゝに、真紅の色かさなくば、金色をした一枚の若葉を見せ、ちらちらする日の光が、雨に洗はれて光るやうなやさしい小枝の茂みを漏れて、バツとその上に様々な色を映する時、それが什麼に美しく輝いて見えたらう。鳥の一聲さへも聞えない、皆影をかくして、静まり返つて、只時々人に調戲ふやうな山雀の聲ばかり、銅鐵の鈴でも振るやうに聞えた。

この林に来る道で、私は犬を連れて、高い白楊の林を通つて来たが、實をいふと一體

私はこの木をあまり好かない。青白いライラック色の幹も嫌やだし灰色が、つた緑色のブリキのやうな葉をして、出来る丈け高く、それをさし上げ扇のやうに空中に擴げて、震はして居る様も嫌やだし丸いうす汚ない葉を、永い莖にぶら下げて、始終振り立て、居るのは猶嫌やだ。それが一寸よく見える時と云つては、夏の夕低い下崩えの上、にさびしく伸び上つて、真向に落日の紅い光りを受け、根本から梢まで同じ様に黄色が、つた紅色に染まつて、キラ／＼と光り且つ震へて居る時か、又は風のある澄んだ日葉と云ふ葉が、みんな一所に騒ぎ立つて、何處か遠いところへ飛んで行きたくて、溜らぬと云つた風に、青空を望んで、さら／＼と囁いて居る時位のものだ。併し、大體に於て私はこの木を好かない。それで白楊の林には、足も止めず、こゝまでやつて来て、この樺の木の下に居所をきめて見ると、小枝が、慍う低く地の上に垂れ下つて、自然に雨降けとなつてくれる。私はしばらく、四邊の光景に見とれて居る中いつか、遊獵家でなければ味の分らぬ心地よい香氣な眠りに落ちた。

私はどの位眠つたか知らないが、目を開いた時には、林の奥の奥まで日がさし込んで、樂しげにさは／＼する葉の間からは、そこにもこゝにも濃い青空が、ちら／＼と閃めいて見えた。雲は吹く風に遠く追はれて、影も止めず、天氣は全く好くなつて居た。

空氣は乾燥して一種の爽やかな生氣を含み、何となく心を大きくする様な感じを與へる。雨上りの静かな美しい夜が来る時には、よくこんな兆候が見えるものである。

今一度運だめしに出獵けようかと思つて、起たうとした時、思ひもかけずじつと座つて居る人影が目に入つた。よく見ると若い百姓娘らしい。こゝから二十歩ばかりの所に、物思はし氣に頭を垂れ、兩手を膝の上に乗せて、半は顯はになつて居るその片手には、大きな草花の束を握つて居たが、花束は息をする度に、碁盤織の袴の上でゆるやかに動いた。綺麗な白衣襦袢を咽喉と手頭の所で鈕をかけて、褶を取つて身體にまどはせ頸から胸にかけては、大粒の黄色な南京玉を二條垂らして居た。中々美しい娘で、愛らしい褐色が、つた濃い髪の毛を、二つに分け、嗜みよく櫛を當て、半圓形に巻き上げ、その上には、細い紅ののりボンが、象牙のやうな白い額の上まで垂れて居た。顔の他の部分には、ほんのりと日をうけて、きめの宜い女でなければ見られぬ金色を見せて居た。

女は顔を上げないので、その目を見ることは出来ないが、美しく生えた眉と長い睫毛丈けは、見えた。睫毛は濡れて、頬には乾きかけた涙の跡が、青ざめた唇にかけて、一筋長く日に光つて居た。小さな頃の工合が、全く人を恍惚とさせる程で、寧ろ丸い挫

げ氣味の鼻も敢て苦にならない。併し何よりも顔の表情が私を動かした。一點の邪氣のない優しい顔の中に悲しい事に出逢つて途方に暮れたやうな仇氣ない悲みの様子が一ぱい溢れて居た。

女は誰れか來るのを待つて居るに相違ない。林の中で微かな音がしたので聞くにすぐに頭をあげて四邊を見まはした。その時木陰を透してチラと見たが女の目は何處か鹿の子のやうに憚々した大きな涼しい目であつた。女はかすかな音の聞えた方にその大きく見開いた目をじつと据ゑてしばらくの間聞きすまして居たが、嘆息をして力なく頭を落し前よりも深く俯向いて膝の上の花を揃え始めた。眼は赤らみ唇はかすかに震へたかと思ふと新しい涙は深い睫毛をもれて頬の上を輝き下つた。かうして久しい間只折々絶望したやうに手を振るばかりで身動きもせず——耳を立て、ちつと聞き澄まして居た。

また林の中から音が聞えた。女はビクリとした。音は止まらずに段々はつきりや近付いて來て遂に急ぎ足に確りと足踏みをして來る足音が聞かれた。女は身を乗り出して怖えでもしたやうに側目もふらず見つめたが何處となく落ち付かぬ色をして待ち遠しさに輝いた。

茂みの蔭からつと一人の男が表はれた。それを見ると女はサツと顔を染めて喜ばしさうに嫣然して立ち上らうとしたが急に又萎れ返つて顔は眞青に變り狼狽へ乍ら只憚々した哀憐を乞ふやうな目をあげて近付いて來る男を見た。この時男は靜かに女の側に立つた。

私は好奇心に驅られてこの木蔭から男を覗いた。が正直云ふと彼れを見て私はあまり好い心持は仕なかつた。見たところで判断するに若い富豪の生意氣な召使でもあるらしいいやに氣取つた流行を追つた装束をして何かに無頓着であると云つた様な風を見せ上衣には青銅色の短いのを鈕も外さず着て居たがこれは正しく主人のお古らしい。端々を百合色に染めた淡紅色の襟飾をまいて金筋の入つた黒天鵝絨の帽子を眉毛もかくれる程引き下げた。白い襯衣の丸いカラーは容赦もなく頬を横切つて耳まで達し強い糊を付けたカフスは曲つた赤い指先まで隠すくらゐで忘れな草を彫つた土耳古石の入つて居る金や銀の指輪が僅かに見えて居た。その赤く生き／＼したいかにも厚皮しさうな顔は私の觀察した處から言ふと男が見ては嫌や氣を起させるが不幸にして往々女には好かれる類の顔である。

至つて卑しげな顔のくせに嘲るやうな人を人とも思はぬ風を見せて始終乳灰色

のいよいよ小さい目を殊更歪めるやら濛い面をして口を引きまげるやら出もしない欠伸をしてさも態とらしい氣のなささうな風をするやら洒落た赤いちりれ毛を撫でて見るやら果ては厚い上唇に出掛つた黄色い髭を引つ張るやら——いや、もう見られた風態ではない。少女が待つて居たのを見るや、もう氣取り出してのそりくど大股に少女の側まで行つたが外套の隠袋に兩手を突つ込んだまゝ一寸肩を揺振つて立ち止まつた。そして氣がなささうにチロリと少女を見て、ごかりと座つた。「永く待つて居たかね。」矢張他所を向いて足をふり欠伸をしながら斯様言つた。少女はしばらくは答へもし得なかつたが遂に「え、随分……。」と聞き取れぬ程の聲で云つた。

「ふう！と鹿爪らしく帽子を取つて眉の上まで垂れ下つた厚い房々した硬いちりれ毛を撫で、勿體らしく自分を見廻したが又そつとその大事な頭におつ被せた。危く忘れるところよ、それに雨だつたからね！又欠伸をして用は多いし、さう——はやり切れるもんぢやアない。その上彼奴は始終ぐつぐつ云やアがる。俺らアもう發つせ明日……。」

「明日？」少女は叱驚して男を見つめた。

「ひ、明日……おい、冗談ぢやないせ。」と、もう少女が震へ出して、しんなり首を垂れたのを見て、忌々しさうに、「何だい、アクリナ！泣くのかい。俺ら泣き顔ア何より嫌ひだ。(と獅子つ鼻に小皺をよせて)泣くなら、もう御免蒙るせ……へん馬鹿々々しい——泣いて居やがる。」

「あら、泣きやしません泣きやしません！一生懸命涙を呑み乍ら急いでアクリナは叫んだ。「貴方明日どうしてもお發ち？」としばらく黙つて、「いつ逢はれるでせうねえ、また。ガイクトル、アレクサンドリツチさん。」

「逢はれるさ。ナニ逢はれるさ。來年でなきあ——ともつと遅くなるかな。家の且方何でもベテルブルグで役を見付けたいと思つてゐるらしいんだ。」と鼻にかゝつた氣の乗らぬ聲をして、「ひよつとしたら外國へ行くかも知れんよ、俺れも。」

「私の事なんぞとつと忘れておしまいになるでせう、ねえ貴方。」悲しさうに少女は云ふ。

「なに、そんな事があるものか、忘れるものか。只理由の解……らんこと云はんでなしは利口になつて老爺の云ふことも聞くが宜いせ……俺れがなにをお前を忘れるものかアな。」ツンと背伸びをして又欠伸をした。」

「ほんとにねえ忘れないで下さいよ、貴方！」と拜むやうに、「貴方の外には頼る人もないんだから。私、貴方の爲めなら、什麼ことでもしますから……貴方、お父さんの云ふこと聞けて被仰るけど、ねえ……何うしても私、お父さんの言ふ事をきくわけには行きませんわ……」

「何故行かない？」(兩手で後ろから頭を抱へて仰向けになり、丸で胃の腑から押し出したやうな聲で云つた。)

「けど、貴方、何うして何うして私にお父さんの云ふ事が聞かせよう。——ねえ、貴方にだつて分つて居ませう……」

少女はワツと泣き伏した。
「アクリトルは鋼鐵の時計鎖を弄り乍ら、しばらくして、

「アクリナ！お前、馬鹿ぢやアあるめいになあ、そんな理由の解らん事をいふものぢやない俺ら、何もお前の爲め悪かれと思つて云ふんぢやないんだ——なあ、解るだらう？お前だつて馬鹿ぢやアなしさ、全くの土百姓でもあるめい、なあ。母親だつても、お前だつて馬鹿ぢやなし。と云つて、お前は教育がないんだから——ねえ、だから云はれる通り、はい、聞くものさ。』

「でも怖いもの。」

「おほ！それが理由の解からぬと云ふもの、何が怖いもんか。……それは何かい？」と少女にすり寄つて、

「花ア？」

「えい。」アクリナは氣抜けがしたやうに答へた。「これは私が摘んで来た蓬菊なの」とやゝ勢付いて、「牛の子にやると薬になるつて云ふのよ。それから、これは金盞花よ——瘰癧に宜いんですつて。御覽なさい、まあ、この綺麗なこと！私、こんな可愛い花初めて見たわ。此方のは忘れた草で、これは董よ……それから、これ、貴方に上げようと思つて、摘んで来ましたの。」と黄色な蓬菊の下から、草の細葉でくゝつた青い矢車菊の小束を取り出して、

「貴方、お好き？」

「アクリトルは物臭さうに手を出して、花を受取つたが、氣のななさうに一寸臭いで見た切り、外向を向いて、指先で花束をころがして居る。

アクリナは餘念もなく男に見入つて居た。その悲しげな目元には、身をも心をも捧げ盡さうとする優しい心と、服従の念と愛情とが溢れて居た。女は男を憚つて泣

きたいのをじつと堪へて居るが今や男に分れを告げようとするその最後の時まで
も、その真心は男に捧げて居るのである。男はと見れば傲然と王様のやうに寝そべ
つて特別の思召を以て我慢して居て遣はすと云つた有様で例の氣のなさうな人
を人とも思はぬ風を装ほつて居るが、そのうちに自から得意になつて喜んで居る
ところが見え透いて居る。その赤ら顔を見ると小面が憎くなつて實際私は一人で
睨んでやつた。

而もアクリナは心から男に惚れぬいて、この世の何ものをもその前にさらけ出し
て悔いなくやうな惚れくとした優しみに満ちて實に美しい顔をして居た。けれ
ど男は………彼れは草花の束を地に落して仕舞つて外套の横の隠袋から眞鍮ぶち
の丸い片眼鏡を取り出し目に嵌めにかゝつた。眉をしかめ巾着のやうに膨らした
頬と鼻とで何度もくやくやつて見たがどうしても嵌らない。片眼鏡はころくんと手
に落ちた。

「それ何？」アクリナは不思議さうに訊ねた。

「眼鏡さ！」と容體ぶつて男は答へた。

「何にするの。」

「何かよく見るためにさ。」

「見せて頂戴な。」

グイクトルは濼い面をしたが、それでも眼鏡を貸した。

「壊すなよ氣を付けて。」

「大丈夫よ壊しやしないわ。(女は目に當て)あら何んにも見えないわ。」と仇氣な
く云つた。

「目をつぶらないで見えるかッ。」機嫌の悪い先生と云ふ口調で叱り付けた。(女は
眼鏡を當てた方の目を閉ぢた。)

「馬鹿ッ！其方ぢやねい。此方の目よ！」とグイクトルは怒鳴つた。そして丁寧
に教へてもやらないで眼鏡を取り返して仕舞つた。

アクリナはポツと紅くなつて、かすかに笑つて横を向き、

「私等の持つものぢやないと見える。」と言つた。

「まあ、そんなものよ。」

可愛さうに娘は口を噤んで深い吐息をついた。しばらくすると急に、

「あゝグイクトルアレキサンドロツチさん。貴方が行つちまつたら私何うなるで

せうねえ。」

グイクトルは外套の裾で眼鏡をふいて、隠袋に仕舞つた。が、しばらくして、「うひ、うひ、そりやア辛いだらうさ、きつと始めはね。(とお慈悲までに肩に手をかけた。女はそつと肩越しの手を取つて、おづ／＼キツスをした)併し、お前だつて馬鹿ぢやアあるまいしなあ、何うすりやアいゝんだか、それは自分に分りさうなものだ。」と愛憎の好い笑顔をつくつて、「俺れだつて、旦那だつて、こゝに居られるもんぢやアない、もうそろ／＼冬になるんだ、田舎の冬と来たら、——ねえ——こんな嫌やなものつたらありやアしねい。ペテルブルグになると、全く別世界だ。お前のやうな田舎娘が夢にも見たことのない不思議なものが、山ほどあるんだ。そりやア立派な馬車はある、街は廣いと云ふ、賑やかで開けて居てな——全く屹驚しちまふぜ!.....。」子供、のやうに少し口を開いて、アクリナは一心に聞き惚れて居た。「併し、こんな事を云つたつて駄目だ。どうせ、お前にや分りつこはないんだから。」と地の上にあつた身體の向きをかへた。

「まあ、どうして貴方。分るわ、よく分るわ。」

「ほ、う！ えらいな！」

アクリナは目をおとした。

「貴方は何うして前のやうに親切にして下さらないんでせう。」目をおとしたまま、で娘は云つた。

「前のやう?.....前のやうに!.....はて。」と怒つたやうに答へた。

二人はしばらく黙つて居たが、

「あゝ、もう行かなさやならん。」とグイクトルは臂を張つて起き上る。

「もう少時居て下さい。」とアクリナは哀憐を乞ふやうな聲で男に願つた。

「何しに?.....疾つくにお別れは云つた筈だ。」

「もう、一寸!。」とアクリナは繰り返した。

グイクトルは又横になつて、口笛を吹き出した。

アクリナは男の顔から目も放さず、見る見る中にも、もう胸は一ぱいになつたらしく、唇は引きつり、青ざめた頬は微かに紅みを帯びて来た。が遂に、

「グイクトル、アレキサンドリツチさん。」と聲を亂して、「あんまりだわ.....あんまりだわ、貴方。何うしてさうなの。」

「何が、あんまりかい?」と男は濼い面をして、心持頭を擡げて女の方に向く。

「あんまり烈いわ、貴方。今別れるのに、何とか一言位親切な言を掛けてくれてもいいぢやないの。何とか一寸一言位言つてもさ、これから先き頼りもないのですもの……。」

「ぢやア、何と云やア宜いんだ？」

「知らないわ、そんなこと。貴方が良く知つて入らつしやる筈だわ。貴方今遠くへ被行るんですもの、何とか一言ぐらゐ……。私何の因果でこんなにされるのだから。」

「可異しな奴だなあ！何うすりやア宜いんだよ。」

「何とか一言ぐらゐ……。」

「えい、箇棒な同じ言ばかり言つてる！」と忌々しさうに云つて、ぶいと立つた。

「あら、怒つては嫌やよ、貴方。」と湧き出る涙をじつと飲み込んで急いで云つた。

「なに、怒りもしねいが、お前があんまり分らないからよ。……一體どうしてくれつて云ふんだ。お前と夫婦になれないのは初めつから承知ぢやねいか。え、おい、さうちやねいか。そんなら、何が不足だつて云ふんだ。え、？、さあ返事をこゝに云はぬばかり、グツと顔を突き出して、手をひろげて突き出した。」

「何も……何も不足はないけれど……。」「と口籠つたが、怖るゝ震へる手を男に出して、「お別れに、只つた一言！」

遂に涙は瀧のやうに落ちた。

「へん、又泣き出した。」とヴィクトルは冷やかに見やつて帽子を眉深に押し下げる。

「何も不足はないけれど。」と女は両手に顔を埋めて、吸り泣き乍らなほ續けた。「この先き家に居て什麼目に逢ふか分らないわ、ねえ。私……。私何うなるでせう？あ、屹度無理八理に嫌な處へお嫁にやられるんだわ、嫌やだ……。あ、何うしたら宜いだらう。……。切ない！」

「吐せ、とんと吐せ。」と立つて居ながらもごかしさうに、口の中で啞いて居る。

「ね、一言云つてくれても宜いわ、一言……。言つてもアクイナ……。俺れも、お、お、おれ……。」

急に嗚咽返つて、云ひも終らす、草に顔を埋めて烈しく、娘は泣いた。……。ゆるゝ身體を震はして、むせ返る毎に白い頸根が美しく波を打た……。堪へゝた悲しみが遂に涙の瀧と破れたのである。

ヴィクトルはその様を見下ろして、しばらく立つて居たが、肩を凍めるとぐるり後

ろを向けてごし／＼行いて仕舞った。

しばらく経った。……娘はやつと落ち付いて頭を上げたが、ふと跳ね起きて四邊を見廻し手をにぎつて悶へた。直ぐ男のあとを追うとしたが、足はすくんで——娘はばつたり膝を付いた。

私（わたし）はもう見るに堪へなくなつて突然駆け出した。が、それを見ると女は眩暈（めまい）して、微かにあつと云ふなり恐ろしい力を出し飛び起きて木かげに隠れ去つた。あとには只散らばつた花束が残されたばかり。

私は暫時立つて居たが、やがて矢車菊の花束を拾ひ上げ森をぬけて野に出た。

日はうす淡黄に澄んだ西の空に低く落ちて白味が、つた冷たい光りを投げて居た。その光りも輝いて居るのではなく、只ぼんやりと水のやうに擴がつて居た。もう日没に半時とはないが夕焼けの様子も見えない。烈しい風が黄色に乾枯びた刈株を渡つて真向から吹き付けると小さなちいれた枯葉はサツとあふり立てられて林の端について道を横切つて飛び走つた。野に向つて丁度壁を立てたやうな森の片側は、一様にふるへ乍ら燃え立つやうではないが、はつきりした僅かの光に輝いて、その赤い木にも草の葉にも藁束にもちら／＼と揺めく無数の秋の蜘蛛の糸が見え

た。

私は立ち止まつた……何ともなく胸を壓される様な悲しみを覺えた。

輝いては居るが何處か冷たい今や消えなるとする自然の微笑みの中に物凄（ものごそろ）い空の日が一步步々足音を盗んで後ろに迫つて居るやうに思はれるのである。頭上を渡る小心な鴉は、夕暮の空を切つて重々しくまた鋭く羽を鳴らし乍ら頭を捻ぢひけて斜眼に私を見ると急に羽ばたきをし、いきなりかあ／＼と啼いて森の彼方に消えた。麥打場のあたりから戯れながら飛び立つた鳩の群は急に圓柱のやうに渦になつて巻き上り急がしさうに野面に飛び散つた。あゝ確かに秋だ。誰れやら禿山の向ふから馬を追つて來ると見えて空馬車の音が高く聞える。

私は家路に向つた。

けれど、あはれなアクリナの面影は長く私の胸から消えない。矢車菊の花束は洞み果てたまゝ今もなほ私の手に残つて居る。

「二十」

シチグリ在のハムレット

皆つて遠出に出掛けた時私は金持な地主の遊獵家アレキサンドル・ミハリツチの家の家で晚餐に招かれた。

その邸は、當時私の居た小村から四哩ばかり離れて居た。私はフロック、コート、これ丈は何れ旅行にでも遠くへ遊獵に出掛ける時にさへ持つて行つたが宜い、よく人に勧め、くする事だが——を着て、アレキサンドル・ミハリツチの家に掛けた。

舞宴は六時に初まる譯で私の着いたのはまだ五時頃であつたが、已に軍服の人達や、文官服の紳士連、其他種々な服装をした人々が大勢集つて居た。主人は恭しく挨拶に出て来たが直ぐ又忙しさに勝手元の方へ急いだ。彼れは今日高貴の方の來臨を待ち設けて居るので彼れ位社會に位置もあり、財産もありする獨立獨行して行ける者に不似合なほど、それはくして居た。

アレキサンドル・ミハリツチはまだ結婚をして居ない。女など云ふものは念頭にないので、その家は未婚者共の集中する處であつた。そしてその生活状態と云へばそれは素破らしいもので先祖以來の邸宅を更に取壊げて立派に裝飾を加へ、毎年モスカウから取寄せる酒丈けでも一萬五千留に達すると云ふくらゐ。人々からは長者のやうに尊ばれて居た。彼れはずつと以前に役を罷め、今では高官と仰がれようなどとの野心は、毛ほども持つてない。そんなら何故平素の風にもなく高貴の方を招待して盛んな宴を張り、その日にはもう朝から居ても立つても居られぬ程氣を揉んで居るか云ふに、その原因は茫漠として分らない。これは恰もわが友の或る辯護士が、その頼み手から送られた賄賂を取るか何うかと聞かれた時いつも答へる言葉のやうに、それは曖昧の中に葬られて居るのである。

主人に分れてから私は彼方此方と室々を歩き初めた。殆んど總ての客が見知らぬ人ばかり。二十人程の人はもう骨牌の卓を取り圍んで居た。一心に骨牌に耽つて居る人々の中には、貴公子風だけれども何處か疲れたやうな顔をした二人の軍人と高い襟飾をきちんとしめて染めた口髭の垂れ下つた云ひ出したら後には引かぬと云つた風の極めて保守的らしい二三の役人も見えた。此等保守的の人々は傲

然として牌を拾ひ取り頭も振り向けずに近寄つた人達を尻目に見やつた。この外に猶太鼓腹を突き出して肥えたみづ／＼した手に据る付けたやうな短かい脚をした五六人の地方小官も交つて居た此等地方の役人達は低い聲で話し合ひ八方に愛嬌笑ひを振り撒き乍ら襟衣の胸元に引つ付けて牌を持つて居た。そして切り牌を投げる時にも卓に叩き付けるやうな事はなく緑色の机卓掛の上に静かにゆつたりと撒いて勝ち牌を集めるにも物柔かく成るべく音を立てぬやうに氣を配つた。

その他の人々は長椅子に腰掛けて居るのもあれば戸口に立つて話して居るのも窓に寄り掛つてるのもあつた。一寸見たところ女のやうな顔をして居るがさして若いでもない一紳士は誰れあつて氣に止める人もないのに獨りで耻かしさうにもぢ／＼し乍ら手持無沙汰に胸の時計の認印を弄つて居た。又他の紳士の一連は燕尾服に襟盤縞のズボンを穿いて有名なモスカウの裁縫師で裁縫組合の頭をして居るフィルスクリューヒンの特別仕立を見てくれと云はぬばかり脂切つた禿頭を無遠慮に左右に振り立て、いかに面白さうに元氣よく話して居た頭から足の先きまで黒物づくめと云ふ装束の髪をびか／＼とした二十ばかりの内氣らしい近眼な青年は何やら嘲笑ふやうな微笑を漏らして居た……。

こんな人々にも見飽いて少々退屈になつた時突然一人の若い男がやつて來た。グライニチンと云つて、まだ學位を取らない學生で何と言つて良いか一寸明瞭とは言へないが………兎に角一つの職業を持つてアレキサンドルミハリツチの家に寓居して居る。射的が何よりの得意で又犬を馴らすことに妙を得て居る。私はモスカウに居る頃から知合であつた。彼れは試験となるといつても所謂『監の藝當』を演じたものだ。『監の藝當』と云ふのは先生の出した問題に一言の答もしないこと、こんな男を當時又『掻書生』と呼んだものだ。(併しこれはすつと昔の話だと云ふことは云はずとも御承知だらう。)一寸その時の様子を話して見ようか。

先づ試験が始まると云ふので、グライニチンが呼ばれる。グライニチンは頭から足の先まで汗みどろになつてしやんと座つたまゝ身動きもせず居たが、のろ／＼と當途もなく四邊を見廻して立ち上ると急いで學生の制服の鈕を掛け徐々として試験官の机の前に進み出る。

「さあ紙を取りなさい。」と愉快げに先生は云ふ。

グライニチンは手を伸べて打ち震ふ指先で重ねた紙を捻つて見る。

今日の副試験官は他の學科の教授をしてる至極短氣な老紳士で、今のはれな髭書

生のこの様子を見ると、ぐっど癡に障つて、
 「そんなに擇つちやいけません。」と怒鳴る。

グライニチンはもうこれ迄と諦めて、一枚の紙を取つてその番號を見せ窓際の所に退いて先きの人達の濟むのを待つて居る。窓に倚つたま、彼れは身動きもせず、只時々前のやうに筋肉一つ動かさずのろ／＼と見廻す丈けで目も放さず紙を見詰めて居る。その中に先きの人達は滞りなく問題に答へて、「宜しい！歸つてよろしい。」とか、「宜しい、大變よく出来た！」とかそれ／＼成績に應じ讃辭を受けて歸つて来る。今度はいよ／＼グライニチンの番だ、彼れは立ち上つて確乎した足踏をして机に近づく。

「問題を讀んで！」と云はれる。

グライニチンは紙を両手に持つて高く鼻の先きまで差し上げのろ／＼と讀み了つてのろ／＼と手を下げる。

「よし。さあその答は？」

前の教授がぐいと椅子に反り返つて胸先きに腕を組んだま、懶げに云ふ。墓場のやうに寂然する。

「何故、黙つてるか？」

グライニチンは啞の如く黙つて居る。

副試験官は早やいら／＼し始めて。

「さあ、何とか云つた！」

グライニチンは丸で死んだ者のやうに息もしない。

仲間共は様子如何にとその濃い髪の毛を短かく刈り込んだ動かない頭を見詰める。副試験官の目は爛々として今にも飛び出しさうになる、もう／＼グライニチンが憎くて堪らないのだ。

「はて、これア不思議だね、何うも。」と他の試験官が云ひ出す。

「何故、君は啞のやうに黙つてるんだ？ さあ、それが分らないか。分らんなら分らんと云ふが宜い。」

「何卒、他の問題をやらして下さい。」と困つた青年は、やうやく重い口を開く。教授達は顔を見合せる。

「よし、一つ取んなさい。」と首席の試験官が手を振つて答へる。

グライニチンは再び紙を抜き出して再び窓際に行き再び机にもどる。再び墓場

のやうに沈黙つて居る。

副試験官はもう生き乍ら彼れが肉を食みも仕兼ねぬ勢である。遂に教授達は彼れを送り出して零點を付ける。

諸君は思ふだらう。「さあやうやく歸る事丈けは出来る」と。所が何うして大違ひで彼れは自分の席に歸つて他の人の試験が皆んな済んで仕舞ふまで凝つと座り込んだまゝ身動きもしない。そうして漸く戶外に出た時に彼れは呼ぶ。「あゝ拷問に掛けられた！ 烈い目に逢つた！」

かくてその日一日頭を掻きむしつて烈く不幸な運命を呪ひ乍らモスカウ中をさ迷ひ歩く。その辯勿論本などには觸らうともしないで、次の日には又同じ事を繰り返すのであつた。

今私の所へ来たのは、このヅライニチンである。私等は種々モスカウの話や獵の話などをした。

「何うです君。」と彼れは急に私に囁く。

「この連中のうちで一番の利口な男に御紹介しませうか。」

「何うか。何分願ひます。」

ヅライニチンは肉桂色のフロツクコートに縞のある襟飾りを付けた髪の毛の房のやうに覆ひかぶさつた口髭のある小柄な男の前に私を連れて行つた。この男の黄ばんだ落附きの顔立は見るから敏捷さうな諷刺家らしく今にも警句が飛び出しさうに唇には絶えず曲つて皮肉な笑を浮べ小さな黒い目は歪んで厚皮しげに不揃ひな瞳目の下から覗いて居る。其傍らには鷹様な柔和な人の好きさうな丁度砂糖と密との混せもの様な片眼の田舎紳士が居たが小柄な男がまだ警句を吐かぬ中から笑ひ出して相好を崩して喜んで様子である。

ヅライニチンはその利口者に私を紹介した。彼れの名はビートルペトロヴィツチルビヒンと云ふ。我等は丁寧に初対面の挨拶を交した。

「私の親友を御紹介致しますが如何でせう。」とかの砂糖のやうな紳士の腕を取つてルビヒンは突然鋭い聲を發して、

「さあ、キラセラセラアニツチ君、さう脅込みせんでも宜いさ誰れも喰ひ付きやしないし。僕は君を紹介するんだ。」

キラセラセラアニツチが當惑顔に丸で外科醫の手術でも受ける様に謹ましやかに御辭儀をしてるにも頓着なく猶云ひ續ける。「この男はね、それア豪い紳士ですよ。」

非常な健康家でしたが、五十の時眼の療治をしやうといふ氣になり、そのためにどう
く片眼失しました。その後、この男は何人も自分の百姓共を療治してやりました
が、皆同じ結果になりました………で無論百姓共もその失敗の結果に相應した敬意
を表してそれに報いて居るです………」

「何を云ふんだ、この男は！」とキリラセリアアニツチは口籠つて、そして笑つた。

「ナニ、君。はつきり云ふさ、え云ひ給へ」とルビヒンは猶續ける。「世間の人は君を
裁判官に選ぶかも知れんせ。ねえ君僕は屹度選ぶと思ふね。さうなりやア書
記共が君に代つて種々な事を考へて呉れるさ、何も心配なしさ。併しね、君、どうせ
他人の考へた事を喋りさへすりやア宜いんだが裁判官であつて見ればそれを喋
ることぐらゐ自分で出来なくちや困るせ。若し知事でもやつて来て、まあ、何うして
此の裁判官は斯様に啞るのか」と聞たと思ひたまへ。して書記共は、え、痛風に罹つ
て居りました」と答へたと思ひたまへ。(さうか悪血を取つてやれ)と知事は云ふだ
らう。そんな事にでもなつたら、君の地位に對して、随分と不面目ぢやないか、ね、さうだ
らう。」

砂糖のやうな紳士は、もう頭げ返つて笑つて居る。

「何うです、あの笑ひ様は！」とルビヒンは、キリラセリアアニツチの波を打つてる
腹を人が悪さうにちろりと見遣つて、「ナニ、そりやア笑つたつて構ひませんがね。」
と彼れは私の方を向いて付けて云つた。「この男は、生活にやア不自由しませんし、身
體は丈夫だらうし、それに子供はなし、百姓共も質入などをやるやうな事はありやア
しません——それに百姓の療治まで仕てやるんですからな——それからこの男の
細君は大馬鹿です。」(キリラセリアアニツチは耳を借さない様に、外方を向いて居た
が、猶くすく笑ひを止めない。)

「ナニ、そりやア私だつて、妻が測量師と墮落ちした時ア笑つて居ましたよ。」(と齒を
見せて嘲笑ひをして)「さう、貴方は御存知ぢやなかつたですか。え、さうでしたか。
何でも天氣の好い日でしたが、彼女奴置き手紙をして男と突つ走つたです。(親し
きビートル、ベトロヴィツチ様。不貞の罪は何卒お許し下され度、今は心の駒止め難
く、わが愛する人とこゝを去り申候)………それで、測量師の爪も切らず、細い下袴を
穿いて居るのが彼女の氣に入つたのです。随分驚いたでせう。その手紙に又こん
な事がありました、この人は誠に心の偽りなき人に候。つて………や飛んだことを
！私共は不作法者で、何んでも真正直に言つて仕まふんですからな。併し、一寸彼

方へ行きませう………未來の裁判官の側に立つて居るべきものではない………」。

彼れは私の腕を取つて窓際に進んだ。

「私は此地で頓智者と云ふ評判を取りました。」と話しをして行く中に彼れは云ひ出した。「勿論當てになりやア仕ません。只私はなか／＼人が悪い方で何でも構はず罵倒するのです。それだから私の話は流暢に樂に出るのです。何もねえ勿體らしく氣取つてる必要はないぢやありませんか。私は仲間ごもの話なんか誰れのだつて身を入れて聞きやしません。どうせ爲めになる事はありませんもの。私は人が悪いですよ——だつて仕方がありませんや。人を悪くするには利口でなくたつて良いのですからね。そりや人を悪くして居るなあ心持の良いものですよ、その心持の良さ加減は逆もお分りにやなりません………まあ一寸御覽なさいあの主人を！あれ！うろ／＼と何を飛び廻つてるんでせう。時計ばかり見て莞爾するかと思ふと汗を發いて顔縮面をしたり、我等の腹が減つたのには、どんとお構ひなした。御盛んな事だ、ほんとの御殿様だ！やあ／＼、又走り出した。——御覽なさい丸で飛んでる様だ！」

と云つて、ルビヒンは鋭く笑つた。

「惜しい事には一人の婦人も居やしない。」と彼れは深い嘆息をして、「全く未婚者の集合だ。これぢやア樂みありませんな。」と云つたが、急に、「あれ、あれ、コセルスキー公爵が来ました——そら、背の高い髭のある黄色な手袋を嵌めた人です。一寸見れば洋行したことのある人だといふ事が知れます………何時だつて彼の人の早く来た例がない。正直云やア、旅商人の駄馬のやうな、まあ魯鈍ですな。そして私等なんかに話すには、そりやア横柄なもので、殊に妻や娘共は腹を減らして待て居た揚句、丁寧に御挨拶を申上げて、一寸笑顔を向けられる位が關の山です………それから時には巧い事も言ひますが、ほんの一寸の間丈けで直ぐ行つて仕舞ひます。………それからね、その整句つたら！丁度鈍刀で以て船の大纜を叩つ切るやうなものです。で、私はあの人のお氣に召さないんです………兎も角挨拶に行つて來ませう。」

ルビヒンは公爵に逢ひに走つて行つた。それから直ぐ又戻つて來て、「あれ私の大嫌な敵の奴も來てますよ。」と云ふ。「そらね、日に燃けた顔の髪のかわ／＼した肥つた奴でさあ。それ向ふに帽子を鷲掴みにして壁に沿いてぢり／＼歩き乍ら狼のやうに八方を睨め廻して居る奴がおります。彼奴です。私は千留もする馬を彼奴

に四百留で賣つて仕舞ひました。彼の獸物見た様な奴、屹度馬鹿な奴だと私を笑つて居るでせう。併し、あんな譯の分らん奴つたらありませんね、朝茶を飲む前か、正餐の後でまあ、今日は！つて云つて御覽なさい。(む、さうか?)とこれです。……あ、長官も來てる。』とルビヒンは云ひ續けた。『あの文官の長官です、退職した貧乏長官です。家には甜菜砂糖のやうな娘が居ますし、又癩癩に罹つた様な製造場を持つてます……や、失敬！言ひ違えたです……併し、分つたでせう。お、棟梁がやつて來る！獨逸人です、口髭なんか生やして自分の仕事はでんで、分りやしないんです——性來の阿呆者ですな！……併し、柱の立て方一つ知らなくつても、賄賂をとり社會の柱になる人のお髭の塵を拂つて、その柱にしがみついて居さへすればいつまでも職業繁昌でさあ！』

ルビヒンは再びくすくす笑つた。……この時急に家中の人々の間に動搖きの波が立つた。高貴の方がお着きになつたのである。主人はもう眞先に玄關へ走り出た續いて召使の二三人と追従する客達が走つて行つた。……今まで騒がしかつた話聲は、ひたと静まつて、丁度春の頃、蜜蜂が巢の中でブン／＼云つてる様な聲を潜めた樂しげな私語にかはつた。只やかましい胡蜂のルビヒンと立派な雄蜂のゴゼル

スキ、丈けは、高話を止めなかつた。……すると見て居る内にいよいよ蜂の女王！——その高貴の人が入つて來た。それを迎へるために心を躍らしたのもあり、椅子から立ち上るのもあつた。彼のルビヒンから馬を買つた男までが、軽くお辭儀をし、高貴の人は眞似も出來ぬ容體ぶり様で禮をする代りに、ぐつと頭を後ろに反らし、一言毎に、わ、——と長い前置きをして鼻聲でぐつ／＼と満足に思ふ旨の挨拶を述べた。そしていかにも苦々しいと云ふ顔付で、ゴゼルスキ、公爵の平民風な髭を見やつた。(この時分、露西亞の貴族は露を生)例の製造場と娘とを持つた貧乏長官には、只右の手の食指丈けで握手をした。それから四五分経つ間に、高貴の人は晚餐の時間に遅れずに間に合つたのは甚だ嬉しく思ふと云ふ事を二度まで云つた。乃で人々は、大官だちを先きにして食堂へと進んだ。

先づ高貴の人を一番の上座、文官の長官と地方の組頭との間に据ゑた事は云ふまでもない。この組頭と云のは、顔立を見るから、敢爲の氣の溢れた威嚴のある人で、ちんと糊の硬い胸當を着けたのもよく似合ひ、大きな胴衣を着て、手には佛蘭西の嗅煙草を一ぱい詰めた丸形の煙草入を持つて居た。主人は忙しげに彼方此方と走り廻つては、さあ何卒何卒と口八釜しく御馳走を強ひ、高貴の人の後ろを通る度に莞爾

した。そして室の片隅で、學僕のやうに忙しくストブを啜り、麵包の片を嗜つた。料理人は三尺にも餘る大魚の口に花把を差して搬んで來た。法被を着たしかめつ面の下僕共は、マラガの葡萄酒やマデーラの酒を持つて、鹿爪らしく客にすゝめた。そして大抵の紳士連殊に年上の人は、義務として嫌々ながら、盃を重ねると云つた風を見せたが、遂には自分から三鞭酒の口を抜いて、互ひに祝盃をあげ初めた。

こんな事は累々しく書かすとも、讀者は能く御承知のことであらう。併し只一つ、皆を喜んで傾聴せしめた吾が高貴の人の珍話は、こゝに記すに價値のあるものだと思ふ。

誰れであつたか——多分例の貧乏長官であつたと思ふが。この人はこれで中々近代文學に通じた人だ——一般に婦人の勢力といふ事に付き、特に若い人に對してその力の偉大なることを話した。すると高貴の人は、

「左様々々」と調子を合して、

「それは眞理ぢや。それだから若い者は嚴重に監督しなければならぬのぢや。さうでないとならば女を見さへすれば誰彼れの差別なしに夢中になつて仕舞ふ。」子供らしい喜びの笑みが凡ての客の顔に浮んだ。中には満足げに目を輝かした紳士もあつた。

た。「まあ若い男は馬鹿者ぢやな。」この高貴の人は言葉に力を入れやうとして時々普通の人の云ふ言葉と違つた妙な所へアクセントを付けた。「例を云はうなら私の子のイヴァンぢやが。」と彼は話を進めた。「彼は丁度二十歳と云ふ馬鹿者盛りぢやが——私の所へ眞直にやつて來て、お父さん妻を費つて下さい。」と云ひますぢや。私は馬鹿者め！と叱り付けて、それよりか先づ兵士に行けと云つてやつた。

……勿論彼れは烈く落膽して——泣きましたぢや……併し私を以て見れば……そんな馬鹿な事は出來ん。」此の最後の言葉を云つた時に、それが只唇から出たのでなく胃袋から押し出されたやうに思はれた。こゝで一寸話を切つて勿體らしく隣席の長官をぢろりと見て方圓もなく眉を釣り上げた。文官の長官はいかにもくと數度頭をまげて領首き高貴の人に向いた一方の目を忙しく瞬きました。

「それで貴方は何う思ひますな？」と高貴の人は再び話し出した。「今になつて息子はこんな手紙を寄越しましたぢや夢中になつて居つた時分によく氣を付けて下さつて有り難い……あゝしてやつたのが宜かつたのぢやな。」

勿論客は皆一も二もなくこの説に同意を表し、この愉快なる話によつて大なる教訓を得たやうに見えた。……晚餐のすんだ後人々は一時に立ち上つて、がや／＼と

騒がしく——けれども格別不法な所行もなしに客間に移つた。この場合に限つて氣随氣儘を許されたがやうに……彼等は骨牌に向つた。

私は何うにか慫うにかこの夜會の濟むまで居通して御者には明日の朝五時に迎へに來いと云ひ付けて、自分にとて與へられた室へ引き取つた。併し天の配劑ほど不思議なものはない私はこの夜の中に一人の忘るべからざる人物と知己にならうとは思ひもかけなかつた。

今夜は大勢の泊り客があるので各自に自分の寢室を持つことは出来なかつた。私がアレキサンドル・ミハリツチの料理番に案内された所は小さな青色を以て飾られた濕つばいやうな室であつたが、已に他の客が一人居てもう着物を脱いで居た。私を見ると急いで蒲團の下にもぐり込んで鼻の先まで蒲團を被つて一寸の間柔い鳥の毛の寢床の上にむく／＼動いて居たが直ぐ静かになつたと思つたら、その木綿の夜頭巾の丸い裏の下から、ちろ／＼覗いて居た。

私はもう一つの寢臺に上つた。(この室には寢臺は二つしかなかつた。)そして着物を脱いで濕つた様な敷物の上に横になつた。隣りに寢た男は寢返りを打つた……私はその人にお寢みなさいと云つた。

半時間ばかり經つた。私は眠らう／＼と努めたけれども何うしても眠ることが出来ない。當て途もない憊乎した色々の考が、水車の水承のやうに後から／＼と果てしもなく繋つて刻々刻々に押し寄せた。

「貴方は眠つてお出ぢやないやうですね。」と隣りに寢た男が口を切つた。

「え、御覽の通り。」と私は答へた。「貴方も睡くないんですか。」

「ちつとも睡くありません。」

「何うしてです?。」

「え、寢ることは寢ますけれど——何しに寢るんだか分かりません。私は床へ入つてからも、しばらく静然として居ます、その中に眠ります。」

「睡くもないのに、何うして寢るんです?。」

「何うしてつて、ぢやア何うすれば宜いんです?。」

私はこれに答へなかつた。

「不思議ですね、ちつとも蚤が居ませんね。」しばらくして彼れは又話し出した。「こんな所に蚤が居ないなんて、不思議ぢやありませんか。」

「蚤が居ないので、却つてお困りのやうですね。」と私は云つた。

「なに、困りもしませんけれど、只私は何でもさうですが、蚤の居さうな所には居た方が好きですね。」

「おほう！ 妙な事を云ふな。」と私は思った。

隣りの男は又口を噤んだが、

「何うです、私と一つ賭をしませんか。」と寧ろ聲高に又云ひ出した。

「何の賭？」

私は何だかこの男が面白くなつて来た。

「さう……何をやりませう？ それ、これが宜い。あの貴方がですね、私を馬鹿者だと思つたと私は信ずるですが。」

「飛んでもない。驚いて私は唸つた。」

「物の分らない奴、曠野地方の田舎者だ……ね、さうでせう、眞實の處を仰有い……。」

「私は貴方に御目にかゝつた事もなかつたんですもの。一體貴方如何してそんな事をお考なさるの……。」

「駄目ですよ、貴方の聲で分りますよ。貴方の話振りはいかにも冷淡さうですもの。」

……併し私は、貴方の思ふ程の何ちやアありません……。」

「御免下さい。その……。」

「いや、ま、私の方をお免下さい。第一にね、私だつて貴方にやア佛蘭西語を話しますよ、獨逸語ならまだ能やります。第二にね、私は三年間外國に行つてました、——伯林丈けでも八月居ました。それからね、貴方へーゲルを研究しました。ゲーテなんか底の底まで知つてます。おまけに私は獨逸の大學教授の娘と長い間戀をしました。併しその後國へ歸つてから肺病の婦人と結婚しました。頭は禿げてるが人物は中々豪い婦人でした。ね、斯う話して見れば、貴方と毛色の變つた者でもないでせう。貴方が思ふ程な曠野地方の野蠻人ぢやないですよ……いや、私だつて物事はよく考へてやりますよ、さう露骨な無闇な事は決してしませんさ。」

私は頭をあげて前よりも更に心を止めて、この奇妙な男を眺めた。けれども洋燈のほの暗い光りでは、その顔付を見る事が出来なかつた。

「そら、貴方は今私を見てますね。」と夜頭巾を眞直に直しながら彼は猶續ける。「貴方は屹度、不思議に思つてるでせう、何うして今日彼奴を目つけなかつたらうかなあ。つて。そりやア見付けなかつた筈ですよ、聲も立てず、戸口の後ろの人の陰に隠

れてましたもの。そして誰れとも話しも仕ませんし、料理番が盆を持って通る時なんか、その臂が私の肩の處へ差しかゝるので私の身が隠れるのです……何故そんな真似をしてたかつて言ひますと、それには二つの理由があるんです。私は貧乏者だからつて云ふのが第一、この頃大人しくする様になつたと言ふのが第二の理由です……實際私を見付けやしなかつたでせう、ねえ私を？」

「全く知りませんでしたよ。」

「さうでせうともく」と私を遮つて、「能く知つて居ますよ。」

「それは起き返つて腕を組んだ。帽子の長い影が壁から天井へかけて斜めに伸びた。」

「それからねえ眞實に言つて下さい。」横目にちらりと私を見て彼は又云ふ。「貴方は私を見て吃驚したでせう、奇體な奴、これが所謂一風變つた變人だ、いや變人以上の變てこな奴だと思つて。或は又變人の振りをする奴だと思ひましたかね！」

「今も申しました通り全く貴方を知らなかつたですから……。」

「彼は一寸頭を垂れた。」

「こんな風に思ひ掛けもなく貴方と全く知りもしない方と、お話を初めるなんて如

何したんでせう——まあ、不思議なもんですねえ！」(彼は嘆息を漏らした。)貴方の心と私の心の間に生れながらの繋りがあると云ふ譯ぢやなしね！貴方も私も共に世上の人云は、赤の他人別々の人なんでせう。つまりお互に何の關係もない者ぢやありませんか、ね、さうでせう？併しです、吾々は二人共睡くないそれだから話すつてのに不思議はありますまい。私はこんな氣になることは滅多にありませんが、今夜は何だか話したくつて仕方がないんです。一體私は含羞む方としてねえ。何も田舎者だから耻かしいの位がない貧乏者だから耻かしいのつて云ふんぢやありませんが、只非常に自慢氣があるものですから。それも時により氣が向いて來ると尤もそんな氣分は什麼時に來るか自分でも豫め知り難いですが、兎に角さうなつたら、もう耻かしいも何も忘れて仕舞ひます。今夜が矢つ張りそれです。今なら喇嘛法王と顔と顔を突き合はしても屁でもありやしません、嗅煙草を一服下さいつて云つてやります。併し貴方は寝たいでせうね。」

「いゝえ、なか〜」と私は急いで答へた。

「睡いどころか、貴方と話してるのは非常に面白いです。」

「さうですか、面白いつて……それは至極結構です……それでね、今も申しまし

た通りこの地方では私を一風變つた變人だつて云ふんです。お互の世間話の間にひよつと私の事でも出れば、む、あの變人かつてな調子で奴等は話をする。それ以上私の運命が何うならうが一向お構ひなしなんで……變人々々つて私をいぢめた積りで居るんです……所が焉んぞ知らん此方は平氣なものでさあ……寧ろ却つてちつとも變人らしい所のないのを悔ひです。——全く何にも人に變つた所はないんですからなあ時にひよいとこんな風に氣が向いて貴方と話を初めるつて云ふやうなことはありますが、そんな事は一文の價値もありやしない極く安つばい、つまらぬ氣まぐれでさあ。」

彼れは私の方を向き直つて手を振つて、「ね、君！」と叫んだ。「私はね、かう云ふ説を持つてるんです、地球上に於ける生活は、只變人的な人間に向つてのみ生存の價値がある、と云ひ換へれば、變人的な人間だけがこの世に生存する權利を持つてると思ふんです。 Mon verre n'est pas grand, mais je bois dans mon verre, (吾が盃は大ならず。

然れどもなほ吾は吾が杯を以て飲まん。)と誰れかい云ひましたがね。」と云つて、「何うです、佛蘭西語は巧いものでせう。」と低い聲で付け加へた。「よしんば偉大な頭腦を有し有らゆる者を會得し來るべき運命を知り時代と歩調を同うする事が出

來たとしても、其人自身の、その人丈けの獨創的などころがなかつたならば、それが何の役に立ちませうか。それこそこの世のつまらぬ平凡なものを收める藏をまた一個建たやうなものです。それが何にならうか、それよりか寧ろ、自己の特色を持つた馬鹿である方が宜い！一體人間はその人自身の匂ひ、自己獨特の匂ひと云ふものがなければならぬ、それが最も大切な事だと思ふです。併し私はその匂ひが如何な匂ひでなければならぬとやかましく云ふのではありません……決してそんな事を云ふのではありません。特色のある人ならどんな特色でもかまはんです、何處を御覽なすつても此の特色ある人は居るものです。路上の人皆特色ある變人です。併し私はその中には入りませんよ。」

しばらく黙つて居たが、「まあですが」と彼れは又話し進んだ。「青年時代には随分えらい理想を抱いたものですなあ！それこそ自己の個性を發揮した高遠な考へを持つたものです。外國へ出掛ける前、いや國へ歸つてからも初めの中はさうでした。で、外國へ行つて種々見聞を廣めた、廣めたは宜いが、私の様な何でも自分合點で物事を見て、仕舞ひには一向いろはのいの字も分からなくなると云ふやうな人間に能くある事ですが私は世

の人からは能く遠ざかつて澄まして居たものです。」

「愛人愛人！」と嘲るやうに頭を振りながら彼は言葉忙しく……「世間の人
は私を愛人と云ひます。……私のやうなのが愛人であつたら、この世に愛人でない
ものはなくなつて仕舞ふ。私はこの私と云ふものが只人の真似をしに生れて来た
んぢやないかと思ふ位です……さう！九でこれ迄私の研究した種々な作者の書
いたもの、真似をして生きてるやうなものです。私は額に汗して生活して居る、
して學問をした、そして戀をした。そして恰も自分の意志ではないが如く——義務
を果すと云つた風に、又運命の然らしむる所なればと云つた風に——事實結婚をす
ました。——果して何のための結婚か誰れに左様な事の譯が分らう？」

彼は夜頭巾を頭から掴み取つて、床の上に投げ付けた。

「貴方は私の身の上話を聞いて下さいますか」と急に聲を改めて私に訊ねる。「い
や身の上話と云ふよりも私の生涯の中に起つた二つ三つの出来事です。」
「え、是非何卒！」

「いや、それよりも何うして結婚したか、それをお話した方が宜さうだ。ねえ結婚
は中々重大な事件です鏡に物の反映する如くに全く人物を試験する試金石です……

……併しさう云つてはあまり平凡になりますな……一寸失禮ですが、嗅煙草を
一服吸らして下さい。」

彼は枕の下から嗅煙草の箱を引き出して開いた。そして開いた箱を持ちなが
ら手真似をして二度語り出した。

「貴方が假りに私の身になつたとして御覽なさい。いかなる、その如何なる……
まあ、何卒判断して見て下さい。如何なる利益が、ヘーゲルの百科全書から得られま
せうか。その百科全書と魯西亞人の生活の間に、何の共通點がありませうか。そ
してそれをいやそればかりではない、百科全書ばかりではない、一體日耳曼の哲學と
云ふものを……もう一步進んで云へば——科學そのものを、吾れ——の生活に適
用するには、何うしたら宜いだらう？」

「あ、それそれだ……そんならば何故汝は外國までもぶら付き歩いたか。何故
故國に止まつて汝の周囲の生活を究めようとはしなかつたか。さうしたなら生活
の必要とする處を見とめ、その如何になり行くべきかをも見極めて所謂汝の天職を
理解することが出来たかも知れぬのに……併し實際」と恰も恐る／＼自分の意

見を主張するかのやうに、調子を變へて又續けた。

「いかなる先覺者も未だ筆を付けない事柄を何處へ行つたら學ぶ事が出來やう。私は實に彼の女——露西亞人の生活を云ふのです——に就て學ばんことを望んだのだ。併し憐れむべし彼の女は啞であつた。人は只彼の女を見たまゝで了解しなければならぬけれど、それは我が力以上のことである。こゝに於て吾等は推理の力を與へて貰はなければならぬ。結論を示して貰はなければならぬ。處で茲處に其結論がある先づわが賢明なるモスカウの人々に聴け——彼等が夜鶯の如く語るの如く囁つて、毫も人間らしい話をしない……そこで私は考へに考を重ねた、科學は實に何處に行くも同一なり、真理は常に真理なり——と斯う思つて私は外國へ行つた異教徒の國に投じた。——而して何を得たか？ 愚かにも若い心に誤られて、一人で自惚れて居たです。肥たのは健全の記標であると世の人は云ふけれども私は其時分自ら自惚を以て肥ようとは欲しなかつた素より自然が其骨に實質の肉を付てくれなかつたならば決して自惚のみでは肥て見える筈もないのではあるが！」

「併し、何でしたね。」と一寸考へてから、「私は何うして結婚したか、それをお話する約束でしたな——ちやあ聞いて下さい。第一に私の妻はもうこの世に亡い人だと云ふことをお話しなけりやなりません。第二に……第二に私の若い時の話を申さなければなりません。でないと話しても何が何やら一向お了解りになりますまいから……併し貴方もう寝たいんぢやないですか。」

「いゝえ、ちつとも睡かありません。」
「そんなら宜御座んす。や、お聞きなさい……カンタグリユーヒンさんが鄰室で大きな厭聲をかいてる！ それで私は聊かの財産を持つた両親の息子でした。——私が殊更両親と云つたのは、傳へ聞く所によれば、一度は私にも母と同じく父があつたと云ふからです。私は覺えて居ないが父は随分頑固な人のやうでした。何でも鼻の大きな雀斑のある赤い毛の人で、きまつて鼻の片側で臭煙草をやつてる人であつたとか聞きました。その肖像畫はいつも母の寢室に懸つて居ました、それを見ると、耳まで黒い襟を立て、赤い制服を着た大變怖ろしげな人でした。私が悪いことをすると、よくその前に連れてつて打たれたものです。こんな時には母はいつも肖像畫を指して、（お父さんがお在世だつたら、もつと烈い目に逢はされる所だよ）と言ふのが常でした。これがどれ位私の獎勵になつたかお察し下さるでせう。私には

男の兄弟も女の姉妹もありませんでした。——いや正確に云へば、一人兄弟がおりました。頸の處の脊髄病に罹つてぶら／＼して居ましたが間もなく死にました……

……まあ、一體どうして脊髄病なんか、クルスク州のシチグリ在までやつて来たんでせうか、皆んな不思議に思つたです。併し、こんなことは餘計な話です。母は田舎氣質の女の身一つに、一生懸命私の教育を引き受けて生れ落ちたその大事な日から十六の年まで、よく面倒を見て呉れました……貴方私の話を聞いてますか。」

「え、／＼、聞いてますとも。さあ何卒。」

「では宜御座んすが。それで私が十六になると直ぐ母は佛蘭西語の教師、ネーシンの希臘殖民地から来たブヒリボグツチと云ふ獨逸人でしたが之を解雇めて私をモスカウへ送つて大學に入れました。それから間もなく母は伯父の手で私を養つて、どう／＼歸らぬ旅の人となりました。伯父はコルタンパーブルと云つて、シチグリ地方のみならず、その他にも一寸名の聞えた辯護士でして、こんな事は後見人によくある事ですが、この辯護士の伯父は鑑半分もなくなるまで私の財産を横領して仕舞ひました。……併し、こんなことも餘計な話です。私は大學に入つてから——今は母に對しても遊んで居られませんか——随分熱心に勉強しました。けれど、この

時でさへ私の獨創的の力は明らかに缺乏して居たです。私の少年時代はちつとも他の子供と違つたところはなかつた。私は丸で鳥の毛の蒲團の蔭で育つた者のやうに元氣なくぐす／＼して居ました。が、又た一方では、それと共に早くから私は深く詩を誦するやうになつて、いつも夢を見てる様な心持で、ぼんやりして居るやうになつて来ました……什麼夢だつて——そりやアもう美しい夢とか……まあ、そんなものに極つてまさあ。大學へ入つてからも同じやうでした。私は直ぐ「俱樂部」の中へ入りました。その頃の時代は、今とは大分違つてましたが……多分御存知ぢやないでせう、この學生の「俱樂部」がどんなものだからはねえ？何處かでシルレルがこんな事を云つたと思ひますが。

Gefährlich ist's den Leu zu wecken

Und schrecklich ist des Tigers Zahn,

Doch das schrecklichste der Schrecken

Das ist der Mensch in seinem Wahn!

(危険きは獅子の眠を醒すより、

怖ろしきは虎の鬚を摸るより、

いや怖ろしきが中の怖ろしきは、

己が身知らぬ誇らひ人よ。
シムレンはきつと斯様いふつもりではなかつたのです。

Das ist ein circle in der Stadt Moskau

(怖ろしきはモスカウの町の俱樂部なり)と云ふつもりだつたのです。」

「併しその俱樂部の何がそんなに怖ろしいんです?」と私は訊ねた。

隣席の男は突然頭巾を掴んで鼻の上まで引き下ろして、

「何がそんなに怖ろしいつて?」と彼れは叫んだ。「何がごころですか。この俱樂部は獨立の發達を妨げるものです。俱樂部は實に社會に取り、又生活に取つて憎むべき代物です。この俱樂部……あゝ一寸お待ちなさい、一體俱樂部つて什麼ものかお話しませう!この俱樂部つてのは外から見るといかにも眞面目らしく立派で、理に分つて活動をやつてる様に思はれますが大抵のらりくらり寄り合つて生きてる怠け者の集りです。話をせずして討論を初めつたらぬ議論の練習をして静かな益に立つ仕事の邪魔をする。そして又著述家仲間になりたがるし、一心に焦れ付かず——實際あらゆる生氣と穢れなき心の力を奪ひ取つて仕舞ふものです。俱樂部なんて——まあ全く兄弟分だとか友情だとか體の宜いことを言つて

實は下劣な怠惰者ばかりなんでしょう。胸襟を開くとか同情を注ぐとか見せ掛けばかりでもう絶えず誤解を仕通し、屁理屈を列べ立てゝ居るんです。この俱樂部では——難有くも朋友の權利といふので何時何時でもその友の内心深く洗ひもしない汚れた手を突つ込むことを許されて居る——もう誰れ一人少しでも清い穢れのない心を持つた者などは居ない。この俱樂部の者共は學問の淺い、つまらぬ口ばかりの奴等や未熟な賢者振つた奴等に、びよこゝお辭儀をして又一向詩の天才もない、只一寸氣の利いた思想を歌ふと云ふ句を並べる丈けのへぼ詩人に、隨喜の涙をこぼすのです。この俱樂部の者は十七の青二才でからもうべらゝ知つた風に、婦人のことや戀のことを話す所が婦人の前に出ると妙に取り澄まして黙り込んだり、本にでもある様なことを云つたりする。——何れ下らない事を話すに過ぎない。まあこの俱樂部と來たら何の事はない無駄話の養成所ですな。それでお互同志刑事調査のやうに何か探り合つて居るんです。……あゝ俱樂部よ!汝は實に無垢なる多くの人々を落魄の淵に沈めたる魔法の指輪である!」

「まあ貴方の話はちと大仰に過ぎやしませんか。」と私は口を入れた。
隣席の男は黙つて私を見たが、

「さう或はさうかも知れませんが。私には解りませんがねえ今の私に取つては、この大仰な物云ひをすることがたつた一つの楽しみなんです——それは兎も角こんな俱樂部に入り込んだりして、四年間と云ふものはモスカウで暮しました。その間の年月の早さと云つたらもうお話しも出来ぬほど夢のやうに過ぎました。今にして思へば實に苦しさ痛心しさに堪へないです。朝起きたかと思へばその日は暮れて仕舞ふ丸で小さな橋に乗つて傾斜した丘を下るやうなもので……四邊を見て居る暇もなく谷底に落ち込んで仕舞ふ。ともう夜です。睡さうな下僕が後ろから上衣を着せる。それを着て友人の所へ出掛る。煙草を喫んだり、淡茶を飲んだりして、獨逸の哲學を論じ精神の永久の光明なる戀愛を論じる。その他種々な問題に付て、牽強附會な説を戦はすと云ふ風に日を送つて居ました。併しこんな風にしてる間にも私は獨創的な自己の特色を持つた人間に逢ひました。この様な人間は自分から馬鹿になつて自分の有様を没却しようとするけれど、その本來の性質が自から願はれる。所が私と來たら全くのやうき者で柔かな蠟と同じこと、什麼形にでも捏られ次第で性來の貧しい天分は僅かな抵抗力さへなかつたです！さうかうする中に私は二十一歳になりました。で、親からの遺産を受取りました。遺産と云つたと

ところで例の後見人がこの位は與つても宜いと自分勝手に定めた額ですから、正當に云へば遺産の一部分とでも云ふところですか。私はその遺産の世話を全部解放された家奴のザアシリークドリアシエフに頼んで、伯林に出掛けました。前にもお話ししました通り、かくて三年間外國に居ました。併し、ここでも矢張り依然たる獨創力のない人間でした。第一私は歐羅巴と云ふものに付て、歐羅巴人の生活に付て全く何んにも學ぶ所はなかつたと云つて宜いのです。只彼等の本國に於て、獨乙人の教授の講義を聴き、獨乙語の本を讀んだと云ふ丈で、強ひて人と異なる點を求めたなら、この位のものでせう。私は僧侶さんの様な淋しい生活を送りました。仲のよい友達と云つては、退職した陸軍の中尉位のもので、この男も私のやうに智識を渴望して苦んで居ましたが、魯鈍な方で一向口の廻らない方でした。又ペンザや其他の片田舎から來た愚かな家族のもの共と友人になつたり、珈琲店へ入つたり新聞を讀んだり、晩になると芝居に出掛けたりしました。その本國の者とは交際ふ者も至つて少なく話をするのさへ嫌やで、私の家へは誰れも寄せ付けなかつた。併し三三人の猶太生れの無遠慮な奴共は、引つ續けに遣て來て、何ぞと云ふと金を借せといふのでした——難有い事に Got Runse (露西亞人) は欺き易いので。その中に不思議な機

會から私は先生の家へ出入りするやうになりましたと云ふのは私がある時先生の講義を聴きに出たいから私の名も控へて置いて下さいと頼みに行つたのです。すると先生は何と思つたか思ひ掛けもなく私を自分の家の晩餐に招んだのです。この先生には二人の娘がありました何方も三十に近いが小柄な勢の良い女で——實際それはねえ！——鼻の隆い髪の毛の美しく縮れた青味が、つた涼しい目の赤らんだ手に白い綺麗な爪を持つた女でした。一人はリンヘンと云ひ、一人はミンヘンと云ひました。私は足繁く先生の家へ行くやうになりました。先生と云ふのは、まゝ別に恩物と云ふでもありませんが何處かこうほんやりしたやうな人でした。講壇に立つてはてきばきと物道を立て、話しますが家に歸つて對合つての話となる。何だか舌の廻らぬ様な口振で、そして額先きに眼鏡を上るのが癖でした——併し何と云つても、えらい學問のある人でした。さてそれでふと気が付いて見ると私はいつかりんヘンに戀ひ焦れて居たやうです、そして半年ばかりの間この思が私の心に残つて居ました。併しその娘と餘り話をしなかつたことは事實です——話をすると、高に顔を見て居ると云ふ様なわけでした。身に沁むやうな本の一節々々をよく聲高く讀んで聞かせたり又こつそりと女の手を握つて見たり、そして夜になると月を

眺めながら娘の側に座つたり當て途もなく高い空を見詰めたりにして恍惚と夢を見て居るといふ位な事でした。それから又この娘は實に美しい珈琲をこしらへて呉れました。考へて見れば婦人にこれ以上の事を望み得るものでせうか。併し只一つ私の胸を苦めるものがあつた。これ等云ひ難き幸福のその瞬間に於て私はいつも何かこう胸の底を押し付けられるやうな気分がして背中から冷水を掛られたやうに悚然とするのでした。でもう私は長くこの幸福の下に堪へられなくなつて、とうとうこゝを逃げ出しました。

それから猶二年の間私は外國に居ました。伊太利へ行つては羅馬の基督變態畫の前に立ち、フローレンスのグイーナスの前に立つて限り知られぬ喜びを感じ、九で氣も狂ふかと思ふ程でした。晩になると詩を書き、日記を書いた。こゝでも矢張り人のやる様な普通の事の外行らなかつたです。こんなことで變人と云へるなら變人となるのは譯のないことですね！まあ何でせう實際自分は繪畫の趣味も彫刻の趣味も一向解らんです……それならさうと明瞭言つたら良いのですが………否處が私にはそれが言へないのです！それで仕方がない私は案内者を頼んで壁畫を見に行つたです………」

彼れは二度首を垂れて、又夜帽巾を引つ張つた。

「さて私はどう／＼又故國に歸りました。」と疲れたやうな聲で彼れは話を進める。「私はモスカウへ行つた。モスカウへ来てからの私は、丸で別人のやうでした。外國に居る中は殆んど沈黙續けで通して來ましたが、こゝへ來ると急に自分乍ら不思議なほど油に乗つて物を話すやうになりました。と同時に非常に得意になつたです。それでこの土地の親切氣のある人々からは殆んど天才のやうに見られたです。そして婦人達は心から私の議論を傾聴したです。併し私は長くこの名譽を保つことが出來ませんでした。ある朝、ひよいと私の上に悪い評判が降り掛つて來ました。(誰れがこんな事を云ひ出したものか分らないですが、何でも男の癖に女のやうな根性を持つてゐる奴が云ひ出したに相違ありません)——モスカウには随分こんな奴が多かつたですから。この悪い噂が恰も毒草の様にみる／＼芽を吹き蔓を伸ばし初めた、これを見ると私は耻かしく堪らぬ百方骨折つて、この繼れ付く綱を破つて抜け出ようと思ひました。——が一向効力がなくて……私は又そこを逃げ出しました。いやどうも此所でも私は馬鹿の本性を表はしたです。何もそんなに焦慮らなかつて、まあ麻疹が癒るのでも待つやうに靜かに暴風の吹き去るのを待つてれば宜かつたです。さうしてると、又例の親切氣のある人々は腕を廣げて私を迎へ、又婦人達は二度私の話に笑顔を向けて來るに相違なかつたですが……併し何よりも私が獨創的の人間でないこと云ふことが大缺點でした。まあ察して下さい、今や私は心に耻ぢて躊躇せざるを得なくなりました。何處へ行つても同じこと計り言つて居るのが耻かしく、昨日はアルパートで、今日はツルバで、明日はシヅツエヅキイ、グラブキイで、云ふ風に何處へ行つても同じ言を繰り返して——只喋口ると云ふ計り宜い氣になつて止め途もなく語つて居たが、こんな状態に付て稍々耻かしく思ふやうになりました……併しです、そんな話でも世間の人が聞きたいと云ふなら仕方がない様なものぢやありませんか。まあ眞にその道に成功したと云ふ様な人を御覽なさい。彼等は何の必要があつてなご、疑問を起しやしません却つてその意味のないのを喜ぶ位です。それです。から或者は二十年一口の如く、而も常に同一問題に付て、その舌を振つて居るのもありませぬ……その彼等をして茲に至らしめるのは、一に自から信する處のあること、自負の念によるのです！それは私にも亦それがあつた、自負心がありました。實際今でも全く消え失せた譯ではありません……併し私の悪るかつたのは——

つたです。さうしてると、又例の親切氣のある人々は腕を廣げて私を迎へ、又婦人達は二度私の話に笑顔を向けて來るに相違なかつたですが……併し何よりも私が獨創的の人間でないこと云ふことが大缺點でした。まあ察して下さい、今や私は心に耻ぢて躊躇せざるを得なくなりました。何處へ行つても同じこと計り言つて居るのが耻かしく、昨日はアルパートで、今日はツルバで、明日はシヅツエヅキイ、グラブキイで、云ふ風に何處へ行つても同じ言を繰り返して——只喋口ると云ふ計り宜い氣になつて止め途もなく語つて居たが、こんな状態に付て稍々耻かしく思ふやうになりました……併しです、そんな話でも世間の人が聞きたいと云ふなら仕方がない様なものぢやありませんか。まあ眞にその道に成功したと云ふ様な人を御覽なさい。彼等は何の必要があつてなご、疑問を起しやしません却つてその意味のないのを喜ぶ位です。それです。から或者は二十年一口の如く、而も常に同一問題に付て、その舌を振つて居るのもありませぬ……その彼等をして茲に至らしめるのは、一に自から信する處のあること、自負の念によるのです！それは私にも亦それがあつた、自負心がありました。實際今でも全く消え失せた譯ではありません……併し私の悪るかつたのは——

繰り返して云ひますが私は獨創的な人物ではないので——何事も中途で止て仕舞つた事です。どうせ自然が自負心を與へて呉れるなら、うんと與へて呉れるが宜し、さもなければ、いつそ、ちつとも與へて呉れなければ宜かつたですなあ。

それは兎に角先づ私はこの變化のために非常な困難を感じることにになりました。所へ持つて来て、長らく外國に滞在したので、いつとなしに全く財産を引き出して仕舞つたのです。さればと云つて、ジェリーのやうにふらくした年のゆかぬ商人の娘と結婚する氣もなかつたし、それでまあ私は故郷に引つ込みました。」と横目でちろ／＼私を見乍ら、又付け加へた。

「故郷の生活に付て先づ私の胸に感じたこと、例へば自然の美に打たれたことや淋しい中にも一種優しい慰めを感じたことなどは、除略にしようと思ひますがね。」

「宜う御座んすとも。」と私は口を挿んだ。

「殊に、そんな田舎のことはつまらんですから、少なくとも私の思ふ處ではさうなんですから。」と彼は又續けて、

「田舎に歸つてからの私は鎖に繋がれた犬のやうに憂鬱が暮しました。それは旅から家へ歸る時には色々なことを思つたです、先づ第一に春の懐かしい樺林を通つ

た時などは何ものとも瞭然分らないが何かこう甘い楽しいものが故郷に待つて居るやうな氣がして頭には色々な思ひが起り、胸は波打つのでした。併しこんな朦朧した希望の當つた例のないことは、貴方も御存知でせう。當らない位ならまだ結構ですが、反對に飛んでもないことが起るものです。思ひもかけず家畜に病氣が起る、納金が滞る競賣に付せられると云ふ様な何だの恚だのと種々六かしい事が出て来て私は支配人に手傳はしては、毎日々々整理に務めました。この支配人は名をヤコフと云つて以前置いた監督の代りに頼んだのですが驚いたことに此奴次第々々に大盗賊となりすましたです、前の監督よりは烈い盗賊でないまでも随分酷い事をしたのでして、その上私は其奴の脂を塗つた靴の嫌やな匂ひで苦められました。

それから或日の事ふいと私は以前親くした一家がこの近所に居ることを思ひ出した。退職した大佐の未亡人で二人の娘がありましたが私は馬車の用意をしてその家へ出掛けました。この日は私に取つて長く忘れる事の出来ない日です。六ヶ月の後私はこの退職大佐の二番目の娘と結婚しました……。」

斯う云つて彼は頭を垂れ空ざまにその手を上げた、
「併し今は」と彼は熱心に話を進める。

「私の亡くなつた妻に對して好ましからぬ考を私はお話するに忍びんです。それは天に誓つて出来ません！妻は實に寛大な美しい心を持つた女でした。どんな犠牲にでも身を投じようといふ愛すべき氣立の女でした。併し打ち明けて申しますがね若し彼女が幸にして死なずに居たなら私は今日こんな風に貴方とお話をすることは恐らく出来なかつたらうと思ひます。今でも私の家の殺倉にはその頃の梁が残つて居ますが私はこの梁で何度自ら縊死らうとしたか知れないです！」

しばらく言葉の切つて、

「あの梨ですれね」と彼れは又話を續けた。

「梨はしばらく穴倉の底に寝せて置かなければ眞個の味が出ないとか云ひますが、私の妻が丁度さう云つた様な性質なのです。私は今初めて彼女の眞價を知る事が出来ました。彼女と過した結婚前の或る夕の事などを思ひ出して、今は少しも苦々しい氣は起らず却つて涙組まるゝ程になりました。

彼の一家は富豪ではありませんでした。家なども古風な木造りでしたが併し居心は宜い家でした。草の茂つた中庭と手入れのしてない花園との間が丘になつて、家はその上に立つてました。丘の裾には小川が流れて、茂つた葉がくれにちらく

とそれが見えて居ました。廣い地壇が家から花園の方に續いて、其地壇の前には長い花壇に溢る許り薔薇の花が咲き匂つて居ました。花壇の兩側には二本のアカシアの樹がこの前の持主に依り螺旋形になつて生びるやう育てられたその儘の形を残して、茂つて居ました。少し離れた彼方には、手も入れず伸びるが儘に這ひ茂つた草薺の籐の中に一つの小亭が立つて居た、内側は綺麗に飾られてあつたが外側は見ると哀れな程古くなつて、今にも倒れさうな様でした。

地壇から客間に通ずる戸は硝子戸になつて居て、さて客間に入つて目に付く者は先づ隅々に据ゑ付けた丁抹瓦の暖爐、それから又右手の方には調子のくるつたピアノがあつて、寫した樂譜が積み重ねてありました。色の褪めた青い切れ地に白茶けた模様の付た安樂椅子がありましたし、又圓い卓もありました。その他陶器や硝子のカザリン時代の骨董物などがありました。壁には麻色の髪をした娘が胸に鳩を抱いて空を見上げて居る彼の有名な繪が掲げてありましたし、卓の上の花瓶には新しい薔薇の花が匂つて居ました。

どうです随分詳しいでせう。この客間の中で、又この地壇の上で私の戀の悲しき喜劇は演じられたのです。

大佐の未亡人と云ふのは意地の悪い老婦人でした。暖れ聲で始終邪慳にかみかみ云つて居る——それは仕方のない八釜し婆あでした。娘は一人はグエラと云ひました。田舎の普通の若い娘と違つたところはありませんでした。もう一人の娘がソフイヤと云つて私と戀になつた娘です。この二人の姉妹は外に小さな一つの室を持つて居ました。瀟洒した木造りの可愛らしい寢臺を並べた二人が共通の寢室でして。こゝには古ぼけた寫真帖や木犀草や鉛筆で下手に落書きした友達の肖像畫などがありました。この肖像畫の中には圖抜けて威勢の宜い容貌に、それよりもつと勢ひのある字で自分の名を書いた一紳士の肖像がありました。この男も若い時には背負ひ切れぬ程の希望を有つて居たのですが、矢つ張り私等のやうに遂になすことなくして終つたものです。又この室の中には、ゲーテやシルレルの半身像、逸語の書籍、乾枯びた花環など、その他記念物として保存されて居る色々なものがありました。

併し私は餘りこの室へ入りませんでしたし、又入るのが嫌やでした。こゝへ入ると何だか息が窒るやうな氣がしたので。そして又不思議な事に私はソフイヤの方に背中を向けて座つて居る時が、一番好きでした。いや、もつと好きなのは夕方地壇

の上に立つて色々ソフイヤの事を思ひ乍ら夢を見て居る様な氣のする、その時でした。こんな時にはいつも私はちつと入目を見詰めて居ました。そしてもう既に暗いのだが、なほ明瞭と蓋薇色の空に浮び出た木々の頂き、細かな葉などに恍惚と見えるのでした。

客間では、ソフイヤがピアノの前に座つて自分の大好きな情熱の籠つた悲壯なピートーグエンの曲を止まず繰り返して弾じて居ます。意地の悪い老婦人は安樂椅子に凭れて香氣に身をかいて居ます。食堂には青い光が洪水のやうに輝き渡つてグエラは忙しさうにお茶の仕度をして居ます。茶器は何かひとりで嬉しがつてやうに、シユツ——と心地よい音を立て、居ます。ピスケットは心持よくぼり／＼折れ匙は茶碗に當つてち／＼と鳴ります。終日烈しく囁り暮したカナリヤは急に聲を静めて何か物でも求める様に、只時々ちゅう／＼と鳴いてます。軽い透き通るやうな雲からは通り雨の雫がはら／＼と落ちて來ました。……こんな時私は兀然と座り込んで、靜かに耳を傾け、四邊を眺めます。私の心はもう限りも知れず廣がつて行く様に思はれて、自分は戀をしてるのだなと云ふ氣が、又むら／＼と浮んで來るのでした。

さて、この様な夕方の不思議な力にそのかされて私はどう／＼或る日その娘を貰ひたいと老婦人に願ひました。そしてそれから二ヶ月の後私は結婚しました。

私は彼の女を愛した様に思つて居ました……さうは思つて居ましたが併し眞に私はソフイヤを愛して居たのか何うであつたか、もう大概分つても宜い時分と思ふですけれど實際今でも私には分らないんです。彼女は優しい女でした、沈黙しい温い心の女でした。併し只一つ何ういふ原因でか神様でなければ分りませんが或は長いこと田舎に住んで居た爲めか又は何か外に理由があつたのか、兎に角その心の底に心に底と云ふものがあるならば秘密の傷を持つて居ました。もつと詳しく申せば彼女の心の底には彼女自身も又私も何と名の付けようのない終生癒え難き小さな口を開いた傷があつたのです。この傷のあると云ふことは勿論私が結婚した後から覺つたのです。私はこれに付て什麼に煩悶しましたか……併し、どうすることも出来なかつたです！

私が子供の時一羽の小鳥を飼つて置きました、或る時猫が飛び付いて爪を立てました。鳥は助かりまして、よく看護をして生命だけは取り止まりましたが可哀さうにそれから癒り切る事は出来ませんで、次第に氣抜けがした様になつて、瘦せ細つて歌

はなくなりまして……所が今度は或る晩籠の口から鼠が飛び込で鳥の嘴を噛み取ました。この二度目の打撃によつて鳥はとう／＼最後を遂げました。いかなる猫が来て私の妻に爪を加へたかは分りませんが彼の女も亦不仕合せであつた私の小鳥の如くに氣抜けがした様になつて、段々世を果敢なむ様になりました。時々彼女はこの愛ひを振り捨て、仕舞はうと務め外の空気を吸つて輝いた日の下に氣儘に愛晴らしをしようとしたらしいです。何度も試つたやうですが、矢つ張りまた舊の自分に返つて仕まうのでした。

それでも猶彼女は私を愛して居たです。もうこの上に望むところは無いと私に云つたのも幾度だか知れませんが——あ、併し！云ふも辛いが彼女の目の色は日に／＼光りを失ひました。私は思ひ煩つた擧句彼女の過去に何かあつたに違ひないと思ひ、随分穿鑿をして見ました。けれど何んにも出て来ませんでした。

もう、この點は貴方の判断に任せませう。これが變人風の人間なら、一寸肩を疎めて一つ二つ吐息をした位で、後は一本立になつて自分のやるべきことをやつたのでせう。併し私は變人風の人間ぢやありません、それだからして途梁や綱の事を考へるやうになつたのです。

私の妻は全くの老嬢式で——ピートーヴェンの曲を弾る夕方の散歩をやる木犀草を愛する友達に手紙を書く寫真帖を弄ると云つた風で——ちつとも生活の方に心を向ける事が出来なかつたです。殊に一家の主婦として活計の事を行つてく事などは出来なかつたです。實際ほんやりと鬱ぎ込んで晩方になると『曉の夢な破りそ少女子の』など、歌ひ出すのは人の妻となつた女には、どうも向かないやうです。

そんな風で、兎も角三年の間は幸福に過しました。四年目にソフィヤは初産が原因になつて死にました。不思議なことです。私は前方から、どうもこの女は子供の出来ない女だ——この世に新しい住民を興へる事の出来ない女だと云ふやうな気が始終して居たのです。

私はあの葬式の日を忘れません。それは春の事でした。私等の教區の寺は小つぼけな古い建物で、衝立などは眞黒になり、壁は剝げ落ちて床に敷いた瓦は所々擦り減つて窪んで居ました。中には大きい古風な聖畫が兩側の唱歌席に懸けてありました。柩はこゝに擔ぎ込まれて聖門の前の中央に据ゑられ。其上に色の褪めた覆ひを被せて、周圍には三つの燭臺が置かれた、かくて式は初まりました。頭蓋の所に

短かいもぢや、毛を生やして緑色の布切れを低く腰に纏つた老をぼれた役僧は、經机の前に立つて悲しさうにもぐもぐと呟いて居た。又黄色な花の模様のある百合色の袍衣を着た親切さうなしよぼく目の老導師は自分の分と役僧の捧ぐべき分と二人前の供養を務めました。

明け開いた窓の外には新しい若葉がさらさらと動いて柔かな囁きを交はして居ました。彼方の墓場からは草の匂ひが通つて来ました。春の日の輝いた光りに壓されて、蠟燭の赤い焰は力のない様に見えました。寺塔の上には雀が囀つて居た。その間には折々圓屋根の下を飛び過る燕の張り切つた鳴き聲が聞えて来た。熱心に死者のために祈禱を上げて居る四五人の百姓共の灰色の頭が塵を散らした金色の日光のうちに幾度か上つたり下つたりしました。そして細い青味が、つた光線をなして煙は香爐の穴から立ち上りました。

私は妻の死顔に眺め入つた。……あゝ！死んでさへも——死そのものを以てしても——彼の女の心に自由を興へる事が出来なかつたです。心の傷は癒らなかつたです。柩の中に横つてさへも、なほ安心が出来ないやうな風で、矢つ張り病み疲れた臆病らしい悲しげな顔をして居ました。……私の胸は痛々しさで充満になりました。

た。あゝ優しい〜心の女であつたのになあ併し死んだのは彼女に取つて寧ろ仕合せだつたのです！』

彼れの頬には紅を帯び眼は曇つて来た。併し彼れはまた話を繼いだ。

「妻が死んでからと云ふものは、私は鬱ぎ込んでばかり居ましたが、遂に氣を取り直して所謂事業と云ふものにこの身を捧げようと思ひました。そこでその州の首府へ出掛けて役所に入り込みました。併し役所の大きな室は私の頭腦を痛めた視力も亦衰へて来ました。その上色々な事件が加はつて……私は役所を退きました。それから私はモスカウへ行きたいと思ひましたが、第一に金がなし、第二に……すでにお話しました様に私は諦めて居ました。この諦めたといふのは突然に起つたやうに見えますが、一方から云へば突然に起つたのでもないのです。心の中では疾からそんな氣であつたのですが、其時はまだ頭がなほ世の桎梏につながれる事を承知しなかつたのです。願れば私は自分の思想も感情も共に優しいのは、田舎暮らしをして氣樂であつたからだと思つて居ました。……處で又一方では初め私は、近所の若い者と云はず、年寄と云はず、凡ての人々に私の物知りなこと、外國を歩いて来たこと、教育のあることなどに付て驚かれたものです。併し暫らくする中に私のこんな事には

馴れ切つて仕舞つて、却つて殆んど無禮な馬鹿にした様な振舞を見せる様になりまして、私の意見に耳を傾ける者もなく話をするにも最早前のやうに……矢鱈に敬意を表する者などもなくなつて仕舞ひました。

おさうだ、話すのを忘れてましたが私の結婚をした初めての年です。私は文學界に乗り出して見たいと思ひまして、ある雑誌へ一つの原稿を送りました——まあ私の考へに間違ひないと思ひすれば、一篇の物語と云つた様なものでした。所が暫らくするとその編輯人から丁寧な手紙が来ました。その中には色々他の事を書いた中に、私に云ふには私は貴方が十分智識を有した人だと云ふことを否定する事は出来な

い、併し乍ら貴方には少しも才氣がないと云ふ事を云はざるを得ない才氣がなければ文學は駄目である、とありました。

もう一つお話ししたい事がありますが、私はモスカウから来た或る若い男が——これも極く人の善い青年ですが——縣知事の家、夜會の席上で私を評して時世後れの古頭の淺薄な男だと云つたと云ふ事を聞きました。併し私の殆んど頑固な盲目はなかく、目を開きません。自ら自分の顔に平手打ちを食はすことは私の好まぬところですから、ねえ誰れもさうでせう。所が遂に晴れたる一朝私の目は溷然として

開きました。即ち次の様なことが起つたので。

この土地の巡查部長が私の所へやつて來まして貴方の地内の橋が壊れてますからと云つて注意をして呉れました。處で私は修葺したいにも實は一文も金もなかつたです。二人でウヲドカの瓶を平げ膳の乾魚を食ひ乍ら丁寧な部長は恰も父が子にものを教へるやうに私の不注意を責めたが併し乍ら私の境遇に同情を表して、只何か不用な材木でも使つて百姓共にあの橋を繕はせたら宜からうと勧めました。それから煙草を呑み乍ら來るべき選舉に付て話を初めました。この時郡長たるべき名譽ある候補者となつて居たものはオルバツサノフと云ふ人でそれは喋舌な淺薄な男おまけに賄賂などを取る奴でした。其上富の上から云つても門閥の上から云つても大した男ではありませんでした。で色々その話をしてる中に寧ろそれ程の氣でもなくひよつと僕はオルバツサノフ氏より僕の方が一段上だと思ふと云つたです。すると部長は私を見詰めて愛想よく私の肩を叩き乍ら氣輕に斯う云ひます。

「まあ、ヴァシリ、ヴァシリエツチさん。貴方にしろ私にしろ、あゝいふ人をそんな風に評する事の出来る身ぢやありませんよ——ねえそんな烈しいこと

が云はれますか、靴屋は何處までも靴屋で仕方がありませんさ。」

「併し、それなら是非伺ひたいが」と私は心が焦々として、

「僕とオルバツサノフ氏との間に什麼違ひがありませんね。」

部長は口から煙管を取つて目を丸くしてまるで吼える様な聲で、

「まあ面白い人だ。」

斯う云つて仕舞ひには涙まで流して、

「何て冗談を云ふ人だらう！……いや！變つた人だ！」

彼は止め度なく笑つて私の名を呼びかけては折々臂で私の肋を小突き乍らとう／＼歸るまで笑つて居ました。

遂に彼は歸りました。もうこれで十分です彼のこの言葉は實に最後の一滴でした。今迄張り切つて居た我が胸の盃は、この一滴の爲めに溢れて仕舞ひました。

私は何度か室の中を彼方此方と歩いて鏡の前に立ち止まつて久しい／＼間途方に暮れた我が顔を眺め、ゆる／＼と舌を出し頭を振つて苦い笑ひをしました。今や光を覆ふて居た曇は私の眼から落ちました。私は明らかに鏡に寫した自分の顔よりも明らかに自分と云ふものを見た。あゝ何と云ふ淺薄な取り柄のない價値ない、

特色のない男で、私はあつたでせう！」
 彼れは話を止めた。

「ツアルテールの悲劇の中に、こんなのがありましたな。」と彼れは又疲勞たやうに口を開いた。

「ある男が何でも不幸の極度に達することを喜んだと云ふ様なことです。私の運命に悲劇的なところは、ちつともありませんけれど、私はそれに似たやうなものを経験したと思ひます。私は冷やかな失望の苦いたのしみを知りました。そして朝中寢床に横はつて、静かに我が誕生の日と時とを呪ふこと、いかに甘い味あるかを感ぜました。

併し急に諦めをつける事は出来るものぢやありません。實際考へて下さい貴方だつてさうでせう。私は田舎に居て、いやな無一文の身となりました。自分の土地を整理することも出来ず、役所に入つて仕事をすることも出来ず、文學には失敗する何一つ私に適するものはないし、近所の人などは交るに足らず、本を見るのも嫌やになつた。昔大きな事を云つて毎日喋り散らして居た時分には、嫌やらしい病的な感情的な若い婦人達が、髪を振り立て、囁語のやうに「人生」「人生」と繰り返して

て居るのなどに心を引かれたものでしたが、今はそんな氣もなく、さりとて全くの孤獨を友とする事も私には出来ません……私は初めました——一體何を初めたと思ひます？——ぶら／＼出掛けて、近所の人々を訪ねる事を初めたです。もう／＼自分分のやうなやくざ者が何うなるものかと思ひ詰めて、私はわざ／＼身を投げ出して人の侮辱するに任しました。私にはもう旗亭で飯の給仕をして呉れる者もなくありません。世間からは傲慢な冷やかな態度で迎へられました。仕舞ひには誰れ一人注意する者もなく、なつて世間話の相手にさへされなくなりました。そこで私はモスカウに居た時分には、足の塵も舐めぬばかり、上衣の縁に接吻も仕兼ねない程私を有り難がつて居た愚鈍者の言ふ事に、食堂の一隅から毎時故意と賛成を表してやりました。……こんな皮肉な腹癒せをやつて、自から喜んで居るのがそれが果して樂であるのか否かさへ解りませんでした。……あ、一人ぼつちになつて仕舞つては、什麼皮肉を行つたところで、何が嬉しいでせう？

で、まあ、この年頃私は今お話しした様な風に行つて來ました。そして今もそんな風に行つて居るです。」

「何うも、こりあ、仕方がないな、眞個に。」とカンタグリニエ、ン君が睡い聲で隣

室から呟いた。「何て馬鹿だらう？夜中喋つてるなんて。」
私と話して居た男は急に夜具の中にもぐり込んで、臆々外を覗き乍ら何か注意する様に私に向つて指を出して、

「叱つ——叱つ——！」と低い聲で云つた。そして恰も陳謝るやうに、カンタグリ
ユーヒンの聲の方にお辭儀をしながら恭々しく言つた。

「承知しました承知しました。何うも済みません……彼の男も寝せてやらなきやア可哀さうです。彼男だつて寝なきやアなりません……低聲で又た話し進んだ。「寝て元氣を補けなくちやア——ねえ明日の食事を旨まく食ふ丈けのために元氣をつけなくちあ。さもう人の妨害をすることは止ませう。それに私は云ひたい丈け皆んなお話したと思ひますし、貴方ももう睡むいでせう。お寝すみなさい！」

彼れは突然向ふを向いて、枕に頭を埋めた。

「貴方のお名前だけでも聞かして頂きたいものですが……。」と私は尋ねた。

彼れはすぐに頭をあげて、

「いや、何卒、もう。」と私を遮つて、

「私にも誰れにも名は訊ねて下さるな。只運命に呪はれたる見知らぬ男がシリ
ーゾアシリエヴィツチとして貴方の御記憶に止めて下さい。それに私は特色のある人間ぢやありませんから自分丈けの名つてもものを持つ價値はないのです……それでも何とか名をつけたいと被仰るなら……シチグリ在のハムレットと呼んで下さい。何の地方にでも、こんなハムレットは澤山居ます。只他のハムレットには貴方がお逢ひにならなかつた丈けでせう……ちや、お寝みなさい。」
彼れは二度鳥の羽の寝床にもぐり込んだ。
次の朝人が来て私を起した時には彼れはもう室に居なかつた。日の出ぬ中に彼れは去つたのである。

「三十一」

チエルトツプハノーブとネドトエユスキ

暑さの劇しい夏の日の事私は小馬車に乗つて獵から歸つて来た、エルモライは私の傍に座つて居睡りをしたり鼻の邊を抓いたりして居る。これも睡むさうな犬が生命のないものの様に足下で馬車と共に揉まれて居る。馭者は頻りに鞭で馬にたかる蛇を叩く。白っぽい塵埃が軽い雲の様に車の後に揚る。叢林と叢林との間に入ると道は轍の凹凸が多くつて車輪が小枝に引きかかり出した。エルモライは急に立ち上つて見廻した……「やあ！此邊にや松鶴が居るに違えぬえだ。出て見ますべし」馬車を止めて叢林の中へ入つてゆく。すると犬が小鳥の一群を追ひ出した。私は一發砲つてまた丸を籠めやうとした時突然に後の方でがさりといふ音が高く聞えて、馬に跨つた一人の男が両手で叢林を押し分け乍ら私の方へやつて来た。「え、……一寸御たづねしますが」と高ぶつた聲でいひ出した、「何の権利があつて貴方は——その——此所で鳥をお發砲になつたのです。」此人の語は大へん早口

で激たやうでまた人を見下たやうであつた。私は其人の顔を見たが生て爾來こんな顔を見た事がない。讀者諸君の腦裏に描て戴き度い髪の毛の色の薄い丈の低い男で少し仰向いた赤い鼻と長い紅髭とを持つて居る。頂の方に真紅な布片のついた尖つた波斯帽がすつと眉の際まで蔽さつてゐる。着物は見すばらしい黄色な高加索風の上衣だ、胸に絨の藥夾いれの隠袋がいくつかついて居て縫目には汚れた銀の組紐を飾りにしてある。肩からは斜に角笛をかけて腰帯に短刀を吊り下げて居る。骨立つた鼻の鉤た栗毛馬が乗り人の重いのでよろ／＼して居ると二匹の瘦せた鬃足の白い獵犬がその足下で戯れて居る。顔眼付聲動作すべての様子が其人の烈しい勢のある放縱不羈な甚しい自尊心を現はしてゐる。その薄蒼いごんよりとした眼は菟眼のやうに横を見て居る、まるで酔淡のそのの様だ。ぐつと反り身になつて頬をふくらし鼻息を荒くして身中を震はせ威嚴を示さうとしてはちきれさうになつて居る處はどう見ても七面鳥だ。彼はまた前の問を繰り返したので、

「此處で獵をするのは禁められてある事を知らなかつたのですから」と答へると、

彼はつゞけて「貴方は私の所有地にお入りになつたのです」